

決しておのしの亡父にも劣らぬ者ぢやに、先年の輕舉合期せずして、あの朝光までも敵にしたのは、義盛が一世の不覺であつたなう。返すく、残念なことをしたなう。二つには、あの三浦の義村の如き、煮え切らぬ不覺人を一味としたのが手ぬかりであつた。……が、それも、これも、先刻いうた通り、血に酔ふことの出来ぬおれの心の罪かも知れぬ。……と思つても、やつぱり其氣にはなれぬわい。

ト歎息の思入。實阿彌は、此述懐の間に、覺えずも落涙して、平伏してゐたが、此時頰をあげて

和田

かたじけない其お言葉を、草葉の蔭で承りましたなら、亡き父、兄どもが、さぞかし感涙にむせびますでござりませう。(といひつゝ涙を拭ひつゝ)成るべくは、刃に刺らず、無辜を傷けず、公明正大なる手段を以て、撥亂反正の大功を成せさせられたい御本心を、豫て承はりをりながら、私の意趣を忍びかねて、粗忽に事を起し、お膝元を騒がし、忽ち滅亡を招きましたは、父、兄共の自業自得でござりまするのに、彼等死して後は、共に語るに足る者、上總の介どの只一人と迄仰せ下されます御高恩、有りがた涙に掻幕れまするばかりでござりまする。……しかしながら、昨夜も、愚意を申し述べました通り、御出船に先きだち、一應は御内意を假の執權陸奥守にお洩し遊ばされては如何にござりませう？二位さま御

在世の頃より御三代の今日に互り、功勞群を抜き、忠勤一日も怠ることなく、思慮深く、識見高く、學問に於ては、京師にも比類少き程の仁にござりますれば、お爲にならぬと存せば、毛頭おとどめは申すまじく、又無論他言などは仕りますまい。朝光をもお召連れと御内定遊ばしましたからは、いよく何人かに後事をお託し遊ばさるゝが、當然の御儀かと存じまする。

實朝

はて、昨夜もいうた通り、おれは世を捨てるといはぬまでも、ともかくも此鎌倉をば捨てようといふのぢや。捨てた土地に、言ひ残す後事も何も有りはせぬわい。……(ト冷然として)あゝ、廣元か！先刻、おれは酔ふことが出来ぬというたが、あの仁はまた、初めから、酔ふまい／＼と用心して、絶えず酒毒を解する薬を離さぬ男ぢや。譬へを造營に取らば、あゝした仁は、既に地形が出来、棟上げも済み、いよく間毎の造作、飾り附けにかゝつたとなると、無うては叶はぬが、御料の神木をも斫り倒し、千古の靈場をも取毀つて、新規の土木を起さうといふには、役に立つ男ではない。敵にも身方にもならぬ男ぢや。鎌倉草創の諸功臣のうち、彼れの始終恙ないのを見ても、大概は分りさうなものぢや。

ト此時、猿王又上手より入來り

猿王

はッ。只今、尼御臺さま、お潜行にて、こなたへお渡り遊ばされますとの、内々のお知

らせにござります。

實朝 なに、母上が？（ト思入あつて）内々のお知らせとあつて見れば（ト實阿彌に向ひ）一同へ申し渡し、とくと心得させ、暫らく席を避けさせておくりやれ。

和田 かしこまりました。

朝實 （犬王に）そちも退れ。……（猿王に）お入りあらば、御案内申せ。

猿王 かしこまりました。

ト皆々上手へ入る。

實朝 只一人残りて、默然と思入。例の雅樂が、又も唳々として聞え、浪の音が高い。やがて實朝は、徐かに御座疊を離れて、奥の舷へと歩み、欄干により、無言にて正面の沖を見てゐる。

ト正面の奥が、颯と電光の射したやうに輝いたと見る間もなく、小さい月かと思ふ程の一つの星が、半空を横切つて、矢の走るやうに、下手から上手へ斜に墜落する。實朝それを見送つて、口の中にて

實朝 あゝ、流星か！

ト此うち、尼御臺、古代紫の僧衣を着し、淺黄の裏頭、手に水昌の珠數を掛け、女童を隨へ、猿王に案内せられて上手より登り来る。實朝

之か見て、急ぎ席に戻り、うやくしく尼公を上手の御座疊に請じつつ、両手をつきて

これはく、思ひがけませぬお渡り。略儀御免下されませう。

尼御臺 此中は、聊か風邪氣のやうにも聞きました、それは早速に本復し、心づくしと聞いた此船の船おろしも、どうやら一わたりは濟んださうで、わらはも蔭ながら喜ばしう思うてをりました。

實朝 かたじけなう存じます。

トこれにて、尼公は女童へ「退れ」とこなし、實朝も猿王へ思入。猿王も女童も、共に會釋して、上手へ入る。

尼御臺 （思入あつて）さて、卒爾に訪問れまして、何事かと不審せられましたつらうが、餘の儀ではござらぬ。船おろしもほど滞りなう濟んだゆゑに、豫て思し立たれたる通り、結城朝光に奉行せさせ、六十餘輩を召し連れ、日ならず渡唐せらるゝやに聞き及びましたが、全くの事でござるか？

實朝 船だに進みますれば、月の中にもと存じます。此儀は、明日にも改めて御意得まする心得にござりましたに、夜中といひ、わざくの御光臨、恐れ入りましてござります。

尼御臺 さすれば、あれ程くり返し、とどめましたをも承引めされず？

實朝 御意に戻りまするは、憚り多うござりますれど、醫王山參詣の儀は、此身一つの爲ではなく、ひとへに源家永代の結縁の爲にござりますれば、まげて御許容下されたうござる。

尼御臺 いや、身一つの爲とならば格別。源家一統の爲にとあらば、名代を差遣はされても濟みさうなもの。(ト少し間を置きて)今、天下泰平のやうなれども、まだ／＼野心を抱くともがら、諸國に少からずして、隙だにあれば、それに乘じて事を舉げんとする當節柄に、輕々しい渡唐沙汰は、わらはつや／＼其意を得ませぬ。これには何か、深い仔細のあること、察します。其仔細によつては止めはしませぬ。どうぞそれを聞かせて下され。

實朝 母上のお言葉なれども、此たびの思ひ立は、全く信仰の外ござりませぬ。

尼御臺 いやなう、此母にお包みあるには及ばぬ。まことの事をいうて下され。

實朝 はて、何をおかくし申しませうぞ？

尼御臺 (思入あつて)さうおしやれば言ひませうが、(ト少し膝を進めて)こんどの渡唐については、世上一般に、けしからぬ風説をば申し觸らしをりまするぞよ。日頃は思慮分別あるやからさへも、今は半信半疑の有様。おことは、其事をば、お知りやつてござるか？

實朝 (うなづきて)さ、ほのかには聞き及びましたが、もとより根も葉もなく、たはいもないこと。

尼御臺 よもや、母上には、それをば信とは遊ばしますまい。

さ、わらはは、信とは思ひませぬ。なれども、此春の行きが、りこのかた、おこと、義時との仲たがひは、たが目にも明白。さらぬだに、和田一族の事あつてからは、相州一家は、將軍家と折あひあしと、世上一般に噂の折から、思ひよらぬこんどの催し。人々いよ／＼不審を抱く處へ、かて／＼加へて(ト聲をひそめて)彼の三首の歌を證據に、京方と謀じ合せて、北條一家を討滅せんす陰謀がおはすなんと……

トいひかける。これにて、實朝何事かいはんとする。尼公はそれを止めて

はて、わらはは、信じませぬぞ。……わらはは、信ぜぬども……専らの風説。……證據が證據ゆゑ、上手に事を捌かぬときは、一大事となりまするぞ。(ト形を改めて)これ、故二位どのは、なにゆゑに屢、任官を辭しめされたか？……何ゆゑに禁裡とは遠ざかり、攝關のともがらに虚位を擁かせ、名を棄て、實を取り、天下一統の基を此鎌倉にて開かれましたぞ？いふまでもなく、公家政治の頼みがたいのを、とうにお見抜きあつたればこそでござる。これは今までも、幾たびとなう話した事ぢや。よもや、京方の煽動に乗つて、今さら逆戻りの公武合體などを思ひ立ちめされうとは思ひませぬ。……なれども……(トいひかけて、思入あ

つて)どこにか火がなうては、立たぬ煙とも見ゆるアノ三首の歌……

トいひかけるを止めて

實朝 母上、しばらく。……成る程、あの三首の歌は、仙洞御所への私のお返事には相違なければ、それは今よりは三年も前、只かたじけなき御内勅に對し奉つて、二心なき由を誓ひ申したまでの事。若し公武の兵を合せて、事を擧げん下心などがありましたなら、和田一族が謀叛の折に、なんで手を束ねて見てをりませうぞ？ 其お疑ひはお晴らし下さりませ。

尼御臺 いや、わらはは、疑ひませぬが。……が、既にかうした浮説が立ち、人皆疑ひ危ぶむからは、其危ぶみが原となつて、如何なる珍事が起るやも圖りがたく、或ひは又、其珍事をば機會にして、諸國にも謀叛起り、かて、加へて、日頃さうした騒動をば待ちに待つ京方から、不意に大軍が攻め下りてもしようものなら、故二位どのが、五十年の間、……血の涙、血の汗を絞られたる大業も、水の泡同然となつて……

トいひさして、少しく聲をうるませ

源氏も……北條も……滅亡は目前でござるぞ。……よしさうまでにはならずとも、内輪の騒動はまぬかれがたく、わらはの心勞は限り知られませぬ。……

ト暫らく言葉を繼ぎかれてゐたが、やがて

實朝 わらはの頼みでござる。こんどの渡唐は思ひとまつて下され。

實朝 母上の仰せながら、それがしに異心があらば兎も角も、氣もない上は、其御心勞には及ばぬ筈。かりに、此浮説の爲に、何事か起るにせい、根なし事であるからは、立地に鎮まりませう。なほ御懸念とあらば、明日義時に會うて委曲を盡し、疑惑の根を絶たせませう。何卒渡唐の儀は御許容下されませ。

尼御臺 さア、切なる望みぢやといふことを、察しませぬではなけれど……

トいひさして黙つてゐる。實朝や、氣色ばみて

實朝 すりや母上には、異心のないのを御承知あつても、尙ほおゆるし下されませぬか？

ト怨めしげにや、手強くいふ。

尼御臺 (しづかに) 只今は許されませぬ。せめて世繼の出来るまでは。

實朝 「せめて世繼の……と仰せあるは、船たびの危さなどをおぼしめされての御懸念でござりまするか？ 若し然らんには、萬一の場合には、丁度京都よりお召し戻しのアノ公曉をば、跡目に直されても、相濟みませう。……母上、なにとぞ此望みだけは、お許し下され。

ト實朝思ひ入つたる體にて、頭をさげ、兩手なつきて頼む。尼公俯向いて黙つてゐる。實朝は覺えず向うを見つめ、獨語のやうに

六十餘州の總追捕使といふのも名ばかり！ 天下の將軍といふのも名ばかり！ たま／＼思ひ立つた渡宋の望みさへ遂げられぬか！

ト慨然たる思入。尼公は尙ほ默然としてをり、やがて初めは俯し目にちに極靜かに

尼御臺

其述懷は尤も至極ぢや。……おことの心中は、よう察してをります。頼家が自暴自棄の
アノ晩年を思ふにつけて、おことの此頃の心の中を推量せぬてはなけれども、一天下の重
きを以て任せねばならぬ身は……匹夫匹婦の夢にも知らぬ……辛さやわびしさを忍ばねば
なりませぬ。

トいひつゝ、徐かに膝を進めて

これ、打明けておしやらずとも、母でござる。……

トいひかけたが、忽ち落涙の體にて

何の、察せいでをりませうぞい？ これ、おことは、此世をあぢきなう思ふ餘り、家をも
母をも、皇國をも振捨て、唐土に身を置いて、餘生をば送る所存であらうが？……

ト涙聲にていふ。實朝はじつと俯向いたまゝ、黙つてゐる。

將軍の名はあれど、政道の大方は執權の手心任せ、いはゞ飾り物に過ぎぬ境涯。濶達な心

から、日頃それをあぢきなう思うてをらるゝとは、とうに見抜いてはをるものゝ、こゝが
今いうた天下の重きに任ずる身の勤めてござる。わらはの、今改めていふ事をば、どう
ぞ、善う聞き分けて下され。

トこれにて實朝も愁然としたる思入。

成る程、あの義時の振舞が、折々目に餘つたこともあらう。身最眞をして此母が、庇ふと
のみ思ひめされたこともあらう。が、こゝが政道の是非ない處でござる。……一代の英雄た
る父御のお薨れなされてからは、名をも實をも兼ね具へて、將軍となるべき者の、又とあ
らう筈がないゆゑ、権力はいつとなく執權職の手に移つたるが、……中頃わらはが思うたに
は、……いつまでも父御の志しを繼ぎ、源氏の血統で此國を治めうとならば、將軍と執權と
は、長く此姿で竝べ存じ、朝野、内外の怨みの的となる事は、すべて執權に掌らせ、爲損
じあるとも、將軍には累ひの及ばぬやうにと思案を定めて、わざと義時が專斷をも大目に
見た其仔細は（ト膝を進めて）油斷のならぬ京方の底企を、見抜いたからのこととござる。な
れば、義時が我意我儘とお見やるとも、畢竟は家、國の爲であり、又おことの爲でもある。
ぢやによつて、こゝの道理をば善うわきまへ、どうぞ渡唐をば思ひとまつて下され。

トしみ／＼といふ。實朝思入あつて

實朝 名と實とを能う兼ねぬ不肖の身がくちをしうござります！

トいつたきりて、暫く無言でゐたが、やがて

母上、源家の血統を絶やすまいといふ御懸念ならば、アノ公曉を私の代りになされて、どうぞ、それがしには、曲げてお暇を下されませ。

トはつきりといふ。これにて頭を垂れてゐた尼御臺は顔を上げ、やゝ氣色ばみて

尼御臺

これは異なことをいはるゝ。公曉は既に出家までさせたものでござる。今更何しに還俗をばさせませう……

トいひかけて、じつと思入あつて

あれを先頃呼び戻したのをば、只管わらはの愛着ゆるぢやとても思うてかは知りませぬが、これには深い仔細のあることござる。京師に手離しておく時は、いつ、何者に教唆されて、其手先に使はるゝやも知れぬゆゑござる。はて、これとてもまた家の爲ぢや。二つには、おことの爲をば思うての事ござる。

トいひさして、又思入あつて

あの義時を只一圖に快からずおぼすのも、畢竟は、胸の底に、さうした僻み心があつて、

爲を思うての沙汰をも、身最厚、依怙最厚とばかりおぼすからぢや……これ、これほど事を分けていうても、聞入れては賜はりませぬか？ 思ひとゞまられませぬか？ 家よりも、國よりも、一身が大事でござるか？

ト實朝、尙ほ俯向いたまゝで、黙つてゐる。尼御臺は、之を見てむつとしたる思入、儼然となりて

此上は是非に及びませぬ。家、國の安危、政道の大義には易へられませぬ。わらはにも思案がござる。

ト手強く、きつぱりと言つて、實朝の返辭を俟つ。ト實朝も、――蒼白

な――面をあげて、きつと尼御臺の顔を見る。しばらくは、双方沈痛に、目を見合ひたるまゝにて、無言でゐる。

涙の音が高く聞える。上手では又雅樂を――低く淋しく――奏しはじめた。

ト尼御臺は、忽ち類りに落涙の體で、袖を以て面を掩ひ、やゝしばらくは獻歎してゐたが、やがて漸く自ら制して

如何に天下の爲ぢやとはいへ、……いつまで此苦をば受けてゐませう？ わらはは覺悟を定めました。……頼家、大姫にも死に別れ、一幡や千壽の淺ましい死に目をも見て、つくづ

く此世をばあぢきなう思うてをつたに、今又おことにまで見棄てられ、生別れの辛さばかりか、いやましに亂れゆく世を見るかと思へば、此末いつまで、何を頼みに、浮世まじらひをしませうぞ？ 命永ければ恥多く、悔い多し。……あまり永う生き過ぎました！……もう何もいひませぬ。心任せにしめさるがよい、さらばでござる。……南無……彌陀佛！

ト涙を拭ひつゝ、靜かに珠數をつまぐり、席を立ち、すぐに上手媽公近くまで行く。

實朝 (微かに苦悶の影を浮べた顔を擧げて) あゝ、もし、暫く……母上、暫くお待ち下され。

尼御臺 お止めあるは……

ト立ちながら徐かに振り返りて、言葉靜かに

今いうた事を承引あつてか？

實朝 それほどに仰せある上は、是非に及びませぬ。……思ひとゞまりませう。

トこれにて尼公は徐かに元の席に戻りて、更に言葉靜かに

尼御臺 それ聞いて安堵しました。善う聞き分けて下された。嬉しうござる。禮をいひます。……

トいつて、俯向いてゐる實朝の顔をじつと見おろして

とはいへ、常日頃、唐土の風俗をお好きあつて、かりそめの器具調度をさへ彼方^{かた}のを用ひめさるゝ程、それほどになづかしがつてゐめされたものを、家、國の爲とはいへ、その只一つの望みをすら遂げさせぬかと思へば、此胸が術なうござる。

ト涙をぬぐふこなし。

實朝 (冷靜に) そのお氣づかひは御無用でござります。何事にもさしたる執着のない我身は、かう

いふ折には心安うござります。

尼御臺 したが、一旦表向きに觸れいだされ、既に船おろしの祝ひまでも濟んだものを、只このままにもされまいが、その始末はどうしたもの？

實朝 いや、それも御懸念には及びませぬ。幸ひまだ波打際まで下りたばかり、十分には浮ばぬ船。何としても深みへは出ぬと言ひ觸らし、このまゝ、いつまでも濱邊に棄ておいて、朽ちさせませう。

トこれにて、尼御臺はうなづき

尼御臺 では、それも安心ぢや。……(ト思入あつて) すれば、明日又改めて會ひませう。

ト席を立ちかけたが、悄然としてゐる實朝の姿を見て立ちかかれて

あゝ、しかし、どうやらおことをば、生理^{いんきょう}にでもするやうな心地がして……

といひさして、又しばらく落涙の體。實朝は只默然としてゐる。やがて、實朝は座右の驛路を取つて振鳴らす。

ト上手より猿王出て来る。これにて、尼御臺は涙を押拭ひつゝ立つ。

實朝 御案内。

ト小聲にていふ。猿王心得て先きに立ち、上手の幕をかゝげ上げる。尼御臺は改めて實朝へ目禮して、徐かに上手へと進む。實朝は席を離れ、幕ぎはまで送り、頭をさげ、手を突き、敬禮しつゝ見送る。尼御臺は幕の内へ入る。猿王も従いて入る。

只ひとり残りたる實朝は、やがて徐かに顔をあげ、立ちあがり、元の席近くへ戻つたが、坐りもせず、立つたまゝ沖の方を詠めてをり、やゝあつて、徐かに下手へと進み、手前の階子を攀ぢて艦甲板に登り、艦帆柱の奥の舷の欄干に身を凭せて、何處を宛ともなしに沖の方を詠めてゐる。

ト上手の幕をかゝげて、和田實阿彌しづかに出て來り、此體を見て、懸念の思入。やがて階子の下まで進みつゝ上を見上げて、中音に

和田 御前。……御前。

ト二度呼ぶ。これにて、實朝は欄干に凭れたまゝ、振返りて、しづか

に

實朝 實阿彌か？……あゝ、ちやうどよかつた。今呼ばうと思つてゐたところぢや。月はよし、

和ぎはよし、聊かの波さへ立たず、遙かの沖までが湖水のやうに見ゆる。四年以前、おのしたちと釣舟を浮べつゝ、月を賞したのも、丁度こんな晩であつたなう。こよひも小壺近くまで漕ぎ廻つて見たい。小艇をば下させておくりやれ。

和田 はッ。かしてまりました。

實朝 しかし、水夫には及ばぬぞ。おのしとおれと只二人きりて乗るのぢや。

和田 はッ。心得ました。

ト一寸不審げの思入あつて、座を立ち、上手へ行かうとする。

實朝 こりやく。

和田 はッ。

ト又すまふ。

實朝 伶人どもに吩咐けて、萬秋樂を奏させい。

和田 はッ。かしてまりました。

ト實朝は、同じ立身のまゝにて、又沖の方を詠めてゐる。實阿彌は不

密の思入にて、徐かに上手へと行きかける。

第三場 小壺の沖中

見渡す限り、前の方一面(平舞臺全部)は小壺の沖中の心。正面に見ゆる陸地(背景)は、小壺の沖中より遙かに山比が濱べを見やりたる體にて、上手のザツと前寄りには、磯馴れひよる松を幾株となく戴きたる飯島が崎が、間近く黒々と突き出てゝなり、其の奥、今の豆腐川あたりの處には、多くの漁家が朧げに見え、篝火處々に燃え、そこに、前の場の唐船の輪郭が——二木の帆柱には夥しく唐風の旗を繡し、無数の唐燈籠を吊したれど——距離遠ければ、黒々と見え、それより更に奥の方は、正面の中央へかけて、鎌倉材木座附近の港口の體にて、「數百艘の舟ども大津の浦の如くに集ひ」、又それよりも奥の方には「千萬宇の宅軒を並べて、大淀のわたりに異ならざる様」其家々の燈火と月の光りとにて、おぼろげながら見え、それより更に下手へかけては、人家は次第に疎らであるらしく見ゆれど、砂濱の廣々としたる體夜目にもい

和田

こりや何となされますぞ?

あゝ、もし……御前!

御前!

どうなされましたぞ?

ト實阿彌は、尙ほも振拂はうとする實朝をやうくのことと抱きとめ、やつと船中に引きすゑて、尙ほ後ろから抱きながら、顔を覗き込みて

もし、お心が狂はせられましたか？ 但しは御本性でござりますか？ 或ひは世をはかなませられての御生害か？

トまては一氣に言つたが、忽ちこちらへかれて、はらくと落涙し

御尤もでござります！ 御無理とは思ひませぬ。お言葉次第で、わたくしも直にお伴をいたします。強ちお止め申すのではござりませぬ。只、お覺悟遊ばすに先きだち、只一言、お別れのお言葉をば、下しおかれませ。もし！ もし！

ト泣きながらいふ。此間、實朝は惘然として黙つてゐたが、此時

我れに返りたる體にて、しづかに實阿彌を制し

實朝

もうよい、もうよい。……大事ないく。手を離せ。

トこれにて實阿彌は、尙ほ不安さうな思入にて、抱いてゐた手を離し、泣きながらも油断せず、實朝の様子を見守つてゐる。實朝は十分冷靜の態度に戻つて

あゝ、ゆるしてくれ。我れながらおどましい振舞をした。もう決して懸念には及ばん。

靜かに座を收め、とり亂した姿を取りつくろひなどして歎息しつゝ、

船に乗るまでも、乗つてからも、決してこんな氣はなかつたのぢやが、今がたの述懐で、

われとわが述懐に感動して、はじめて心の酔ひを覺え、つい女々しうなつてゐた處へ、冴え渡るアノ月の光り！ あの靜かな奥深い浪の色！ あゝ、月めがおれを誘ひをつたのぢや。魂ひがふとあこがれ出ようとしたのぢや。……さぞ驚いたであらう。堪忍してくれい。……

トこれにて實阿彌はやゝ安心の思入。されど尙ほ愁然として頭を垂れてゐる。

これを思ふと、いつぞやのアノ狂女が、月の佳い晩となると、龍宮へ往くというて、ともすれば、浪間へ入らうとするやら聞いたが、成る程、無理もないわい！

トこれにて實阿彌は、感慨に堪へかれたる思入にて

和田

御述懐の餘りとは申しながら、狂女によくへさせられての其お言葉は、餘り物體なうござります。源家正嫡の將軍家、日本六十餘州の兵馬の頭領とはお名義ばかり、御政道の大事となつては、何一つお心の儘にはならず。若しまた強ひて御意通りに遊ばされるれば、いつ、どこから、どんな毒手が下るやも圖られぬお身の上であるのみか、御母公さまへの御孝心から、たつた一つの御今生のお望みをさへも捨てさせられます。此世をばあぢきなうおぼしめします筈。しかしながら、狂女は愚痴無智の極み、何一つ辨へがなければこそ、自

他をも顛倒し、前後をも忘します。御前は聰明睿智にましまし、自他を知らせらるゝところが深いゆゑに、それゆゑお身をも捨て、世をも捨てようと遊ばされます。彼女と御前とが、どうして一つになりませうぞ？

ト涙を呑みつゝいふ。

實朝

(しづかに、冷かに) いや、生中の智慧があつて自他を知るといふことこそ、人間が身の不幸ぢや。よきにつけ、あしきにつけ、其裏や巢が見えずいて、何事にも、身や心が打込まれぬ。おれなどは、今の世の不具者ぢや。父祖の志しを繼ぐとも出来ぬば、西行の跡も追はず、蓮生が眞似も出来ぬ。酒色に慰まうとすれば、風雅が否み、和歌蹴鞠に忘れようと思つても、大望めが嘲りをる。血に酔ふとの出来ぬ胸には、不仁を敢てする勇氣もなく、生中の分別が邪魔となつては、佛の道に入ることも叶はぬ。せめても、まだ見ぬ大世界の大自然の中に身を置いて、と天下の周遊を思ひ立つたも、今思へば、これも又一時の氣休め。大といふも、小といふも、つまりは人間の思ひなしぢや。斯うして小舟にちこまつて、濱近う見る月も、あの唐船を千萬里の波濤に浮べて、大海原で見る月も、本來の光りには變りのあらう筈もない。もうとうに死んでゐるのぢやと悟つたなら、自ら殺さうとするにも及ばず、未練らしう、さもしらしう味ひ残した行樂を漁らうとするにも及ばぬ。今

のおれのおどましい振舞は、全くの出来心ぢや。もう決して二度とするとはないわい。

トおちついたる調子にていふ。此以前より艇は、波のまに／＼ゆるや

かに漂うてゐる。此間、實阿彌は始終頭を垂れ、折々涙を拭うてゐる。

和田

(なほ泣きながら) 御自身のお爲ではなく、天下萬民の爲をおぼしめされて、一旦はお心を寄せられましたなれど、其仙洞御所とても、頼もしからず、さなくも、御母公様との御血縁は、切つても切れず。後ろ楯と遊ばさるゝ頼もし人は、一人もないゆゑ、不世出の御器量も、御大望も、行はせられう便宜もなく、只一時の、物體もない置き物、飾り物となつて、空しう老い朽ちさせられますかと思へば、無念至極でござります。せめても、親や兄どもが、輕卒に事を誤らなんだらば、と思ひ出さぬ日とはござりませぬわい！

ト泣く。實朝は、いよ／＼落ち着きたる體にて

實朝

はて、もう歎くには及ばぬ。只今の發作によつて、おれは却つて此胸が輕うなつた。もう死なうとも思はねば、生きてゐるのを辛いとも、死ぬるを怖ろしいとも思はぬ。しかしながら、此不思議な心境に入つたも、畢竟はおのしといふ心の友があればこそぢや。生前にさへ、おれの心を知る者はおのしの外にはないからは、死んだ後に、おれを正しう傳へてくれる者は、尙ほさら、おのしの外にはあるまい。おのしとおれとは(トいひかけて、一寸涙聲に

なつて身は二つぢやが、心は一つぢや。

トいひつゝ、實阿彌の手を握りしめる。實阿彌は、何もえいはず、聲を放つて泣く。

此間、艇は、尙ほ浪のまに／＼、漂うてゐる。

萬秋樂の哀音はつゞいてゐる。

長谷寺邊のらしい梵鐘の音が、陸の方から聞えて来る。

ト下手より、二人が乗つてゐる小艇の前へ、一人の女の溺死體が流れて来る。これは、例の狂女の死骸なのである。衣類は以前のまゝにて、仰向けになり、笑ひ顔をしたまゝで、ゆるく靜かに漂うて来る。

實朝は、此間、どこを詠めるともなく、海面を見てゐたが、忽ち之に目をとゞめ、やがて口早に

實朝 實阿彌！ 實阿彌！

ト呼ぶ。泣き伏してゐた實阿彌は、急ぎ涙を押拭ひながら

和田 はッ。

ト顔をあげる。此時死骸は、すぐ舷の傍を、上手へと流れる。

實朝 あれを見い。あれは、たしかに、此間の物狂ひぢや。衣類に見覚えがある。水死しをつた

ものと見ゆる。……止めい。早う止めい。

トこれにて實阿彌は、急ぎ權を取つて艇を進め、既に一間餘も流れ過ぎたる死骸に追ひつき、權にて之れをおさへ、忽ち舷へ引寄せらる。

和田 成る程、仰せの如く、あの狂女めにござります。衣類もあの時のまゝでござります。ともかくも引上げまして、水を吐かせませう。

ト既に死骸に手をかけようとす。實朝止めて

實朝 いや／＼、まて／＼。(じつと死骸を見て)とうに事切れたと見ゆるのに、あゝ、さも嬉しさうな此笑み顔。龍宮へ到り着いたとも思つてゐるのか？ (ト暫く詠めてゐて)あゝ、迎も助かりさうにもないわい。

和田 ではござりまするが、このまゝに押流しますのも、酷いやうに存せられます。

實朝 いや／＼。我れに返らせたら、酷いわい。……流してやれ、流してやれ。

トこれにて實阿彌、權の手をゆるめる。死骸は波のまに／＼上手へと流れつゝ、やがて見えなくなる。實朝立ち身にて、じつと其行くへを見送る。實阿彌も宜しく思入あつて、徐かに權を取り直す。

淋しく悲しき萬秋樂は尙ほつゞいてゐる。月はます／＼、冴え渡つてゐる。

唐船の燈籠や篝火は、今は殆んど残り少なな消えて、船の大きな、眞黒な輪郭が、更に物すごく際立ち、さながら一種の巨大な惟鳥か何かのやうに見えてゐる。

幕

三九〇

第四幕

第一場 鎌倉御所中門廊

正面、中央より上手へかけて四間の間(常足の三重)は御所中門廊内侍ひの體にて、上手の奥よりやゝ斜に鍵の手に前へ折れてなり、一間毎に柱を立てたる總板敷、其内面の周邊には上げ疊。折廻して廣縁附、葎(上げ格子)は悉く引上げてあり、廣縁前、中央よき處に沓脱の低き臺あり。鍵の手に前へ折れたる部分は、悉く葎をおろしある故、内部見え

ず。此内侍ひと直それに接する幅一間の築地との間には、目かくしの袖板塀あり。其下手、直線に二間の中門。其下手は、見える限り、築地。其前の方(下手の舞臺端)は別の附近の築地の一端。ずつと上手の前の方、舞臺端は廐の建物にて見切られあり。其廐の軒に近く一本の紅梅の老木、今既に三分の花を着けたり。時は陰曆正月廿七日。酉の刻(六時)近き頃。築地の屋根にも、廊の屋根にも、庭にも、梅の枝にも、雪既に多く積り、今尙ほちらちらと降りてなり。庭上には上手と下手とに庭籬。二重には燈臺一基。こゝに二重下手、上げ疊よき處に、關の左衛門の尉政綱、又同じ疊のやゝ上手には狩野の七郎光廣、共に烏帽子、直垂にて宜しく住ひ、又廣縁のやゝ上手には武田の五郎信光、鎧姿にて腰を掛け、下手中門際には隨兵二人、左右に分れて地上に胡座し、雜式四人は、おのゝ篋を持ちて、中門の中外より正門へかけて、道筋(花道)の雪掃除をしてゐる。

名残の星月夜

武田 折も折、わるい物が降つてまゐつたと存じてをつたが、それでもどうやら晴りさうでござる。御覽なされ、いつの間やら、もう二尺ほども積りました。

三九一

關 成る程。しかし、雪は豊年の瑞兆ぢやと申すからは、これも御祝儀の一つでござらう。

狩野 時に、御拜賀の御劍のお役は、右京兆義時どのと承はつたに、いまだに御参入がござりませぬな。

關 されば、先刻御家來の深見ながしが参つたのは、多分其儀についてござらう。

武田 何にせい、思ひの外に、お手間が取れまするな。

關 何か、大江の入道どのが、折入つて言上しめさることがあるげにござる。最前、例になく、あたふたと参入せられたには、何か仔細がなうては叶ひませぬ。

狩野 さういへば、先年も、お上が中納言から左近衛の中將、つゞいて左近衛の大將、それから内大臣と間斷もなく御昇進遊ばされた折も、かやうな違例の御昇進は、故將軍の御遺志にも悖り、又御當家長久のお爲でもない、御諫争に及ばれたとか承はる。いよ／＼右大臣とならせられた今この日の御拜賀についても、又何かむづかしいことを申し上げらるゝかも知れませぬ。

關 當今、上の面を冒して、御異見申さるゝ御仁はといへば、右京兆か、あの入道どのか、結城朝光どの位ぬのものでござらう。其結城どのも、けふは如何にも力なげに、後れて参入せられました。

狩野 其筈でござる。聊かの忌の爲に、御拜賀のお伴に洩れられ、定めし残念でござらうよ。

トこのうち上手奥より若狭の兵衛の尉忠季、烏帽子、直垂にて出て來り、二重上手の上げ疊に住ふ。

關 まだ御出門には間がありますかな？

若狭 いや、もはや程もござるまい。

狩野 なんてお手間が取れまするな。

若狭 さればでござる。只今、大江の入道どのが不思議の御諫言を申し上げられた爲でござる。

關 して、それはどんなことを？

若狭 先刻、御前へ罷り出でらるゝや否や、先づ頻りに落涙のせられて、さて申さるゝには、「覺阿成人の後は、いまだ曾て涙を流したる覺え御座なきに、只今尊顔を拜するとやがて、かやうに落涙仕りまするは、只事とは存ぜられませぬ。何卒こよひの御拜賀は、お止まりあらせられたし」と申され、それより、上とも、仲章どのとも、押し問答數回に及び、「せめても、お束帯の下に腹巻なりとも召させられて、御拜賀ありたし」と申されましたが、それとても、仲章どのが、「古例に背く」とて拒みめされ、入道は、如何にも、本意なげに、口をつぐまれました。

狩野 さて〜、それは不思議なことをごさる。如何さま、あの入道の泣かれたといふことは、つひぞまだ聞いたことがござらぬわい。

若狭 不思議はそればかりでござらぬ。(ト聲をひそめて)折も折、物も物、こよひのお儀式用のお太刀が、何としてか、お櫛元からボキリと折れました。早速取り換へて差上げられましたもの、忌はしい限りでござる。

ト苦々しげにいふ。皆々眉をひそめる。

いや、まだござる。今朝、秦の公氏どのお髪あげに参られたところ、上にはお鬢の毛を一筋抜かせられ、「これは形見ぢや」と御意あつて、賜はりましたげな。これは公氏どの自身、眉をひそめての話でござる。

關

さて〜それは、重ね〜……

ト三人顔を見合せ、

いまはしい儀でござるなう!

トこの時、中門内にて「御出御でござりますぞ」と呼ぶ。

これにて二重の面々、皆庭上におり立ち、よろしく膝まづきて、出御を俟つ。武田の五郎は、ずつと下手へ廻り、門際の隨兵を後ろに從へて、地上に膝まづきて控へる。雑色四人は、ずつと上手へ廻り、關、

狩野、若狭の背後にうづくまる。

ト中門の奥より雑色二人松明を持ちて出る。其の後より民部の大輔廣綱、長尾の新六定景、太夫の列官景廉、境の兵衛の尉常季の四人、烏帽子、直垂にて續いて出て、正門への道(花道附際)に宜しく居並ぶ。次に又雑色二人松明を捧げて先きに立ち、續いて老懸の冠りに鬨腋の袍を着し胡麻を肩うたる隨身二人、弓を携へて出て、其後より右大臣實朝(二十八歳)東帯にて、更に二人の隨身を從へ、伊豫の少將實雅(衣冠)に裾を捧げしめつゝ出る。其後より文章の博士仲章(衣冠)御劍を捧げ、右馬の權の頭頼茂(同上)、伯耆の守師憲(同上)つゞき、又其後より大江の廣元入道覺阿、直垂の上へ袈裟を掛け、結城左衛門の尉朝光、烏帽子、直垂にてつゞく。更に其後より秋田城の介景盛、伊豆の左衛門頼定、共に鎧姿にて、隨兵二人を隨へて出て来る。

實朝は、中門を出ると、徐かに花道の方へ二三步進んだが、ふと上手の紅梅の花に目を留めたる思入にて立ちどまり、隨身の一人を顧みて、「あの梅を一枝手折らせよ」と聞えぬ程の小聲にて吩咐ける。これにて隨身の一人上手へと進み、そこにある雑色に小聲にて命ずることあり。雑色の一人立ち上りて、梅の小枝を折取りて渡す。隨身それを受取り

て、立戻り、膝まづきて實朝に献る。此以前、實朝の立ちどまると共に、陪従者はおの／＼よろしく居並ぶことあり。廣元入道と朝光とは上手へ廻り、關、狩野の膝まづきてゐる處より、少し下手寄りに膝まづきて、出門を見送る心にて、控へてゐる。
ト實朝は、梅の枝を受取りて、暫くそれを詠めてゐたが、朝光の方を見て

實朝 朝光。朝光。

ト呼ぶ、これにて朝光膝を進める。

朝光 はッ。

實朝 先刻もいうた通り、公家の古例がむづかしいので、伴れて行きたくても、伴れて行かれぬ。

おことも残念であらうが、予も何となう残りをしいわい。何か其代りに、と最前から思つてゐたが、ふと今、此梅を見て一首浮んだ。これをおことに取らずぞ。

朝光 はッ。ありがたく存じ奉ります。

ト雜色の方を顧みて

たそござる？ お硯箱を。

トいふをとりめて

實朝 いや／＼。筆には及ばぬ。これを。

ト梅の枝を渡す。朝光受け戴きて

朝光 はッ。

實朝 (中音に) いで、いなば、主なき宿となりぬとも、軒端の梅よ、春を忘るな。

朝光 (同じく中音に) いで、いなば、主なき宿となりぬとも、軒端の梅よ、春を忘るな。

ト繰返し了りて、覺えず傍らの廣元入道と顔を見合せて眉をひそめたが、やがて

かたじけなく頂戴仕りまする。

ト平伏する。これにて實朝は、一寸左右へ思入あつて、しづ／＼と正門(花道)の方へと進む。やはり以前の順序通りに、眞先に雜色二人、松明を持ちて進み、其次に民部の大輔、長尾の新六、太夫の判官、境の兵衛の尉四人、つゞいて又雜色二人、松明を捧げ、隨身二人、其次に實朝及び隨身、實雅、仲章、其他の衣冠連、其次に鎧姿の者全部——此中に武田の五郎も加はる、——隨兵四人、雜色四人——其の中二人は松明を持つ、——其後につゞきて、關、狩野、若狭の三人、廣元入道と朝光とに會釋して、附いて入る。

廣元入道と朝光とだけ残る。

と入道は、徐かに立ち上り、やがて朝光に目禮して、すぐに正門(花道)の方へ行きかける。朝光も同時に立ち上りて

朝光 あいや、暫く。……聊か御意得たいことがござる。

覺阿 なに、われらに？

朝光 いかにも(ト四下を見て)なにとぞ暫時。……あれへ。

ト二重へこなし。これにて二人とも二重へ上り、朝光は入道を上手へ請ずる。

入道には、只今のお歌を、何とお聴取りなされましたぞ？

覺阿 (やゝ間を置いて、しづかに)禁忌のお歌とこそ承はりました。

ト慨然としてゐる。

朝光 (思入あつて)先刻承つた公氏へのお形見といひ、それがしへの只今のお歌といひ、頻りに胸騒ぎがせられます。それにつき、折入つて承りたい儀がござりますが、何と、お洩し下されませうか？

覺阿 何事かは存せぬが、御遠慮なう御申下され。

朝光 餘の儀でもござらぬ。最前、上へ御諫言の折、頻りに御落涙なされたには、何か深い仔細のあることゝ存ぜられる。正八幡、決して他言は仕らぬ。其の仔細、ひそかにお打明け下さるまいか？

覺阿 あゝ、其儀でござるか？ いや、あれは(ト一寸間を置いて)先刻御前にて申した、通り只何となう裏悲しう覺え申したまでの事で、これと申す何等深い仔細あつての事ではござらぬ。さもなれば、強ひてもお抑留申し上げてござつたが、畢竟は老いの思ひ過し、取越し苦勞と愧ぢ入り、もだしましてござる。

朝光 押し返してお訊ね申すも異なるものでござるが、近頃何か(ト思入あつて)お聞き込みの事はござらぬかな？ ほのかに承る所によれば、二月ばかり前の或夜半、御所内に女姿の怪しき者忍び入り、御寢所間近を徘徊したるを、宿直の者見出し、引捕へんとせし處、飛鳥の如くに逃げ去つたとやら承りましたが、右は眞でござりませうかな？ 右につき、何かお思ひ當りの儀はござりませぬかな？

覺阿 いや、只今承るのがはじめて。一向に心當りともござらぬが……(ト思入あつて)あゝ、それにつけても、こよひの御拜賀、どうか何事もなう、早う相濟めばよいが、心懸りの事てござる。

トこれにて朝光は手持無沙汰の體。暫くは、双方共に無言。此時上平
奥より猿王出て來り

猿王 左衛門の尉さま。御臺所のお召しにござりまする。

朝光 心得申した。

ト覺阿に向ひて

お召してござれば、御免下され。

ト會釋し、猿王に案内せられて、上手へ入る。覺阿一人残りて、よろ
しく思入。やゝあつて徐かに席を立たうとする。此時、朝光と入りら
がへに、老女日の岡いで來る。

日の岡 入道さま、憚りながら、暫時おとどまり下されませ。

覺阿 おゝ、お局でござつたか？ 何か御用でござるか？

トいひながら、又住ふ。日の岡は下手に住ふ。

日の岡 承りたい儀がござりまする。(ト一寸あたりへこなしあつて) おめたいお出ましの折も折、かさ
ねく思はしい事共がござりましたゆゑ、御臺所さまには、いといたる御心勞遊ばされて
ござります。結城どのを召させられたも、其儀をお問ひ合せの爲でござりませう。付き

まして、私が、折入つて、あなた様に、承りたいことがござりますが、お聽入れ下されま
せうか？

覺阿 と申さるゝは？

日の岡 外でもござりませぬ。最前のお落涙の、御本心が承りたうござりまする。

覺阿 (一寸間を置いて) 折角のお訊ねなれども、先刻申したことの外には。

トいひさして、黙つてゐる。

日の岡 すりや、御仔細としては、あらせられませぬとな？

覺阿 全く不覺の落涙でござつたのぢや。不思議なこともあるものでござる。

ト不審げの思入。局は付き穂なげに暫く黙つてゐたが、ふと何か思ひ
出したる思入にて

日の岡 附かぬことを伺ひますが、最前右京兆の御名代として參入せられました深見三郎次郎とか
申す仁は、もとは故二品禪師ぜんじさまのお傍仕へであつたとやら承りましたが、御存じてござ
りますか？

覺阿 たしかそのやうにも承りをる。

日の岡 その深見と申す仁が、頻つて公曉禪師こうけつぜんじさまに御昵近申すやうにも承り及びましたが、それ

覺阿 についての、何事か、お思ひ當りの事などはござりませぬか？
成る程、さやうな噂も、ほのかに承りをつたが、別にこれぞといふ……（トいひしぶつて）何故それをお訊ねてござるな？

日の岡 なにゆゑと申すこともござりませぬど……

トこんどは局の方が答へを言ひしぶつてゐる。此時、正門（揚幕）の方より廣元入道の若黨一人急ぎ足にて出て來り、すぐ中門廊の前へ來て、
膝まづき

若黨 はッ、申し上げます。お吩咐に随ひまして……

トいひかけるのを入道かぶせて

覺阿 いや、只今退出いたさうと存じてをつたところぢや。何か御用か？

若黨 いえ、御用ではござりませぬが、右京兆さまには、神宮寺前にて上様をお迎へなされましてござりますが、又忽ちお急病とござつて、やはり御劍のお役は、文章の博士さまへお譲りなされましてござりまする。それより上様は、隨兵衆すゐひやうをば悉く御門外にお殘し遊ばされて、只今既に御參拜中にござります。

トこれはと覺阿も、局も、共にぎつくり胸にこたへたことがあるらし

かつたが、覺阿はやがて氣を變へて、さりげなく

覺阿 では、もはや程もなく、御下向遊ばされるであらう。せめて途中までお出迎へ。

と獨語のやうに言ひて、局を見送り

御免下され。

ト靜かに言つて、席を立つ。局は無言にて會釋する。二人おもひくの思入よろしく。

第二場 備中の阿闍梨の坊

正面の中央、いつもより前へ寄せて、少し斜に、阿闍梨の坊の一室間口三間、奥行二間の常足の二重。一間毎に柱を立て、軒先には釣半部はしごみすべて軒下へは折廻して濡縁式の板縁。其前面よき處に沓脱臺。上手の側面一面だけは妻戸——但し閉ぢてあり——残り一間は葺。内部は總板敷、其一部に上げ臺。奥は襖。下手の側面は、表門よりほゞ眞正面に當つてゐる心にて、其中央一間は妻戸の前に沓脱石。妻戸の奥、

下手へかけて、鍵の手に折れて板縁附の別室——まゐら戸閉め切りあり——其下手の行き當りにも妻戸。

ずつと上手の前(舞臺端)には太き立木数株、同じく其奥は庭つゞきの竹籬、家屋に接近した部分は、低き生垣に柴折戸。其奥は小山の裾、杉の立木の幹など間近く見ゆる。ずつと下手(花道附際近く)には、藁屋根の附きたる一間の表門、二枚戸の竹編戸——開け放しあり——左右は建仁寺まがひの竹垣。垣の内、すぐ門の脇に山椿一二輪紅き花を雪間に見せ、尙ほ庇にも、門の屋根にも、竹垣にも、木の枝にも、地上にも雪深く積りたる體。

前の場と同日、亥の刻(午前八時頃) 二重ふき處に燈臺一基。

こゝに、二重上手、上げ疊の上に、備中の阿闍梨勝圓、下手板敷に彌

源太兵衛すまひ、談話なかげの體。

彌源太

いや／＼、その御懸念には及びますまい。御本坊へ移らせられましたから、もう二年にもなりますが、只の一度も荒々しいお振舞などをなされたことはござりませぬ。夜は、大抵夜半近くまでも、源家永代の爲の御祈念とござりまして、お人拂ひにて、御持佛に籠らせられます。こよひも初夜頃からお籠りてござりました。

阿闍梨

其夜毎の御祈念といふことが、われら聊か心懸りに存じをることとござる。これは、極密の事ながら、外ならぬ其許ゆるゑ、念の爲に申しておく。

トあたりへこなしあつて、小聲にて

二月ほど前の、星月夜の丑三つ頃、さる人、急用あつて、御本坊の裏手にさしかゝつたる處、忽ち向うより、何やら薄黒いものゝ、ふら／＼と進み來るのが見えたので、盜賊などにもやと大いに怖れ、木蔭にちゞこまり、窺ひをると、件の物は近づく。見れば、被衣かっぎをかぶり、正しく女。眞夜中に不思議と見るうち、ひらり生垣を躍り越えて、坊の境内に消え失せたとやら。それはちやうど彼の御所内へ怪しい女姿の者が忍び入つたといふ噂のあつた同じ夜の事。萬々あるまじい儀とは存じながら、二ヶ年以前のお振舞を存じをるだけに、ともすれば、取越し苦勞がせらるゝとござる。

彌源太

思ひがけぬお話でござりまする。成る程、さうおつしやりますれば、よもやと存じまするものゝ、少々心懸りは、あの深見三郎次郎どのゝ、絶えず參入せらるゝこととござります。あまつさへ、參らるゝたびに、何事やら、お人拂ひでの御密談。御存じの如く、あの仁は、御先代二品ほんさまのお傍仕そばへであらつしやつただけに、どうやら氣が／＼とござりまする。

阿闍梨

われらも、あの仁をば、かね／＼心が／＼に存じてをつた。……あゝ、折あしい此夜陰、雪

中の御拜賀。どうか何事もなければよいが。

ト此途端、向う(揚幕)の方に物音、けたまわしい大勢の人聲、二人は驚く思入。

や、えらう物騒がしいやうぢや！ 何事か起つたのではござるまいかな？

彌源太 なるほど。(ト聞き耳を立てて) お宮の方角でござります。見てまゐりませうか？

阿闍梨 ちよと往つて、見て来て下され。

彌源太 心得ました。

ト彌源太兵衛、身支度して、立ち出でんとする。此時向うより、序幕に出た所化、淨念、専念、一さんに走つて出て來り、すぐに門から庭へ駆け入りながら

淨念 大變でござります！ 大變でござります！

専念 將軍家が、不意におかくれなされました！

阿闍梨 彌源太

えッ！

淨念 何者かに殺されておしまひなされました！

阿闍梨 なに、將軍家が!!

淨念 御參拜をおすましなされて、丁度石段の下までお下向遊ばされますと、不意に大銀杏

の蔭から、眞白な薄衣をかついだ女姿の者とやらが飛び出して來て、氷のやうな刃で、たつた一打にお首を切り落いて、すぐさま何處かへ逃げ失せましたげな。

阿闍梨 はれやれ！ 取越し苦勞が實となつたか！

専念 神宮寺の界限は、人やら、馬やらが、あつちこつちと馳せちがうて、まるで軍場のやうでござります。

彌源太 あの大勢の隨身がたや隨兵たちも、何のお役に立たなんだか！ ほうい！

淨念 隨兵たちは、みんな御門外に控へさせられてをりましたし、隨身たちも、其折には、お傍にはたつた二人、それもろたへて何の役にも立たず、御劍役の仲章さまも、御一しよに切り殺されておしまひなされたとか申します。

阿闍梨 御劍役は、右京兆どの、お役ぢやと聞いたに。

淨念 北條さまは、俄の御不例とかで、途中から仲章さまが代つてお勤めなされたとやら聞きました。

阿闍梨 なに、俄の御不例？……(ト不審げの思入にて言ひかけたが) 何にせい、かうしてをる場合でない。

ともかくも御所へ參つて、とくと御模様を承らう。……淨念は支度して伴をせい。

トいひつゝ奥へ入る。淨念もついて入る。

彌源太 あゝ、どうかさうでなければよいが！

ト心配の思入。此途端、向うより、公曉、白の素組の下に腹巻をして太刀を佩び、すべて甲斐々々しく打打ち、袈裟を以て頭部を包み、尙ほ其上に白き被衣をかぶり、右手には血刀を、左手には血の滴る寶朝の首をひつさげ、一さんに駈け出て來り、すぐに門内に走り入りて板縁の上へドツカと掛ける。これにて彌源太兵衛と專念とは大いに驚くこと。

彌源太 やゝ！ 禪師さまには！

トあとを言ひつぎかれてゐる。

公曉 わけは後あきで言ふ。おそろしく腹が減つた。(專念に)早う飯を持つて來い、早う！……えゝ、早う持つて來いといふに！

トこれにて專念あわてゝ立ち上り、下手奥の妻戸口へ入る。

彌源太 では、いよくあなた様が、將軍家をば！

公曉 (得意げに)喜んでくれ。多年の宿望をやつと遂げたわ。けふからは、天下はおれのもんぢや。叔父貴ばかりでなく、怨み重なるアノ義時をも、返す刀で、やツつけてくれた。喜んでく

れ。

彌源太 とゝとんでもないことをなされましたなア！

トばかり後をいひかれて泣く。

公曉 阿呆！ 何を泣く？ 何をうろたへる？ 萬事は深見が心得てをるによつて、氣遣ふことはない。今に爰へ三浦義村の迎ひの者が來る筈ぢや。併し、それまでは、油斷がならん。前後を見張つてゐてくれ。門を閉めておけ。はて、今に日頃の忠勤に報うてやるわい。

ト此うち專念、飯櫃を持ち來り、椀に強飯を盛らうとしたが、杓しやう子がないので更に立つて奥へ行かうとする。公曉待ちかねたる思入にて、土足のまゝ板敷へ上りて片膝つき、專念を押しつけて櫃を引寄せ、手をさし入れて強飯を掴みつゝ食ふ。

ト彌源太兵衛は泣きながら

彌源太 とんでもないことをなされました！ あの深見などが、どうしておたよりになりませうぞ？ あの男は北條どのの無二の御家來。決してお心をお許し遊ばすなど、くれぐれも申し上げておいたものを！ それに、只今承れば、右京兆どのをも返す刀でお討取とおつしやりましたが、先刻同宿たちの知らせによれば、北條どのには、途中から俄の退出、御劍の役は、急に仲章どのと振變つたとやら申しますぞよ。

公曉 なに、仲章と？……（ト思入）さういへばアノ後ろ姿が……

ト何か思ひ當ることがあるらしく、さては人違ひであつたかと、残念がる思入。

此時、備中の阿闍梨、緋の僧衣に金襴の袈裟を懸けて、淨念をつれ、しづかに正面の袂を開きて出て來り、よろしく思入あつて、公曉の下手にすまひ

阿闍梨

過ぎ去つたる事は、今さら申せばとて、せんない儀でござる。所詮は、何事も御宿業でござる。とは申せ、只今あれにて承れば、程なくこれへ三浦の義村どのお迎ひが參る、云云との仰せてござるが、なりや、こんどのお企圖は、かねて義村どのお打合せあつての儀でござるか？ 彼の人は、しかと御同心申してござるか？

公曉

（尙ほ強飯を食ひながら）いや、義村とは、まだ曾て直接には打合せたことはないが、かね／＼駒若の縁故もあるによつて、深見、三郎次郎が懇ろな肝焦り。義村がおれに心を傾けることは明白ぢや。かやうに本望を遂げた上は、もはや源家の正嫡たるべき者は、おれの外にあらう筈はないによつて、必ず迎へに來るに相違ない。……（專念に）白湯を持て。

專念急ぎ下手の奥へ入る。

阿闍梨

いや、それならば、決して御安心は成りませぬぞ。底意の圖りがたいアノ深見、三郎次郎。

御父上二品さまの御舊臣といふを口實に、無二のお身方らしうもてなし申せど、もと／＼右京兆の腹心。うかと御信用あらば危うござる。但し三浦の義村どのは、御幼時のお傳でもあり、駒若どの、父御なれば——深見が申すやうでないまでも——よもお爲あしうは計らひますまい。併し、かう申すうちも心元ない。ま、ともかくも此山越えに、彼の人の邸までお越しなされ。さなきときは、お身の上が危うござる。さ、お支度めされ、お支度めされ。

ト此言葉のまだ終らぬうちに、向うより駒若、髪を亂し、幾らか怪我をした體にて、一さんに駈け來り、すぐ門内に入りて膝まづき

駒若

只今、御本坊へ、先日深見の代人として參候致しました佐越の次郎と申す者、手の者大勢ひきつれ、物の具に身を固め、手々に得物をたづさへて亂入いたしましたゆゑ、何事かと訊ねますと、眞直にお行くへをば白狀せよと申し、無二無三に奥へ踏込み、支へようとすする私共をばさん／＼に打擲いたし、天井をも床板をも引破り、打毀し、御縁の下までも探しまはり、痕藉を極めをります。程なくこちらへも參るかも知れませぬ。早う父が方へお逃げなされませ。

公曉

なに、アノ佐越の次郎が？

ト案外だといふ思入。

彌源太 さてこそ、阿闍梨さまのお先見にちがひませぬ。こゝにござりましてはお心元なうござりませぬ。ともかくも裏山越しに、三浦どののお邸まで、さ、早うお落ちなされませ。

阿闍梨 駒若どのを先達にして(ト淨念と罪念とに向ひ)おのしら二人も、途中のお警護をせい。それ、早うお支度めされ。

トこれに公曉思入あつて

公曉 あれほど誓言をした三郎次郎が、今更變がへをしようと思はれんが、只今の話のやうでは安心は出来ん。ともかくも、義村方まで立退くことにしよう。……あゝ、それについても、義時めを討洩いたのが無念ぢやわい。……阿闍梨、おさらばでござる。

トいひもあへず、實朝の首をひつぎげて、忽ち地上におり立ち、一寸駒若らへこなしあつて、つか／＼と裏手生垣の方へ進む。駒若及び罪念、淨念つゞく。やがて柴折戸を押開き、三人は代る／＼伏してゐる雪折竹を押分け／＼忽ち見えなくなる。これを見送つて彌源太は、やつと胸を撫ておろし、やゝ安心の思入。阿闍梨も歎息して

阿闍梨 あゝあゝ、つい近ごろ、天台座主が、今の世の有様をば批判せられて、「何を思ひ企つるにも、道理といふものを、つや／＼知らぬげの世の中」と申されたとやら傳へ聞いたが、あゝ

あ、さても／＼淺ましい人ごゝろではあるわい！……ちつとも遠くお逃し申したい。彌源太どの、それ、表の門の戸を。

トこれにて彌源太兵衛急ぎ門口へと進みて、扉を閉めようとする。此の途端、向うより深見三郎次郎、鎧姿、長巻を携へ、同じく鎧姿の大場の權平太と共に、松明持つたる兵二人を先導させ、大勢の兵をひき隨へて、早足に出て來り、今丁度門を閉めようとする處へ駆け付け、彌源太兵衛を突きつけて、會釋もなく門内へ込み入る。

彌源太 あ、これ、もうし！ 理不盡な！ こりや何となされませぬ？……や！ こなたは深見どのではござりませぬか？

ト止めようとするを深見長巻の柄にて押しのけながら

深見 公曉禪師はいづこに御座ある？……えゝ、のかつせい。妨げめさるな。(ト備中の阿闍梨に向ひ)速かに禪師にお會はせ下され。

阿闍梨 いや、禪師には、爰許には見えさせられぬ。おそらく雪の下の御本坊に……
いはせも果てず

深見 おかくしあるは御無用でござる。餘人の手に掛け申すまいため、それがし急ぎ罷り向うてござる。生中にお隠しあつてはお爲にならぬ。……おゝ。あちらこちらに、血汐の滴り！

裏手へかけて夥しい足跡！ 察するところ、山越しに三浦どの方へ落ち行かれたかも知れませぬぞ。大場どの、こゝは身共が引受け申す。其許は裏手へお廻りなされ。
大場 心得ました。

ト大場は兵の牛以上をつれて、すぐに裏手へ駆け向はうとする。彌源太兵衛あわて、我れ知らず立塞がらうとするを、大場主従は突きつけ、突き倒して、忽ち裏手藪へ出て、姿を消す。彌源太兵衛は、こけつ轉びつ其あとを追うて入る。

此うちに深見は、残兵三人ほどをひきぬて二重へあがらうとする。阿閼梨之を止めて

阿閼梨 あいや、公曉禪師に、如何様のお料ござらうとも、當社別當の後見たるわれらが坊へ、土足のまゝにて亂入せらるゝは、無禮でござらう。

深見 はてさて、恐れ多くも將軍家を弑し奉つたる大逆罪の公曉禪師、生中にお庇ひあるに於ては、同罪はまぬかれませぬぞ。それがしはお爲を存じて罷り向うたのでござる。そこをお退きなされ。何事もそれがしにお任せあれ。はて、お退きなされといふに。

ト深見は手荒く阿閼梨を押しつけて、兵士と共に奥に蹈入る。
此途端、裏手藪より以前の淨念、額際に創を負ひ、僧衣も處々は破

淨念 られ、息を切つて駆け出て來り、縁端近く走り入り

阿閼梨さま！ 阿閼梨さま！ 無念でござります！ くちをしようござります！

トそのまゝそこに突伏して泣く。

阿閼梨 えッ！ 今の追手の爲に、捕はれとならせられたか？

淨念 そこどころぢやござりませぬ。お社の裏山つゞきを八九町ほども行かせられますと、ばつたり出逢ひました三浦どの、郎黨衆、長尾の新六、雜賀の次郎ら、二十餘人。さてはお迎ひか、やれ、先づよかつたと思ひの外、矢庭に禪師さまをおつ取り圍んで、無二無三に切つてかゝりました。禪師さまは、必死とお働きてござりましたし、私共も一生懸命に支へましたが、無念や、とうとう禪師さまには、雜賀と長尾とに組伏せられなされて、御落命にござりまする！

ト泣く。

阿閼梨 なに、御落命！ ははア！

ト驚き歎く。此内、彌源太兵衛も、裏手より、力なげに泣く、よるめき、戻り來り、杏脱のかなたに膝まづきて泣いてゐる。

此以前、深見三郎次郎、兵と共に下手奥の妻戸より出て、板縁を傳うて戻り來り、此知らせを聞きつゝ、しづかに阿閼梨の上手へ廻り

深見 あゝ、せめても、お命ほどはお助け申たいと存じてをつたに、はてさて、残念なことをい
たしたわい！……阿闍梨はじめ人々のお歎きなさるゝも、ことわりではござるが、かやう
に成り行くも、畢竟は、前將軍家の御時以來、多年わだかまつたる御宿業の致す所で、餘
儀もないことござる。

阿闍梨 (頻りに歎息して、獨語のやうに) あゝ、何事も、今の世は、おのが心の牽く方へおしあてゝの判
斷。まことに、慈圓大僧正の申された通り、今は道理といふものゝ無い世の中か！ あゝ、
是非もないことぢや！

ト歎息の思入。

彌源太 (泣きながら) 將軍家にお世繼のお子さまのなればかりか、前の二品ほんさまのお血統まで、此や
うに絶え果てゝしまつた上は、(ト歎息して) 源氏のお行末は、どうなることやら！ 御三代
引續いて繁昌した鎌倉も、これからは、どうなる事やら！

深見 あいや、たとひ源氏の御血統は絶ゆるとも、北條どの御座ある限りは、鎌倉の幕府は大磐
石の礎いし石いし同然。心安うお思ひなされ。

ト此時、裏手より、大場の權平太、以前の兵と共に、どや〜と戻り
來り

大場 深見どの、公曉禪師は……

トいひかけるをおさへて

深見 委細は既に承つた。此上は早速引上げ、此事を御主君へ言上いたさう。……先づお越しな
れ。

ト大場へこなし。これにて權平太は會釋して、兵と共に下手へと進む、
深見は人々へ一寸こなしあつてしづかに、兵と共に地上へおり立つ。
阿闍梨は二重に、彌源太兵衛と所化とは、尙ほ地上(平舞臺)に居附の
まゝにて愁ひのこなし。

幕

附 録

承久軍物語

名残の星月夜

明年^{〇建保七年}正月廿七日には、つるがをか八まんぐうにて、はいがおこなはるべきよしさだまりければ、都よりくぎやう殿上人あまた下らせ給ひけり、すでにその日になりしかば、大ぜん大夫ひろもと入道かく阿しやうぐんの御まへに参り、御さうごうを見奉りて、涙をはらくと流し申しけるは、かく阿ひととなりてよりこのかた、終になみだのまなこにうかぶことなし、しかるに、たゞ今ぢつきんし奉る所に、らくるぬきんじがたし、これたゞこともおもはれず、これにつけておもんはかるに、故う大しやうけよりとも卿、先年とう大寺御くやうの時のれいはまかせ、そくたいの下にはらまきをちやくせられ、日中におよんで、勤め給へかすと申しければ、もんじやうはかせなかあきら之をさきて、なんでもうさることの候ふべき、はいがはひん^乗そく^燭におよんですることなり、そのうへ大じんの大將にのぼる人、ふく^腹を帯するぎしきなしとて、とゞめければ、やめられけり、とりのこくにおよんで御出、をんみやうじちかもとへんべいに参る、たゞひさ御はらひをつとむ、さねま

さ御車をよせけり、そのぎやうれつものぎしき、

先 ぬがい四人、二行、

次 とねり四人、二行、

一いん三人、

次 殿上人、一行

花山院侍従義氏より

さひやうゑのすけ頼經よりつね

いよのせうしやう實政さねまさ

むまのごんのかみ頼持よりもち

中宮信能ごんのすけ能のふよし

次 ずゐじん四人、ゆみやもつ、

くはう權ごう頼ぐら氏の大夫よりうち

一で條うのせうしやう能よし繼つぐ

(はうはうはのはせんはしはい)師範

いな因ば能のかみ隆もろ經のり

いが因のせうしやう隆たか經かつね

次に御かんかさもち

次 ぜんく、二行、ゆみやもつ、

藤のこうとう頼高よりたか

するがの前守司季すへ時とき

さがみのぜん守じ經つね定さだ

むまの助行ゆき光さみつ

むまのすけ弘時私ひろ

むさしのかみ前よし司う義ち氏な

たゞの藏人大夫しげ重つな綱

かひのむまの助宗むね泰やす

しゆりのごん大大夫惟これ義よし

次に官人、あかしやうぞく、

はだ秦のかね兼みね峯

御車、くるまさぞひひ四人、くろしやうぞく、

次 隨兵、二行、ぐそくきる、

平こうたう時盛もり

藏人朝大夫親ともちか

藏人信大夫乃もちくに以國

たじまの藏人(大夫)くに國たゞ忠

はうはうはのはぜんはじはちはか時時親さき

さがみのかみ房時房ふさ

するがの右馬助俊のりとし

長井左衛門親大夫廣ちかひろ

右京右の京ごん大大夫義よし時時義

番長敦あつ秀ひて

小笠原 太一
をかさ原二郎長清
伊達 次郎 頼定
いつのさるもんよりさだ
三浦平九郎左衛門尉胤頼
大須かさるもんみちのぶ
秋田 景盛
あきた城介かげもり
越 次郎 重
河ごえさるもんしげ時

武田 信光
たけだの五郎のぶみつ
長江八郎師景
ときさるもんもとゆき
しきぶの大夫やすとき
浦 清
三浦ら太郎兵衛時むら
波多野中務次郎信清 景員
かとう左衛門かけかず

おのくふろひもち一人、
はりかへもち一人かたはらに行、

次 ざつしき廿人

次 けびいし

大夫はんぐはんかけかど、
あかしやうぞく、
にかふりきる、

次 御てうどがけ、矢をつゝに入、弓にそへてもつ、

加藤太夫判官光定
隠岐三郎左衛門尉元之等

さゝきの五郎よしきよ、
かふりにあか
しやうぞく、

次 下らうずぬじん、二行、

兼村
かねむら
はだのきんうち
貞文
さだぶん

近任
ちかたう

教光
あつみつ
あつうち

次 くぎやう、一行、御むまにめし、各
ぜんぐ五人つゝあり、

しん大なごんたごのふ
忠信

さるもんのかみさねうち
實氏

さいしやう中將くにみち
國道

八てうの三位みつもり
光盛

ぎやうぶ卿むねなか
宗長

後には衛府、二行、ひらまほ
しにかみしも、

さるもん尉、つかず
光員

みんぶのぜうひろつな
廣綱

せきさるもんまさつな
綱

小野寺
をのてらさるもん

天野
あまのさるもんまさかけ
景景

伊東
いとうさるもんすけとき
時

市
いち川さるもんすけみつ
光

行村
同ゆきむら

壺岐 清重
いさのかみきよしげ

布施 康定
ふせの左衛門やすさだ

伊賀 光季
いがのさるもんみつる

武藤 頼茂
むとうさるもんよりもち

足立 (よりもち)
あだちさるもんとはる元春

宇佐美 長
うさみさるもんすけなが

佐貫 廣綱
 さぬきさゑもんひつな
 宗 孝親
 そうさゑもんだちか
 伊達 爲家
 だてのさ衛門ためいへ
 大井 實平
 大井さゑもんさねひろ
 鹽谷 朝業
 しほのや兵衛ともなり
 若狭 忠季
 わかさ兵衛たゝすゑ
 東 重胤
 とうの兵衛しげたね
 堺 常秀
 さかひ兵衛つねひて

後藤 基綱
 ごとうさゑもんもつな
 中 隆
 中てうさゑもんいへなが
 江のさゑもんりちか
 源四郎 秀氏
 源四郎さゑもんひてうち
 宮内 公氏
 くない兵衛さんうち
 綱島 俊成
 つなしま兵衛とし久
 土屋 宗長
 つちや兵衛むねなが
 狩野 光廣
 かの七郎みつひら

繪あり

およそろぢのずぬひやうは一千よき也、わかみやの石ばしにちかづき給ひしかば、御車ををり給ふ時、(文章生)もんしやうくみすをあぐれば、よりもちしぢを奉る、よしつぐは御くつのやく、さねまさ御きよをとる、右京權大夫よしときは、御けんやくをつとめ給ひしが、宮門に入給ふ折ふし、俄にしんくうならんし、ぜんごくらくなりしかば、もんしやうくうなかあきらをよびて御けんをゆづり、たいきよしてをのゝていにかへり給ふ、こゝにふしぎあり、しやうぐん車ををり給ふとて、

細太刀ゆうけんのかのくるまのてがたに入りたりけるをしらせ給はて、うちおらせ給ふこそあさましけれ、然るに、仲章くるしうも候ふまじとて、木をゆひそへてぞまゐらせける、昔りうくはうわうといひし人、はるか道のにおもむくとて、車のながへおれたりけるを、つゝしまずして行きけるが、ふたゝび返ることをえずして、たこのつちとくちにけり、ぜんしやのくつがへすは、(る力)後車の戒しめとこそ申すに、いさめ申さゝるもんじやうはかせふかくなる次第也、これのみか、御くるまのまへをくろき犬のよこさまにとほる事、れいさうしきりになく事、かたぐもていまゝしきつげありけるを、おどろかぬこそはかなけれ、さるほどにいしばしにちかづかせ給ふ時、いづくよりともなく、びそう三人あらはれ来て、しやうぐんをおかしたてまつる、はじめ一たちはしやくにてあはせ給へども、次のたちにぞ御頸はおとされ給ひけり、もんじやうはかせなかあきら、はうきのぜんじもろのりもきられけり、前ごに候ひけるずぬ兵ども、こはいかなることぞやとて、あわてさはぎて宮中にはせこむといへども、かたきはたれともしらず、比は正月廿七日のいぬの時のことなれば、くらははくらし、うへを下に返して、どよむこゑおびたし、かゝりける所に、かみのみやのみぎりにて、あざりこうげうちのかたきをうつとなのれつるといふ事ありて、ぐんせいとも、すなはちかのぜんじがおはしますゆきの下のほんばうをおそふ所に、こゝにはおはしますとて兵どもかへりけり、さてもべつたうこうげうは、日比のしゆくいとぐるとよろこびて、すなはちかの御

くびを手にもち、うしろみのびちうのあざりが雪の下のきた谷のいへにむかはれけるが、物などまゐらせけるあひだも、御くびをはなし給はず、しかるに、べつたうのもんていに、こまわか丸と申すは、三浦の平六さゑもんよしむらが二なん也、そのよしみをおぼしけるかや、げんだ兵衛と申す者を御つかひにて、よしむらがかたへ仰つかはされけるは、右府しやうぐんすてにかうじ給ひぬ、いまくはんとうの長たるべきものはわれなり、はやくけいりやくをめぐらすべしとしめしあはされければ、よしむら、大きにあされ、日比しやうぐんけ御おんあつくかうふり奉れば、いまさらいたはしく思ひ、右京大夫に参りて申合まろこあはせければ、すみやかにべつたうあざりをちうし奉るべきにさだまりけり、すなはちながをのしん六、さいがの二郎いげ五人の兵に仰せて、あざりのざいしよへつかはさる、べつたうは、つかひのおそきとをまちかね給ひて、よしむらがしたくにいたらんとおぼしめして山中にかうり給ふが、その夜しも大雪ふりて、道にまようておはせし所に、ながをの六郎ゆきあひてちうし奉らんとす、べつたうは、はやわざちからわざ人にすぐれ給へば、さうなくうたれ給はず、こゝをせんとたゝかひ給ふ。

繪あり

山中に雪ふりたる所に、はうしの衣の下に、くそくきてむしや五人ときりあふ所、

しかれども、たぜいにぶせいかなはねば、つひにうちとられ給ひけり、このべつたうと申すは、右

大しやうどの、御まご、きんごしやうぐんの二男なり、御は、は、かもの六郎しげながむすめにてぞおはしける、みなしごにて、おはせしを、そぼの二位のぜんに、ふびんにおぼしめし、はぐくみそだて、十七歳と申す十月十一日に、鶴がをか入まんぐうのべつたうしよくにふせらる、ことし三とせになりけるが、御所の中にへんげの物ありて、女のすがたとあらはれ、うへをうかゞふ、いかにもしてゆくへを見んと、もとむれども、あしはやく身かろくして、まぼろしのごとくに成給ふゆゑ、御ざい所を見たる人もなし、いまおもひ合すれば、べつたうあざり、しやうぐんをうち奉らんとために、三とせがあひだ、うかゞひ給ふといへども、終にほんまうをとげ給はず、このはいがのじせつを、天のあたへとよろこびて、おぼしたつ所に、うきやうの大夫は、御けんのやくにさだまりけるよしきこしめければ、まづ一のたちにうち給ふ所に、引かへ、なかあきら御けんの役をつとめしゆゑにこそ、あへなくうたれけるとかや、あくれば廿八日、しやうぐん家の御さうれいをとまんとする所に、御くびのありかしれざりければ、いかにせんとまどふ所に、きのふ御所の御しゆつるとき、きんうぢ御びんに参りければ、びんのかみを一すぢぬかせ給ひて、御かたみとて給はりつゝ、

らでゝいなば、ぬしなきやどゝなりぬとも、のきばのむめよ、われをわするな、とくちずさみ給ふこそいまはしけれ、その御かみを御ぐしにもちひて、御くはんに入奉り、せう長すゐんのかたは

らにはうふり奉る、この日みだい所も御しゆつけあり、御かいしはぎやうゆうそうづなり、また長井さゑもん大夫ちかひろ、むまの助時ひろ、じやうの介かげもり以下す百人の大みやうども、ことごとくしゆつけしたり、あはれなるかな、きさらぎ二日、加藤はんぐはん六はらにはせつき、右府將軍御たかいのよし申しければ、京中のきせんなん女さゝつたへ、東西をうしなひてなげきかなしみける、

六代勝事記

佐渡廢帝 (原文不明、誤脱多し)

承久元年己卯、正月廿七日、將軍右大臣兼左近衛大將源朝臣薨、右府、内には玄元氏の先實をならひ、外には黄石公が兵略をふる、執權十六年のあひだ、春の露のなさけ草葉をうるほし、夏の霜の恨打寒になす、一天風やはらかに四海波たゝず、家は夜半の時雨のもらざればふかず、ふすまはあか月の嵐のすきまをふせぐばかり也、儉なる者をすゝめ、奢なる者をしりぞけられしを、世すゑにのみ、人運せまりにければ、ことはりもむなく、あはれもわすれて、往反大小の臣下ありて、路次村邑の民おほくつかれ、納言の羽林中郎將をかねたる、執政の賢息にあらざればさかず、ふるゝと

ころひさしからずして、三臺の右府につらなる、八幡の末社に拜賀するに、精兵かきをなして牛車あとをさしり、月卿かげをまじへて松山にのぼり、雲客にほひをほどこして梅嶺をふむ、綾羅錦繡の服禁色をわすれ、金銀珠玉の飾おのゝ光をわかつて、其儀あだかも執政の臣にこえずぐれ、其式おそらくは皇帝のみゆきかとおぼゆ、秉燭の後、奉幣事はりて退出の所に、變化の賊ありて、主人をさることいなづまのごとくにきりて、つぢ風のごとくにさりぬ、刃にあたるもの文章博士源仲章、因幡前司師憲等也、尊卑の害をまぬかるゝもの、冠を弾し袍をぬぎて匍匐す、あだをもとむる兵、社壇にはせゝて是非にまどへり、凶徒の名をあらはず次將梟首の造意をたづねれば、右府の兄の禪門の遺孤といふをもちて、顧腹して若宮の別當に補して後、一千日參籠、丹府肝膽をくだきて玉砌に血をながせり、寔に宿運のかぎりあることをしるといへども、猶うらむらくは武勇のほかり事のたらざるにたるものか、彼曹公がふとを頭風、陳孔璋が檄をつくる古曲、名將のふるまひ、宜しく存すべきにや、將軍館より出給ふに、鳩鳥頻りにかけり、車よりおるゝに雄劍をつきおれり、祖宗のしめす也、肯臨江王とほくゆきし日、車のよこかみおれぬ、老父のいさめにしたがはず、しひてさりて、はやく卒してふたゝびかへることを得ず、先事わすれざる後世のつゝしむ所也、此時に世をのがるゝ兵百餘人、其中に前民部權少輔大江近廣は、大膳大夫廣元の長男也、出羽權介藤原景盛は、將軍三代の近習、文武二道の達者也、兩人の恨、知恩の志、世のおすところ、のがれ

てもしかもあまりあり、此外或疎遠貧賤のやから或若冠二毛の質、父子兄弟ともに家を出、郎從僮僕おなじくかうべをそる、おの／＼思ふ所をしらず、右京權大夫兼陸奥守義時の一族、舊主のあとを惜む心ふかくて、一人も出家の思ひなし、あはれむべし、胡蝶の夢七十餘廻の春をのこして、たちまちにおどろきぬることを、

出ていなば主なきやど、成りぬとも軒はの梅よ春を忘るな、とかき留められける、いまはのみちたなごゝろをさしけるにや、外國より本朝にいたるまで、明主賢臣の刃にあたるためし、たとへをとるにいとまあらず、大覺世尊の御はき、不輕菩薩の身すら、猶杖をまぬかれずといへり、應佛の神通薩埵の方便、凡夫に縁をむすびて不可論也。下略。

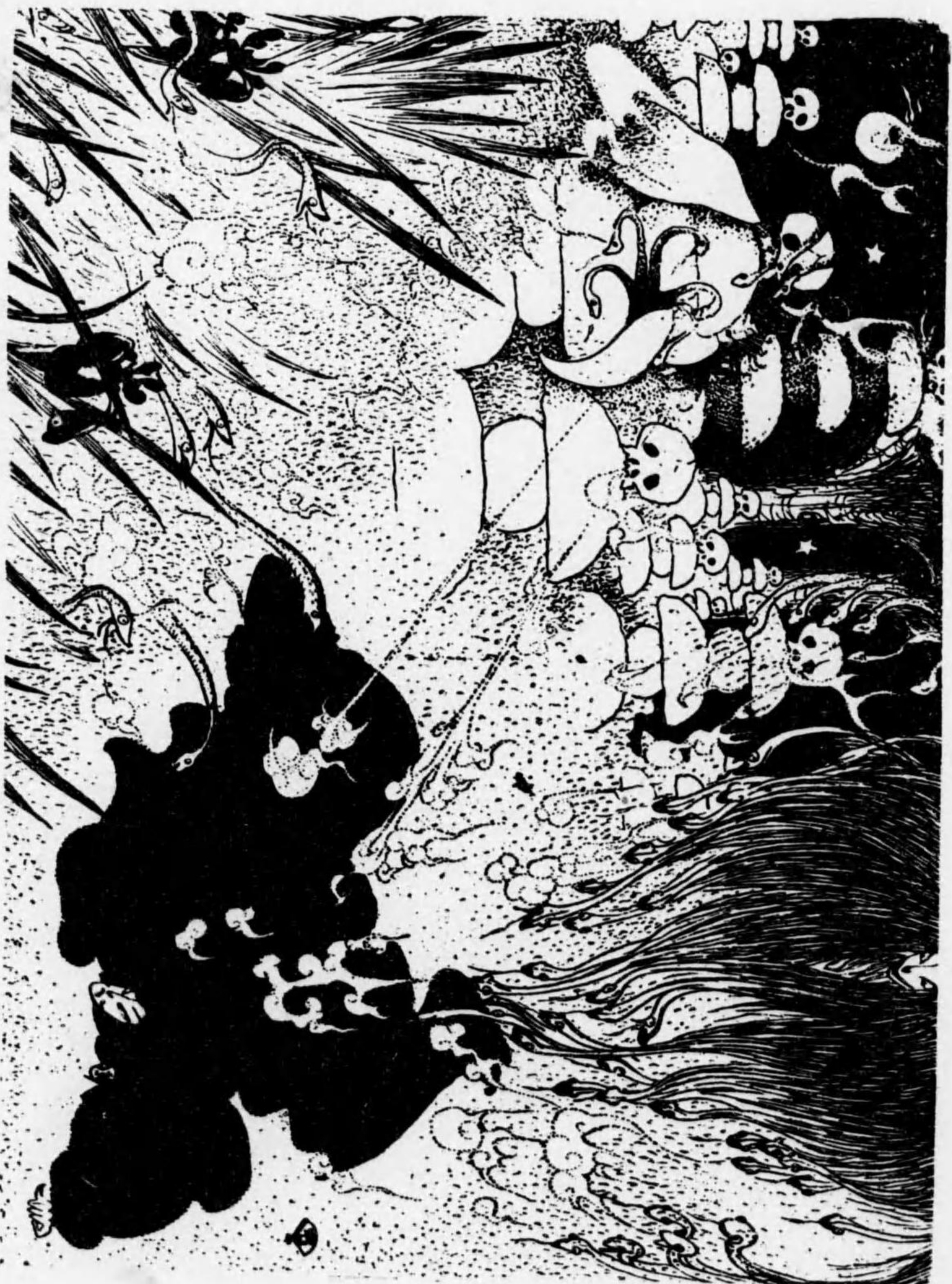
増鏡

上新島もり

故左衛門督の子にて、公曉といふ大とこあり、おやのうたれにしことをいかでかやすき心あらむ、いかならん時にかとのみ思ひわたるに、この内大臣、又右大臣にあがりて、大饗などめづらしくあづまにておこなふ、京より尊者をはじめ、かんだちめ殿上人おほくとふらひいましけり、さてかまくらにうつしたてまつれる八幡の御やしるに、じんばいにまうづる、いといかめしきひびきなれば、國々のぶしはさらにもいはず、みやこの人々もこせうしけり、たちさわぎのしるもの、みる人も

おほかる中に、かの大とこうちまぎれて、女のまねをしてしろきうす衣ひきをり、おとこの車よりおる／＼ほどをさしのぞくやうにぞ見えける、あやまたずくびをうちおとしぬ、その程のどよみいみじさ思ひやりぬべし、かくいふは、承久元年正月廿七日なり、そこらつどひあつまれるものども、たゞあされたるよりほかの事なし、京にもきこしめしおどろく、世のなか火をけちたるさまなり、こせうにさいおんじの宰相中將實氏もくだり給ひき、さならぬ人々もなく／＼袖をしぼりてぞのぼりける。下略。

義時の最期



(筆氏一宗原増) し返見本版初『期最の時義』



第一幕

- 第一場 葛西ヶ谷北條家別第中門前
- 第二場 同別第内奥の一室
- 第三場 伊賀の方の居間

第二幕

- 第一場 北條家別第の奥庭
- 第二場 奥庭谷間座禪堂
- 第三場 座禪堂の背後
- 第四場 以前の堂内

第三幕

- 第一場 義時の寢所
- 第二場 夢の裡の幻景
- 第三場 再び義時の寢所
- 第四場 伊賀の方の居間

第一幕

四三六

第一場 葛西ヶ谷北條別第中門前

時は貞應三年八月初旬、處は鎌倉葛西ヶ谷附近、屏風山の麓の、北條家の別第である。此第は貞應二年の秋——ちやうど彼の承久の大亂の鎮まつた翌年——の新築で、大倉郷の本第とは、滑川一筋を隔て、さしわたし僅かに一町餘り、奥庭つゞきて自由に往來が出来るやうになつてゐる。

此別第の奥庭には、ゆたかに小富士山や屏風山の裾が取入れてあるのて、其一部はさながらの深山幽谷であつて、そこには主人公の好みに成つた和唐折衷の、質素な座禪堂などがある。

主人公の北條右京の權の太夫義時は、ことしはもう六十二歳である。彼れは、去る貞應二年の夏、重い傷寒を病んで以來、それはやがて治つたが、病後の衰弱が甚しく、とかく、健康が勝れないので、侍醫の行運法師の勤めによつて、修禪をはじめ、専ら此別第に住み、一時は

大分恢復の體であつたが、昨年の秋以來、またわるくなり、とかく癖に親みがちなので、勿論出仕などはえせず、庭内の漫歩さへも極めてたまさかて、起きたり臥たりといふ日が多かつた。

先妻の「吳羽の方」と呼んだのは、十九年前に没して、現在の夫人は、彼の承久の亂のはじめに京都の守護職を勤めてゐて、宮方の不意討に遭つて、勇ましい戦死を遂げた故伊賀の判官光季の妹で、名は榮子、

「伊賀の方」と呼ばれてゐた。其腹に出來た長女は一條宰相の中將藤原の實雅に嫁し、次の男子は義時の第五男で、三浦駿河守義村を烏帽子親として、四郎政村と呼ばれ、ことしはまだ十六歳で、やつと元服したばかりであつた。

義時が、靜養の爲に、別第に移つてからも、伊賀の方は本邸に留まつてゐたから、義時が朝夕の看護は主として二老女と一少年の手に委ねられてゐた。老女の一人は義時が江間の小四郎時代からの附人、故亘理平六兵衛尉の後家で、ことしは七十五歳、「亘理の婆」といふのが其通り名であつた。又、一人は、先妻吳羽の方の姪で、齡は四十五六、故岳島右近の妻であつたが、これも、とうに——姉の在世中に——夫に死別れ、それ以來、「右近」といふ通り名で、北條家の侍女頭を勤め

て、現在に及んでゐるので、二人とも一族間には——奥方の關係者以外に對しては——中々威權が有り、殊に別第一切の事は、此二人が切盛してゐた。

一少年といふのは、名を深見の小三郎といふまだ十八歳の侍童こわらあがりの美少年で、十三四の時分から主人公の傍かた去らずである。これは、つい四年前に頓死したまでは、「執權職の執權」とさへ唱はれて、威を振つてゐた義時が無二の腹心、深見三郎次郎むねみ致興の倅である。父三郎次郎は、其頓死後に、種々の罪跡が俄に露見し、領地は悉く沒收せられ、遺族までも嚴罰を蒙つたが、ひとり小三郎だけは、特別の沙汰で赦され、今も尙ほ仕へてゐたのである。十八歳ではあるが、まだ元服は済まさないでゐた。

當時、義時の長男、武藏守泰時（四十一歳）は、京都守護の爲に、彼地に赴任してゐり、義時の姉の、例の政子の尼御臺は、ことしはもう六十八歳であつたが、尙ほ豐饒たるもので、年少の將軍藤原の頼經の後見をして、隠然鎌倉幕府の政柄を握つてゐるとも見えてゐた。

そのころ、北條一家の外で、重きを置かれてゐた故老はといふと、第一に大江の廣元入道覺阿、次は三浦駿河守義村なぞであつたが、伊賀

の方との關係上、一部の瞻望の的となつてゐたのは、其兄の伊賀の式部の承光宗と其姪の宰相中將藤原の實雅であつた。

以上は、此序幕第一場當時の歴史的背景の概略である。

ところが、貞應三年八月七日の午後四時頃の事である。主人公義時は、此十日ばかりは、とかく病褥に親しんでゐたのであつたが、其日は聊か快いので、奥庭の座禪堂あたりまで漫歩するといひ出し、老女らの止めるのも聽かず、庭内へ出たところが、病ひが俄に發作して卒倒し、暫くは正氣に戻らなかつたので第内は上を下への騒ぎ。折から奥方伊賀の方も、此十餘日餘り、持病の爲に、床に就いてをり、長子の泰時は滯京中で不在なので、一段の狼狽。が、幸ひにして侍醫の行蓮法師が程なく駆け付けて手當に及んだので、發作は難なく收まつた。けれども、一時は此珍事を傳へ聞いて、八方より馳せ付ける夥しい見舞客の爲に、別第の門前は市をなしたが、戌の刻（午後八時）も過ぎて、七日の月がもう既に傾く頃となつては、おひ／＼に引取り、今は、伊賀の方の實兄、式部の承光宗、同實子四郎政村、同女姪、宰相中將藤原の實雅、侍醫の行蓮法師なぞが居残つてゐるのみである。

中央よりはやゝ下手寄りに中門があつて、其上、下は築地、中門内の

上手には第一の屋根が見え、それから下手へかけては庭續きの、間近の松杉の繁茂した山々が重疊して見えてゐる。上手の前寄りには、左右へ大きな根を張つた三抱へもあらうといふ樟の大きな幹だけが見えてをり、それから上手の奥へかけては大小の雑木の立木。それから中門のずつと下手の奥には、袖塀を隔て、侍ひ所の建物が見える。其前の方にも大小の立木。

中門の少し上手に——築地ぎはに——椎か何かの立木の幹が二本。其二本の立木に馬が二頭繋いである。一頭は實雅の乗馬で、一頭は光宗のである。それから樟の根がたには、二人の従者が凭れかゝつて熟睡してゐる。一人は實雅の従者の甲で、一人は光宗の従者、川西の小丹次（二十五六）である。

中央には、其他の侍の従者、乙、丙、丁の三人が下手へ向いて不規則に立並び、當別第一の老僕、加持の藤内（六十五六）と小童の砂王（十二三）とが、ちやうど中門の前の處に、彼等と向ひあつて立つてゐる。藤内は箒を、砂王は馬柄杓を容れた手桶を提げてゐる。

藤内 はいく。いかにも、もはや戌の刻は過ぎましてござるが、御主人がたのお立ちまでには、まだ中々お手間が取れませう程に、いづれもさぞ御空腹でござらう。あの侍ひ所に附い

て右へお廻りなされると、お臺所の直こなたに大溜りがござる。あれにて夕餐をおした、めなされ。これはお老女がたのお心入れてござる。……さア、ござりませ、ござりませ。それは千萬かたじけなうござる。……（丙、丁を見返り）では、いづれも、お振舞にあづかりませうか？

従者丙

いかにも、さやういたさう。……（丁、乙に）さ、ござれ。

ト乙、丙、丁揃つて下手へ入る。

藤内

（三人を見送つて）まづ、これで人間の始末だけは附いた。さて、これからが（ト馬に向つて）おぬしたちだ。なんぼ畜生でも、明るいうちから食はず飲まずの立ちん坊ぢやア可哀さうだ。……砂王どん、こいつらをも早うお厩へ連れて行つて、何か振舞つてやらつしやい。

トこれにて砂王、繋いである一疋の馬の端綱を解き、それを引立てつ、手桶を片手に提げて、上手へ入る。其間に藤内は他の一疋のを解きながら、四下を見廻して

どうだ！ この、汚い物を取散らしたことは！ 何にしろ、俄かの騒ぎで、入りかはり立ちかはり、お大名衆が駈け付けさつしやつたので、御門前も、御門内も、まるで軍場のやうだつたが、やつと是れてかたづいた。……ちよつくら此邊だけでも掃いておかうか？

ト箒を取り直す。此内、上手の奥にて、砂玉の聲にて
唄うた方かたも方かたにさふらふよ。

時ときも時ときにさふらふよ。

たんだ一字ちがうた!

まアさとまアさ、まアさとまアさ。

まざ〜ツと物ものの怪け!

たんだ一字ちがうた!

物ものの怪けや物ものの怪けツ!

たんだ一字ちがうた!

ト歌ふ聲が聞える。此唄の節は、ざつと狂言小唄のそれに似てゐる。
中にも囃子言葉の「たんだ一字ちがうた!」の拍子は、狂言の「てん
てんむっしむし!」のそれである。

藤内 (忌々しげに) え、また始めやがうた! (ト上手の奥に向つて) これ〜! その唄は止めだ、
止めだ!

トこのうち砂玉、空手で上手から戻つて来て、ふつと樟の根がたに眠
つてゐる二人を見附ける。

砂王 ヤア! まだ爰あたりに二人だけ残つてゐらア、お家來衆が! …… (ト傍へ往つて見て) あ、よく眠
込んでゐらア!

トこれにて藤内も目を附け

藤内 お、いかさま! …… 起おこさつしやいよ。

ト砂王ずつと近寄つて呼ぶ。

砂王 もしく〜! もしく〜! …… (ト一寸ゆすぶつて見て) 中々起きないや。

藤内 ぢや、よしく〜。ぬしは、此馬をば引張つてゆかつしやい。

ト馬を渡す。砂王それを牽いて、又上手へ入る。藤内は眠つてゐる二
人の傍へ往き、ゆすぶつて

おい〜! …… これさ〜!

トこれにて小丹次と甲と一しよに目を覺まし、共に大欠伸をする。

小丹次 あゝ! ついぐつすりとやつたと見える。あゝ、ねぶたい〜!

従者甲 (改めて欠伸のびをしながら) あゝ〜! わしも同じくでござります。何にせい、昨夜よるべの今夜ぢや

藤内 はてな！（ト箒を止めて）此間うち、大分御不加減だとは聞いてゐたが、それほどだとは知らなんだがなう。……（ト頭を二つ二つ振つて）あゝ、どうも少（ち）べい善くないことが續き過ぎる。

（ト獨り言のやうに言つて）それに付けても氣にかゝるのは、あの子供らの歌やアがる唄だ。

小丹次 え？ 唄？ あ、「まざ／＼ツと物の怪！ たんだ一字ちがうた！」といふ唄か？

藤内 さうよ。（ト掃き残しを掃き寄せながら）何となく氣味のわるい唄だ。さうでなくつても、老公さまの今度の妙なお煩ひは、禁廷さまをお三方までも流し物にさつしやつた罰だの、祟りだのと、世間で言ひ觸らしてゐる處だからなう。

小丹次 さう言やア、老公さまは、（ト一寸聲をひそめて）随分若い時から没義道な事をなすつた人だといふから、何かの報いかも知れないや。とにかく妙なお煩ひだなう。あんな偉い、臆ツ玉の据わつたお人が、今ぢやア半時とおちついては能う眠らつしやらんばかりでなく、怖ろしく邪推深くならつしやつて、夜はあの二人の御老女と小三郎どの、外は、だアれもお傍へは寄せさつしやらんと言ふぢやアないか？

ト藤内は、それには答へず、少し間をおいて

藤内 とにかく、氣むづかしくならしやつたには相違ない。何にしろ、困つたもんだ。

ト言ひ／＼掃きじまふ。

小丹次 それに、あの、御別居以來、奥方とのお間柄も、一段と不味いらしいなう。一町半とは隔

たつちや居ないお別第だのに、奥方がお見舞なされるの、月に一度か二度だと言ふぢやアないか？

藤内 さア、（ト箒の根がたへ、小丹次と並んで、腰をおろしながら）大きな聲ぢやア言はれんが、つい半月ばかり前に、久しぶりで奥方がござつた時にも、何だかいざござがあつたやうだし……（トいひかけて）あゝ！ あの奥のお庭に、お座禪堂が出来た當座は、大分お加減も、御機嫌もよかつたがなア！

ト獨り言のやうに言ふ。

小丹次 若しこゝで、老公さまに萬一の事でもあつたら、跡は如何なるだらう？

藤内 さア、それが心配だ。第一、執權職のお跡目からが、あのお惣領の、武藏守泰時さまと、さまつてゐるやうでもあれば、ぬぬやうでもあるからなう。

小丹次 なるほど。

藤内 ところで、その泰時さまと奥方の伊賀の方さまとは生さぬ仲だ。

小丹次 なるほど。

藤内 だから、泰時さまの世になりやア、御當人はもとより、實のお子の、あの四郎政村さまも、

お婿の宰相實雅さまも、おのしのとこの大將も、おのづと今ほどにア幅の利かないことになるからなう。

小丹次 なるほど。

藤内 ゆうべも一昨日も(トいひかけて一寸考へ)お三人で夜深しの相談といふなア、事によると……

トいひかけたが、急に口を噤む。

小丹次 え？

藤内 いや、考へて見りやア、お跡目の事や何やかや、お氣が揉めてならない筈だ。言はゞ、あの牧の方さまと、ちやうど同じやうな廻り合せだ。

小丹次 牧の方さまといふのは、御先代時政公の、二度目の奥方のことだらう。たしか謀反か何かたくらんで、それが露れて、自害をさつしやつた人だらう？

藤内 その方だ。(ト昔を偲ぶやうに)あの時の一味は、お婿の平賀右衛門の佐朝雅さま。實のお子の名が政範さま。其時分、相模守さまといつたのが、なさぬ仲の今の老公さまだ。……(トいつて、口の内で)方も方、時も時。……まさとまさと……全くたつた一字ちがひだ！

小丹次 え？

ト此途端、向う(花道)より醫師紀河の矩秀(四十歳位)旅装束にて、

急がしげに出て來り、すぐに中門へ入らうとして、忽ち藤内を見附け、立ちどまる。

矩秀

や！これは、藤内どの！先づ以て御同様に大慶至極の儀でござりましたなア！

實はなア、われら、薬草採り集めのため、今日箱根路へと志し、既になア、あの大磯近くまで参つたる處、宿元からの早飛脚によつて、老公さま御容體俄に御變動と承つたのでびつくり仰天、すぐさま取つて返しましたとてござるが、先づ以て速かなる御回春は、大慶千萬でござる！や、さて、御高運な儀で、いやもう、重疊々々！御同前に、祝著至極の儀でござつた。……お！どなたかと存じたら、伊賀さまのお館の、小丹次どのか？……お見舞のお侶でござるな。てはまだ御主君には、御當邸に御座なされますな？

小丹次

はい。さやうでござる。

矩秀

いや、それは重疊！多分さうあらうと存じてまゐつた。上首尾々々々！どれ、早速お目にかゝつて参らう。御免下され。

ト矩秀そはくと急いで中門へ入る。

小丹次

相かはらず氣ぜはしい男だ。

藤内

肉親の兄弟ちふものは争はれんものだ。おぬしは記えちやアぬまいが、あの男の兄は紀河

の宗近といつて、よう似たあわて者の醫者であつたが、慾をかはいて牧の方さまの御謀反に一味して、とう／＼命を玉なしにしてしまつた。

小丹次 さういや、あの男も、この二三年こつち、頻つて俺のところや伊賀の方さまに取入るやうだが、つまり御典藥にでもならうといふ慾張りからだらう。

藤内 いづれ、そんなこつたらう。……(歎息して) あゝ、なぜ人は身の分限を守らんで又しても又しても慾をかはるか!……が、下々の者が慾で身を誤るのも道理かい。上の上の禁廷さまさへ——じつとしてござれア何の事もないのに——一昨年あの御謀反。その結局が、あゝしたお氣の毒な、物體もないお身の果だ。唐にも天竺にも例のない空おそろしい事だ! 禁廷さまを、しかもお三方まで島流し!……あゝ、どうかこれツきりで、何事もなければよいが。……(トいつて、半分口のうちに) まさとまアさ。時も時。……全くたつた一字ちがひだ!

小丹次

え! (ト藤内の顔を見返つて) どう? 何が?

ト此途端、上手の奥にて、又砂王の聲にて

唄 まアさとまアさ、まアさとまアさ。

まざ／＼ツと物の怪!

たんだ一字ちがうた!

物の怪や物の怪ツ!

たんだ一字ちがうた!

藤内 えゝ、いま／＼しい奴だ! 又あの唄を歌やアがる。……(ト上手に向ひて) これ／＼! 止め、止め、止め! その唄はやめだ／＼!

ト大きな聲にて叫ぶ。唄止む。藤内は溜息をして

あゝ、氣にかゝることだ!

ト此うち上手より砂王、馬柄杓て空の手桶を叩き、拍子を取りつゝ、又歌ひつゝ出て来る。

砂王

唄 方も方にさふらふよ。

時も時にさふらふよ。

たんだ一字ちがうた!

まアさとまアさ、まアさとまアさ。

まざ／＼ツと物の怪!

たんだ一字ちが……

藤内 えい、まだ歌やアがるか？ その唄は止めだちふに……

ト飛びかゝつて砂王の襟上を捕へてこづく。

砂王 (泣面になりて) あゝ、痛い……堪忍してくんな……堪忍してくんな……

小丹次 これさ、叔父貴……そんな手荒なことを。

ト小丹次中へ入り、よろしく止める。藤内とゞ砂王を突き放す。砂王
つんのめつて膝を突き、膝頭をすりむいたらしく、ワーツと泣き出す。

第二場 同別第内奥の一室

正面の上手寄り五間の間の中央一間は妻戸。其上下二間宛は壁。折り
曲つて上手一帯は蒔格子を下して在り、又、下手へ折り曲つたる奥寄
りの二間程は正面と同様の壁、前寄りの二間程は帳(壁代)を垂れ、
人物は屢々それを裏へて往來する。

其帳の下手に廊下口。正面の二間程は蒔格子を下し、ずつと下手の見
切は妻戸。こゝからも折々人物が出入する。

爰に、正面奥の妻戸前に、深見小三郎(十八歳)まだ元服せざる童形
の拵へにて、妻戸の掩ひになるやうな態度にて此方向きに端坐し、今
奥へ行かうとしてゐる紀河の矩秀を留めてゐる。矩秀は、やゝ斜に後
る向きに立ち身、二人とも既う大分激昂してゐる體である。
時刻は前の場のすぐ次ぎ。よき處に燈臺一脚。他には何等の調度も見
えない。

矩秀 はて、お退きなさい。お通しなさい。光宗さまに是非ともお目にかゝらねばならん急用が
ござるのだ。お通しなされ！

小三郎 いゝや、老公さま御容體お大切の折柄でござります。お取次ぎを承りをる手前に只一應の
御挨拶もなく、御病間へ推參めさるは不躰でござる。お控へなされ！

矩秀 はて、餘人ならば存ぜんことだが、自分は奥方伊賀の方さまのお引き立てを蒙りをるお抱
への醫師でござる。御容體伺ひの爲には、随分御病間へも推參いたす。はて、お通しなさ
れと申すに！

小三郎 いゝや、通されません。其伊賀の御方さまへも、御遠慮遊ばされて、お取次ぎなしには、御
病間へはお通りなされません。殊に、只今、お傍には天下無双の名医御典藥の行運どのが
附添ひをられます。かたぐゝ以てお手前などが推參めさるには及びません。御無用でご

ざる！

矩秀 何だと？……（ト開き直つて）これは異なことを申される。……成る程、行蓮どのは天下無双の名醫でもござらう。が、それを何の爲に持出すのだ？……ちよこ才な！

小三郎 （くわつとなつて）ちよこ才とは！ 何がちよこ才でござる？

矩秀 はて、それがちよこ才だ。……これ、なんぼ御寵愛を蒙つて、大寺の兒衆並に幅が利けばとて、あんまり増長しめされると、父御三郎次郎どの同様、はじめの榮華は末の零落、みじめな身の果となりませすぞよ。

小三郎 （眞者になつて）やア！ 大寺の兒衆並ちよこゆなに御寵愛を蒙つてとは、聞き棄てにくい。何が兒衆並でござる？

矩秀 はて、兒衆並でなからうか？ お手前ことし幾つだ？ もう十八よりやア少くはあるまい。それに何だ？ 元服もせず。……え！ その生ツ白い面附つらつきを見るたびに胸氣むねがわるくなる。奥方とのお仲たがひも、つまりは、おぬしらから起つたことだ。……ちよこ才な！

トいひすて、つツと通りぬけて、奥へ行かうとする。途端に入れたつて、小三郎は矩秀の袖を控へる。

小三郎 いや、お待ちなさい！……奥方とのお仲たがひも、手前から起つたこととは？ さ！

其譯を承りませう。

ト涙聲になつて、せき込んで、身をふるはせてゐる。

矩秀 え！ おはなしなさい。

小三郎 其わけを承らんうちは離しません。

矩秀 しつこい！ 何のかのと、御用がおくれる。離さつせい。……え、離さつせいといふに！

ト立廻りになる。とど、矩秀は手荒く小三郎を突離し、すぐに妻戸を開けて、奥へ行かうとする。

途端に、義時の侍醫、行蓮法師（五十七八）小坊主（十二三）一人を従へ、老女右近（四十五六）垂髪、小袿こちぎに送られて出る、出逢ひがしら。

行蓮 ほうい！ これは紀河どのか！

矩秀 や！……これは行蓮どの！ これはく、粗忽千萬！ 御免下され。

ト右近は、矩秀へ追ひ纏らうとした小三郎を押し隔てつゝ、右近（しづかに）小三郎どの、……此體ていは？

ト小三郎が何か言はうとするうちに

矩秀 いや、なに、これは物でござる。つい、その、いさゝか取急ぎましたので……いや、心せ
まにござれば、眞ッ平御免下され。

ト矩秀はそこへに會釋して奥へ入る。行蓮と右近とは、それを見送
つて、不審の思入。右近はやがて小三郎を見返り

右近 小三郎どの、御典藥どのへ、いつもの通り、お茶を。

トわざと席をはずさせる。

小三郎 心得ました。

ト下手へ入る。右近會釋して行蓮を上座に着かせ

右近 改めて伺ひますが、老公さまの御容體はいかにわたらせられますか？ もはや甚うお
氣づかひ申し上げる程でもござりますまいか？

行蓮 されば、何分にも、近ごろ不思議のお病痾いたづめでござるゆゑ、かんまへて御油斷は相成りませ
ぬが、あゝした御卒倒、御氣絶は、御疲勞の餘りとして、間あること。さしあたつての處、
強ち御懸念にも及びますまい。したが、先頃も聊か申しおいたる通り、病邪およそ六種
うち、とりわけ座禪不調、鬼病、業病の此三つは、醫師の力、藥餌の力ばかりでは覺束な
うござる。座禪の不調は専ら座禪によつて治すべく、鬼病は神咒法力を恃むべく、さて又

業病には、何よりも先づ奇特の御懺悔こそ肝要でござる。われら、一昨年来、頻つて禪
機の御修行をお勧め申したは、畢竟そこを存じてござつた。お加持、お祈禱の儀は、も
とより御如在のあらう筈なし。只心が、りは第三種のお業病でござる。前世に餘んの善業
あれば庸醫も能く重患を治し、前世に餘んの惡業あれば、如何なる靈藥の力を以ても、か
りそめの少病だに、之を治すること甚だ難しとござる。

右近 では御當症は、あの、お業病ぢやといふお按檢ござりますよな？

行蓮 されば、かの不思議なお譚話せんごといひ、いよゝゝ募らせらるゝ御不眠といひ……

ト此時、小三郎天目に抹茶を盛り、臺に載せ、捧げて出る。

小三郎 お茶めしあがられませう。

行蓮 これはかたじけなうござる。……(ト受取りて半分ほど飲み)時に、過日も申しおいたれば、よも
や御病人にお茶を參らせらるゝやうの儀はござるまいな？

小三郎 はい。其後は、いかやうに仰せられましたも、決してさし上げませぬ。

行蓮 (うなづきつゝ、飲み了りて)まことに、此物は、命を養ふの仙藥、齡よはひを延ぶるの妙術。山谷さんごくこれを
生ずれば、其地神靈たり、人倫これを探れば、其人長命なりとさへござれども、御不眠な
どの爲には大の敵藥。かんまへて御無用でござるぞ。

小三郎 其お言葉に附きまして、甚だ卒爾ながら、手前が聊か承りたい儀がござりますが……

ト言ひさして躊躇する。

行蓮 何事でござるの？

小三郎 あの、日頃深く酒を嗜みまする者が、茶の毒に中り、頓死いたすなど、申すことがござりまするか？

行蓮 (言下に) さやうな儀はふつに存ぜん。既に前將軍家實朝公御不例の折、先師榮西禪師が、これは只御宿醒の餘りと按檢しまゐらせ、清茶一碗を献じめされたる處、忽ちに御平癒の先例がござる。すなはち茶は寧ろ酒の毒を解する妙薬……なにゆゑ然様の儀をたづねめざる？

小三郎 さア、豫て其儀をば承りをりましたものと相見え、亡父三郎次郎事も、生前、大酒の後は、必ずのやうに茶を服用いたしをりましたが、ある朝——即ち臨終の前の事でござりましたさうな——例の通り、一碗の茶を啜ると間もなく、身心激しく惱亂いたし、わづらふこと僅に半時ほどで相果てました。全く茶毒の爲す所と、其際紀河の矩秀どのは申されたとやら承りましたが、何とも以て不審に存じまして……

トいひかける。

行蓮 あゝいや、いかな清茶の妙用も、多年累積の激しい酒毒に對してはな……

トいひかけたが、俄かに思ひ出したといふ風に

おゝ！ すぐさま尼公さま御許へ參上仕るべきお約束であつた。では、御免下され。

ト急に席を起つ。右近も小三郎も席を離れて見送らうとする。

あ、そのまゝ……

トとゞめて、行蓮は、小坊主を従へて、下手へ入る。

小三郎は一旦起ちかけて又坐り、じつと思案に沈んでゐる。

右近は立つたまま、思入あつて

右近 小三郎どの、これへ。

ト上手へ戻りて、座に着き、四下へこなしあつて

ちやうどよい折柄ゆゑ——只今こなたの申されたことを聞くに附けて——ちと折入つて知らせておきたいことがござる。……もそつと近う。

ト小三郎膝を進める。右近思入あつて

これ、こなたも、父御致興どの、最期をば、定業でないと思はれてぢやの？ いや、隠すには及びませぬ。疑ふのは道理千萬！

ト更に膝を進めて、更に聲をひそめて

さうして、若し定業でないと定り、下手人が分つたら、父御の敵が討ちたいか？

ト小三郎は、俯向いたまし、身を顛はせつゝ黙つて泣いてゐる。

おゝ、無念なは道理！ 其筈、其筈。で、其下手人に、大抵目星が附いてござるか？

トこれにて小三郎、尙ほ俯向いたまし、小聲にて

小三郎 只、あの、紀河の短秀の振舞を、如何にも不審なと存じまするばかり……

トいひさして、涙を拭ふ。

右近 はて、あの男などは木偶も同然。どこにどんな木偶つかひが……

トいひさして、「あゝ、ついうっかり言つた」といふ思入あつて、口を

噤む。小三郎よろしく思入。

右近は歎息して

あゝあ！ 一時は老公さまの御名代とまで時めき、懐ろ刀とも噂され、世人に怖れられなされた、あの、三郎次郎どの、嫡男と生れなされたそなたが、ほんにまア夢のやうな落ちぶれやう！ 父御の頓死にかへ、加へて、思ひがけないお咎め、一族を擧り、残らずお處刑。たつた一人残つたそなただけが、不思議の幸運。老公さまの御寵愛受け、けふまでは人々にも羨まれてござつたが、こよひのやうな御重體が續くとすると、以後は用心せにやなりませんまいぞよ。

トしみじみと言ふ。此間も小三郎は、俯向いて泣いてゐたが、此時顔を擧げて

小三郎 と、おつしやるわけは？

右近 (又あたりへこなしあつて) 卿は、父御三郎次郎どの、なにゆゑお咎めをお受けなされたか、其仔細をお知りやつてござるか？

ト小三郎漸く涙を収めて

小三郎 くはしい事は存じませぬが、攝津の國の地頭代とかを承りました前後から、次第に私曲の振舞募り、お館を笠に被て、暴威を振ひ、下の者を虐げ、身分不相應の驕りに長じ、剩へ、長江、倉橋二ヶ庄の事について、後鳥羽の院さまの御寵姫龜菊とか申す白拍子をさんく、に侮り辱め、それが原にて本院さまの御逆鱗甚だしく、遂に去る承久二年の、あの御大亂にも及びましたとやら。それやこれや重ねくの、公け私しの曲事が、お咎めの本のやうに承りをりまする。

ト語り了りて、又涙に暮れる。

右近 いや〜。まだ其外に謂れがある。

トこれにて小三郎きつと顔を擧げる。右近じつと其顔をながめて

こなたの心根がいぢらしい。打明けて話ませう。……其頃、京都の守護職であつた伊賀の左衛門の尉光季どの、また其弟御の式部の丞光宗どのと卿の父御とは、久しい以前から、犬と猿との仲らひ。随つて意趣意恨もかさねく。兄御最頃の、あの伊賀の御方が、何かにつけて、老公さまへ、父御をば讒訴三昧。つまりは、御方がお腰入れ前からの御功臣であるだけに、伊賀家一族の爲には、目の上の瘤。それに、先の奥方吳羽の前——わらはの伯母——の氣に入りてあつたといふのも彼の人達には——わらはも同様——不興の種。なればこそ、まだ何のお咎めもなかつたうちに、父御の、あの奇怪な死方は、たれが目にも非業の最期——毒殺——としか思はれぬ。のみならず、死後には、思ひがけぬ寝耳に水の御成敗。所領地悉く召し上げられ、妻子眷族までも厳しいお刑罰。それさへあるに、其召し上げられた所領地を、そのまゝ残らず、伊賀家一族へ下されたといふも、不審の至り。

ト此間、小三郎よろしくこなし。次第に激昂する思入よろしく

小三郎

では、父致興の御勘氣は、あの伊賀の方御兄妹の……

トせき込んで問ひかける。

右近

(上手を見て) あゝ、これ！……

ト此時、上手妻戸口より一條宰相の中將藤原の實雅(二十七八歳)立

烏帽子、狩衣、先きに、四郎政村(十六歳) 烏帽子、直垂、つゞき、
小童蜂王(十三四歳) 紙燭を持ち、案内して出る。

右近、小三郎はこれを見て席を退りて迎へる、右近うやくしく手を突きて

これはく！ もはや御退出でござりまするか？

ト蜂王は小三郎に向ひて

蜂王

小三郎どの、只今老公さまお目ざめにて、其許をお召しにござりまする。

小三郎

はッ。心得申した。……(ト人々に向ひ) 御免下されませう。

ト小三郎は蜂王と共に會釋して、上手の妻戸口へ入る。最前の天目は、
臺のまゝ、一隅に残してあること。

右近

(實雅に向つて) 其後の御容體は、いかゞにいらされましたか？

實雅

されば、お目ざめ後の御氣色いかゞにやと、ひそかにお案じ申してをつたが、一向に變は
らせられた御模様もない。此上は、ひたすら、御疲労の募らせられぬやう、心して御介抱
めさるゝが肝要でござらうぞ。

政村

あの亙理の婆は、まだ御所から退つてはまゐらんか？

右近

はい。まだでござりますが、もうやがて罷り歸るでござりませう。嘸かし尼御臺さまにも、

早速の御平癒を聞き召しまして、御安心遊ばしたてござりませう。

實雅 安心と申せば、伊賀の御方にも、折から、お引き籠り中の事とて、御自身にてお見舞の出
來ぬだけに、ひとしほお心づかひばしなされておはさうず。いざさらばすぐさま、お本第
へ罷り越して、くはしい御模様をばお知らせ申すことゝいたさう。……政村どの、そのも
とは？

政村 では、それがしも、兄上と御一しよに。

ト二人起ちかける。此時、右近下手を見て

右近 あゝ、もし！ ちやうど、亘理どのが退つて見えられました。

ト下手より老女亘理（七十五歳）出る。齡には似ず矍鑠としてゐる。

政村 おゝ、お婆！ 今噂をしてをつた處ぢや。尼御臺さまも、定めし御安堵遊ばしたてであらう
なう。

亘理は下手に着席して、よろしく會釋す。

亘理 はい。殊の外のおよろこびにて、尙ほ此上とも油断なう、折角御看護申し上げますや
うとの御仰せつけにござりました。……つきましては、ちやうどお二方さまお集りの好い
折柄——尼公さまの別してのお傳言をば、只今申し上げます。お聴き下されませう。……

（ト聲をひそめて）尼公さま内々の御仰せに、執權夫婦の仲らひ、近來とかく睦じからぬやに
聞き及ぶ。別第とはいへ、滑川たゞ一筋を隔てわづか一町あまりにも足らぬ處に住ひなが
ら、二年ごし病痾に悩む夫を、此中は絶えて看護をだにせぬといふは事實歟？ まことな
らば、けしからぬ事ぢや。さやうの事より、ともすれば、種々の流言の起る習ひ。汝立歸
らば、榮子をはじめ實雅、政村へも篤と此旨を申し傳へて、かんまへて不祥の噂ども立て
させぬやうに心させい。承久の大亂このかた、天下は靜謐など、思はゞ、油断大敵。血族
の者内輪にて争ふときは、忽ち外々の悔りを招くといふ格言がある。北條一家の安危存亡
は、取りも直さず、日本全國の安危存亡ぢやといふことを忘るゝな、と此尼が言うたと一
同へ申し聞かせい、との、くれぐれの御仰せ附けてござりました。

ト此間、實雅と右近とは、頭を垂れて、只默然として聽いてゐる。政
村は深く感じたる思入。

政村 おゝ！ おつしやりつけの趣き、きつと承つた。ちやうど今、兄上と御一しよに、母上の
御許へ参らうと思つてゐた處ぢや。……兄上、では、直に参りませう。

實雅 （うなづきて）いからませ。さやういたさう。

ト二人席を起つ。

右近 では、お見送りを。

ト右近は直理へこなしあつて、共に起つ。

實雅 あゝ、それには及ばん。

右近 いえ、せめてお廊下先きまで。

ト二人附いて、四人ともに下手へ入る。暫く空舞臺。天目は尙ほ残されたまゝになつてゐる。

やがて、上手妻戸口より伊賀の式部の丞光宗（四十五六）、烏帽子、直垂、先きに、紀河の矩秀、片手に硯箱を捧げ持ちて、うそくと従いで出る。

光宗 （四下を見て）むゝ！ だれも居らん。……ちやうど幸ひ。その、料紙、硯を。

ト席に着く。矩秀もよろしく上下へこなしあつて、座に着き、硯箱を

光宗の傍らへさしおく、光宗はすぐに硯箱を開きて、墨を磨りかけながら

矩秀、おのしはあの容體をどう思ふ？

お脈體を伺ひませぬゆゑ、しかとしたことは申しあげかねますが、お顔色といひ、お息づかひといひ、所謂死相がもう既に現れてをります。逆も此末十五日とはお持ちこたへ

はむづかしからうかと存じます。

光宗 （磨つてめた墨の手腕を一寸とめて）先きがさう見え透いてをるとすると、^{まじまじ}早急にやらねばならんかな。……（ト又墨を磨りかけて考へ）おれはこれから本第へ往つて——多分宰相も、もう參つてをるであらうから——何かと打合せをしておく積りだが、おのしは此——今ぢきに認めるから——一通を、急いで弟の朝行と光重へ届けてくれ、さうしてそれが濟み次第に……（トいひきして）とはいへ、もう何時だらうの？

矩秀 まだ亥の刻が、やつと廻つたぐらゐでござりませう。

光宗 では、それが濟み次第に、おのしも本第の奥方の居間へ来てくれ、まだいろく頼みたい事があるから。

矩秀 委細承知仕りました。

ト光宗は筆を執りあげ、二三行書きかけて、又暫く考へ、半分獨り言のやうに、とぎれくゝに

光宗 あの泰時めは……強ち恐るゝにも足らんが……いざとなつて、最も荷厄介なのは、あの尼どのだ。……ことに、手筈のまだ整はんうちに、あの婆さまに出しやばられたが最期、何もかも水の泡どころでなく、軽く流し物、重ければ、一同が命の種なし！……といつて、

荒療治をした日にヤア、たとひ事は成つても、第一に、身内、外様、諸大名の思はく。……何にしろ、故二位どの以来、源氏三代の動かぬ礎と、此何十年間、築きあげて来た——女に付き物の——あの不思議な人望と勢力とが怖ろしい！

ト半分は矩秀へ、半分は獨り言のやうに言ひく、時々筆を走らせ、書面を書いてゐる。

此以前、小三郎、奥より戻り来り、すぐに妻戸を開け、つツと入らうとして、急に身を退り、そつと妻戸を閉め、たゞ細目に少し開け残して、内の様子を窺ふ。之より先き紀河の矩秀は、光宗の獨り言の中頃に、片隅に在る天目に目を附ける。さうして、最初は、何氣なくそれを手に取つて弄つてゐたが、とゞ偶と思ひ附いたといふ風に、膝を進めて、光宗に向ひ、小聲にて

矩秀 もし！もし！式部の丞さま。

光宗 (なほ筆を走らせながら) 何だ？

矩秀 もし！(ト天目を見せて)これをお用ひになりましたは、いかゞにござりませうな。

ト此時、下手より互理の婆と右近とが連立つて戻り来り、これもすぐに内へ入りかけて、急に身を退り、互ひにこなしあつて、壁代の蔭か

ら、窺かに内の様子を窺ふ。光宗は、筆を止めて、天目を見て
光宗 といふのは？

ト矩秀よろしくこなしあつて、小聲で

矩秀 あの深見めをやりましたのと、同じ配劑が、一ち手輕さうに存せられますがなア。

ト光宗思入あつて

光宗 あの婆アさまをか？

矩秀 さやうで。

光宗 どうして飲ませる？

矩秀 やつぱりお茶に限りませうかな？

トあとは手眞似にて飲む眞似などいろく。三方、三人、同時に、さ
まざまの思入、こなし。

第三場 伊賀の方の居間

上手には、斜に上段の間。これは伊賀の方の寢所。其前一面に簾が垂

れてある。正面奥、中央三間の間は壁代、其うしろには總板敷の、廣
 廣とした入側。壁代の上下には柱、上手の柱から寢所までの間一箇餘
 は壁、其壁際には二階厨子。それから少し下手へ離れて古風なる鑑櫃。
 壁代の下手の柱から更に下手へ一箇餘は壁、それから斜に折り曲げて、
 一間半程の間も壁。此壁に添うて三段に設置つたる白木の神棚。式の
 如く、新蕨を敷き垂れ、最上段には白幣と明鏡とを安置し、供物、燈
 明など、いづれも式の如く、据ゑてある。よき處に、神酒の瓶子二箇、
 其一には紅色の紙を、其二には藤紫色の紙を、末廣に巻き立て檜の代
 りに挿してある。

神棚の下手の壁の見切柱からは、更に直角に下手へ折れて、一帯に菘
 格子の下りたる次の間。其下手の突當り（見切）は妻戸。

こゝに、上手、上段の間の前に、伊賀の方（四十二三）、垂髪、小挂、
 假病にて引籠りをる體。假病てはあるが、仔細あつて、つい二三日前
 まで殆ど斷食ともいふべき難行をつゞけてゐたゆゑ、顔色憔悴して實
 の病人のやう。髪附などもみだりがはしうなつてゐる。其下手、やゝ
 奥へさがつて實雅、やゝ前寄りのよき處に政村住ひ、談話なかばの體。
 時刻は前の場のすぐ後、（午後十一時ごろ）。よき處に燈臺一脚。

政村

もう其通り、尼御臺のお耳にさへ入つた程でござりますゆゑ、母上と父上とのお仲たがひ
 の事は、今はもう誰れ一人知らぬ者はござりませぬ。そのみならず其お仲たがひの原因
 は、當北條家の跡目相續の事について、父上と母上との御意見が合はぬゆゑぢやなどと、
 下々まで、頻つて噂いたしをりますげな。それもこれも、所詮は、母上が父上と御別居な
 されて、こよひのやうな折にさへ、お見舞もなされませぬゆゑでござります。北條家の安
 危は、天下の安危ぢやと、おつしやりました尼御臺のお言葉もござりますゆゑ、明日は、
 どうぞ、曲げても父上をお見舞なされて下されませ。

ト政村思ひ入つて言ふ。少し間を置いて

伊賀

（しづかに）世上の取沙汰や尼御前の申さるゝとなどを、さう氣にするには及びませぬ。尼御
 前も、昔は女將軍とまで唱はれた男優りでもあつたのぢやが、取る齡には勝たれぬと見え
 て、めつさりと目に立つ此二三年このかたの老惚れやう！畢竟、例の泰時が可愛さの依
 怙最頂からのお世話焼きぢや。一々取上げるには及びませぬ。……政村、實は、今日までは
 言ひませなんだが、そなたも既う十六歳、——幸ひ、實雅どのも同席ゆゑ、——こよひは、
 改めて、萬一の時の覺悟をば申し聞けておきます。よう聽いておきませ。……尼御前の
 言葉までもなく、當北條家の盛衰が、取りも直さず、日本全國の治亂盛衰の基つてもあれ

ばこそ、わしが此二年ごしの心づくし。いかにも、その噂の通り、わしは、あの泰時を跡目といふことが大の不承知でござるのぢや。……こゝをよう合點しておきや。……これが太平無事の世でもあらば、あの泰時のやうな、意地のない、似而非賢人に、家、國の大事を任せてもおかれようけれど、例の先年の、あの禁廷の御謀叛だけは、幸運と、難なく治まつても、兵馬の頭領たる肝腎の將軍家は、あの通りの木偶人同然。それを操る執權職の父御義時どのまでが、以前とは打つて變つたあの容體。さなきだに、武家にも、領家にも、野心を弓のやうに引き絞つて、隙もあらばと覗うてゐる者の多い折から、今若し再度の御謀叛でも起らうものなら、此鎌倉は直にも滅亡。ほんに、今こそは、當北條家の安危存亡の分れ目でござる。生中に、あの、世に後れ、智慧絶れのした尼御などの差出口がなく、又あの泰時の仁義立などがなくば、三上皇さまをさへ幽謫めまゐらせた當家の威勢を以て、天が下を一みじきに靡かすのも強ちむづかしいことではなけれど、心がりは、父御が萬一の曉に、是非とも建直さにやならぬ其新館の造營の最中に、内輪同志の氣込が揃はず、剩へ、肝腎の大黒柱があゝの腰弱どのなどであつたならば、どうして、四方内外から崩れかゝる大津浪のやうな、天下の動亂が防がれませうぞ？ 泰時などの眞似をして似而非仁義立をする時節ではない。父、兄に成り代つて、きつとした覺悟をせにやならぬ時でござるぞ。

トよろしく思入あつて言ふ。政村は始終うつむいたまゝ、じつと黙つて聽いてゐる。

實雅

(政村へ思入あつて)まことに、母上の仰せらるゝ通り、今の世に人の頭たらんとする者は、先づ威が無うては叶ひませぬ。將は大を誅するを以て威となし、小を賞するを以て明となすとござる。されば一人を殺して三軍震るべくば之を殺し、一人を賞して萬人悦ぶべくば之を賞す。殺は大を貴び、賞は小を貴ぶの道理。彼の先年の大亂の砌りなども、老公が先蹤なき英斷を施しめされたればこそ、井月ならずして天下靜謐。又、故源二位どの、如きも、常に、克く忍びがたきをば忍び克く斷すべきをば斷せられたればこそ、威武忽ちに一天下に光被し、ともかくも前後三代に互る榮華をば閱せられた。即ち、公の霸業は、其人徳と機運とに因るとは申せ、かたはらまた、克く忍び、克く斷せられたが爲でもござる。……政村どの、母上の只今のお言葉は、つまり、此道理をば仰せらるゝのであらう。人を殺すも、人を安んずるが爲ならば可なり、とは古人の金言。慈悲、仁義、溫順は、いづれも有りがたき徳行ではござるが、時と場合とを辨へねば、却つて身を誤り家國をも誤る基でござるぞ。

トわざと遠廻しに説諭する。政村は尙ほ俯向いたまし、黙つてゐる。

伊賀 (政村へ思入あつて) 政村、あれを見やれ。(ト正面下手の神棚へこなしあつて) あれなる正八幡大菩薩は、鶴ヶ岡のを移したのぢや、と他人には言うてゐれど、實は故郷佐伯の郷の氏神。そなたの爲には、祖父上、伊賀の守朝光どの、信仰なされたをば縁起に、二年このかた此居間の裡に勸請しまゐらせて、日夜心願を籠むるには、深い理由のあること。……あの神前の瓶子の紙の、紅ゐは平、藤紫は藤原。いふまでもなく、我が家即ち佐伯氏の姓は藤原。此實雅どのも同じ姓。又、北條は平なれば、そなたは紅ゐ。其紅ゐと藤紫の、色濃かに、未長かれと、とりわけ、此十日あまり四日の間は我が身を責めて、精進潔齋、腥きを絶ち、穀類をも十が一に減じ、毎夜、人の寝しづまる夜半を俟つて、ひそかに庭井戸の水を浴び、一心不亂となつて祈つたところ、ほんに、信あれば驗ありとか、不思議や、きのふけふは、いづこともなく聲あつて、何くれとなう、未來の事共をば告げさせらるゝ。其中にも、「もはや源氏の世は亡び果てたり、行く末は、ひとへに藤原と北條平の世の中なるぞ!」、と紛ふ方もない、まざゝとした神のお告げ!

トさながら今現に其聲を聞いて、いもゐるかのやうに、じつと目を瞑ぎ、ちよつと語を絶ちて暫く冥想に耽るかとも見えた。が、やがて又目を

開きて

伊賀 ……そなたの身の務めは、返すくも、重うござるぞ。父御の身には、いつ、どのやうなことがあらうも知れぬ。今から、覺悟してゐねばなりませぬぞ。

トじつと思入あつて言ふ。

政村 御教訓は、一々よう會得いたしましたしてござります。かんまへて忘れぬやうにいたします。……(トいつたが、暫くもぢくして) かしながら、母上さま、わたくしは、まだどうも、先刻聞いたことが氣にかゝつてなりませぬ、御病氣のせいで、父上には、とりわけ此頃中は、何事につけても怖ろしうお僻みなされますげな。父上に由ない御疑心を起させ、不快な思ひをおさせ申さぬ爲ばかりになりと、母上、どうぞ、明日は、お見舞ひなされて下されませ。

ト思ひ入つて言ふ。これにて伊賀の方漸くうなづき

伊賀 よしく。それほどにいやるならば、其中に見舞ひもませう。氣づかふには及びませぬ。……

ト此時、九つ(十二時)を知らせる鐘の音が聞える。

しかし、いつの間にか、いかう夜が深けました。もう、あれは、九つでもあらう。そなた

はもはや寢間へ往んで、お寝みなされ。

政村 では、お先さへ寝みまする。御機嫌よろしう！……兄上、御免下されませ。

ト政村會釋して、下手妻戸口より出て行く。
トすぐに正面の壁代を襲げて式部の丞光宗出る。伊賀の方見て

伊賀 おい、兄上か！

實雅 これは！（ト席を譲りて）いつの間に？

光宗 とうに参つたが、話なかばの體ゆゑ、わざと差控へてをつた。（ト席に着きて）老公の容體は、思つたよりもわるうござるぞ。矩秀は、此末、長うて十五日とは持つまいやうに申してを。いづれ、あの行運坊からも、委曲の容體を京都の泰時方へ申し遣すでもあらうから、多分、夜を日に繼ぎ、晩くも十數日以内には、彼仁立歸り参るに相違ない。さすれば、ただちに跡目相續の披露沙汰ともなるであらう。此上は、もはや便々としてはをられませんぞ。

實雅 して、御邊の御分別は？

光宗 されば……昨夜も申した通り、京都表は、亡兄光季の緣故によつて、既に十二分の手配りが致しあれば、たとひ泰時にどのやうな不慮の準備がござつたとした處で、前後内外から

の挾撃によつて、難なく取挫ぐ所存でござるが、さしあたつての一つの難儀は、あの尼御前。眞先に、しやにむに兵力を以て幽閉めるといふ荒療治が上策歟？ 或は例の天目へ抹茶と何との等分の調合役を、あの矩秀めへ再び申し附けたものであらうか？ そこはまだ、いづれとも、決しかねてをる。

トこのうち實雅思入あつて

實雅 いや。毒薬をお用ひの儀は御無用になされ。大義には親をも滅するの喻へなれば——つい只今も、あの政村どのへ、それにつき、何かと意見を申し試みたとてござるが——すなはち家國の爲に、撥亂反正を望むときには、随分共に思ひ切つたる殘忍をも餘儀なく忍ばねばならぬ習ひではござれども、苟も利世濟民を口に唱へて、天下の主たらんと志す程の者は、たとひ誤つて殘忍不仁の惡名をば蒙るとも、卑怯臆病の誹りを受けて、人君たるの徳をさすづけ、下萬民をして歸服に迷はしめるやうなことを致しては相成らん。民をして懼れ憚らしむるとも、憎み、危み、又は賤蔑ましむるやうなことを致してはなりません。即ち、時機と手段とは、毎に心して擇ばねば相成らん。毒害に至つては、所詮世を怕れ人を憚る所謂賊子奸臣らの隱慝。卑怯な、淺ましい所爲でござる。その儀はかまへて御無用になされ。

トきつぱりといふ。伊賀の方思入あつて、靜かに

伊賀 實雅どの、其見識も道理ぢやが、それよりも、すべて、事は、見事に手際よろとこそ心掛けるが第一でござる。手際さへ見事なれば、五逆罪とても、現世では強ち罪とはなりませぬ。氣味のよい程に大膽な、目覺ましい悪人は、却つて世の人に崇められます。……兄上、鳥さへも起つ跡は濁さぬ譬へ。後へ累ひを遺す様な小細工は不手際。あの深見一條以來、ちと内證事に立入らせ過ぎたあの粗忽者の矩秀を、又ぞろ斯うした一大事に使ふのは考へ物。……(トいひさして)それはさうと兄上、夫義時の餘命、もう十五日限りとは、あの矩秀の按檢ばかりではなく、行蓮坊もまた、しかとさやう申しましたか?

光宗 いや、行蓮坊の按檢は、例の如く、只重體とばかり。卒倒氣絶は間々あることゆゑ、それは強ち懸念に及ばぬといひ、別段日限などは申さなんだ。

伊賀 (うなづきつ) さもござりませう。(ト靜かに言つて) 宵に此知らせを聞きました折、例の一心の祈念によつて、夫の此容體の變動はさしたる事でないと察してゐました。兄上、若し其十五日を過ぎて、夫がなほ存命であつて、あくまで頑なに、泰時を跡目にと言ひ張つたならば、何となさるゝ? 病みほうけてゐる父を、恩義はあつても何の科もない舅を、政村なり、實雅どのなりが、理不盡に幽閉めては、何ぼう家國の爲とはいへ、順逆の道理が立ち

ますまいがな? 尼御前よりも此始末をばいかとなさるゝ? あの矩秀なんぞの淺はかな按檢が、何の當になりませうぞ?

ト冷かに言ふ。二人ぐつと詰まる。

光宗 いかさま! こりや聊か不覺であつたわい。只管事を擧ぐる手配りにのみ心を奪はれ、既に先刻矩秀に申しつけて、弟どもへ密意を傳へさせ、すなはち、一昨夜の打合せの如く、豫て墨打だけは致しおいたるあの三浦の義村に、いよゝ一味の臍を固めさせる魂膽までも講ぜさせ申したが、例の氣短か、先き走り過ぎて、つい其肝腎の事には思ひ及ばなんだ。……(ト一寸眉を蹙めたが)なれども、事こゝに及んでは、もはや順逆などを論じてをる所でない。臨終を俟つにも及ばん。速かに事を擧げうぞ。

伊賀 いや、暫く。(トしづかに止めて)あながち然う急かずとももの事でござる。夫が直にも落命せばいざ知らず、尙ほ存命である限りは、成るべく事を穩便に取計らふのが此方の得。やつぱり、此間中の申し合せの通り、も一度わらはから、改めて屹度談じて、天下晴れた譲り状を政村へ宛て、夫に書かすのが最上策。尼御前を幽閉めたり、泰時の下向を妨げたりする事は、其上での手筈なり、軍略なりでがなござりませうぞ。

トこれにて實雅思入あつて

實雅 母上の其御案は、至極妙策とは存ずれども、既に先頃の御對面さへも、空しくお言葉争ひに終つたとやうに承る。こよひの御變動あつて後の御容體では、ますます／＼老公のお心は僻みませう。随つて、御疑念もますます／＼深く、逆も其お談しは纏りますまい。

伊賀 いや、なう、先日は、夫の心を引いて見るため、わざとあの泰時をば譏り、また、前將軍家時代からの内證事のいろ／＼、——あの深見とわらはとの外には、知る者のない密事——をば言ひ立て、わざと手強う正面からばかり談じて見たのでござつたが……今思へば、柔よく剛を制すの譬へ、涙こそは女の第一の武器であつたを、下手に出なんだのはわらはの誤り……が、それはまアともかくも……其折の夫の様子やら、口吻やらから、ふつと思ひ附いたことがあつて、此頃中の勤行で瘦せ衰へてゐるのを幸ひ、其身支度のための此假病。

ト靜かに意味ありげに言ふ。

光宗 ふむ……われらはまた、言ひ争ひをした不機嫌ゆるゑの、假病とばかり存じてをつたが。……して、其思ひ附といふは？

伊賀 (冷靜に) 此二三日このかた、しきりに子供らの歌ひあるく奇怪な謠がござりますが、お二人は御存じか？

光宗 さういへば、「何とやらして物の怪」とか、……

實雅 「ただ一字ちがうた」とか、……

光宗 歌ひあるくのをば、いかさま、聞いたことがある。

伊賀 「方も方、時も時、……まささま、まささま、……まさ／＼と物の怪、……ただ一字ちがうた」といふあの謠の心を、こなたは何とお讀みなされましたぞ？

光宗 いや、一向に心附かん。

ト伊賀の方少し容を収めて、心しづかに、おちついて

伊賀 先日、政村へ跡目譲りの事を、立入つて夫に談ずるうち、例の深見の事に及び、やがて其因みてあの牧の方母子、其婿右衛門佐朝雅、稻毛の入道、畠山父子などを、又、それよりも先きに、二代將軍頼家どの、比企、仁田の一族などを、うま／＼計略を以て陥しいれられたのを手はじめに、あはよく和田の一族をも亡し又前將軍家右大臣どのをも、あの公曉どのをも、同じ手で、上手にかたづけてしまはれた其内證事の一々を、わざと數へ立て、見たところ、面の色が次第に變つて、如何にも堪へがたさうな苦悶の様子。なれども、それは、事の露顯を怖るゝよりも、ある不思議な心の鬼に責められてをらるゝ苦みと、見て取つてのわらはの案じ。……それゆるゑ、一昨日、内々にて、既に取寄せておいたものがござ

る。

ト徐かに席を起ちて

もし！
此方へ。

ト燈臺を携へて、先に立ち、正面の壁代を上手へ蹙げ排けて、廣い入側とも見るべき總板敷の次の間へ出る。光宗と實雅とは不審げの思入あつて従いて行く。

此板敷の向うには一間の妻戸があつて、其上下には蔀格子。尙其蔀格子の外には式の如き簀の濡縁があつて、一面に欄干を取附け、又妻戸の直前には三段の階子があつて其處から庭へ下りるやうになつてゐる。板敷へ出ると、伊賀の方は、燈臺をよき處に据えておいて、膝まづき、光宗と實雅とを見返り

伊賀

上手に秘し隠してをられたゆゑ、わらはさへ、はじめの程は、一向心付きませなんだが、夫が、生れ附いて忌み嫌ふ此一品、……其一品を種に。

トいひつゝ、板敷の一部の板を擧げ、床下から一箇の瓶を取り出し、板敷の上へあげ其蓋を取る。

ト光宗は、すぐに瓶の中を覗いて見て

光宗

これは！

ト此途端、實雅聞耳を立て、

實雅

暫く。……何か、床下にて怪しげな物音がいたす！

光宗

なに、床下で？

ト實雅は急に燈臺を引寄せて床下を覗く。同時に光宗は正面の妻戸を開く。これにて庭の一部が見渡される。けれども七日の月は既う疾うに落ちてしまつた後ゆゑ、向うは只植込が黒ずんで見えるばかりである。

ト光宗は、きつと庭上を透しながらめて、何物をか見附けたらしく

光宗

曲者ツ！

ト聲大きく叫ぶと共に、忽ち階子を躍り下りて、姿を消す。其曲者を追つかけたのらしい。

實雅は妻戸口から庭の方へと燈臺をさし出した。伊賀の方は、これより先、瓶の蓋を元の通りにして、起ち上り、實雅の後ろに立ちて庭の方を見やる。二人とも暫くは後ろ向のまゝで、同じ姿勢を保つてゐる。

幕

第二幕

第一場 北條家別第の奥庭

小山の裾を天然の姿のままに取入れて、わざとらしからぬやうに設置つたる奥庭の一部分で、正面は一段小高くなつてをり、さうして其やや下手には、二度ほどなだらかに折れ曲つた緩勾配坂がある。上手にも下手にも、前の方には、小山のだらしない裾が流れ出したやうに出つ張つてをつて、そこには大小雑多の立木。それから又、ずつと上手寄の松や杉の立木の間には、其奥の谷間への降り口、これも餘り急な勾配にはなつてをらぬらしい。すべて其邊には、雑草にまじる萩、すすき、その他の秋草。それより下手へかけての一带は、すぐに深い、廣い凹地に臨んでゐるのらしく、向うに松杉の繁茂した山々が間近く

見え、更に間近には同じく松其他の木の梢だけが見える。

上手の、谷間への降り口の傍には、枝振の面白い大きな松が一本、其根元に茅葺の四阿風の休息所。其あたり一面に、野生の萩や秋草が、今を盛りと咲き亂れてゐる。

前の幕の四日後、陰曆八月十一日である。時刻は今の午後二時過。

やゝ薄曇りの空模様。

老女互理が指圖をして、侍女甲、乙、丙、めいゝ箒を持ち、四阿の界限を掃除してゐる。甲と乙とは今丁度上手の降り口から掃除しつゝ上つて來るところである。

互理 (杖であちこちの叢を叩き廻りながら) やれ〜！ やれ〜！ これでもうようござらう。……お大儀お大儀！ これほど念入に掃除しておいたなら、よもや出をることではあるまい。あゝあ！ かしながら、御病氣の故とはいへ、何かとまあ、お嫌ひなさるものが殖ゑたことぢや。……(ト甲、乙に向ひて) そつちの方は、もう大事ござらぬかな？

侍女甲 はい。もう大丈夫でござります。

侍女乙 たつた一疋、ほんの蚯蚓ツ子のやうなのがをりましたが、すぐに彼方の谷の方へ追ひおとしてしまひました。

互理 だれも長蟲を好く者はないとはいへ、どうしてまあ、昨日けふのやうに、お厭がりなされることやら？ (トつぶやきながら、下手へこなしあつて) もう程なくお越してもあらう。さ、ぬしたちは、揃うてお迎ひに往つてござれ。

三人 はい。かしこまりました。
ト侍女甲、乙、丙は揃つて下手へ入る。互理は草臥れたといふこなしあつて、四阿の縁端に腰をかける此時、上手の降り口から、加持の藤内と砂王とが登つて来る。藤内は箒を提げて先に立ち、砂王は朱塗りの曲糸を背負つて上つて来る。

互理 (見て) お！お！ 藤内どの！ お大儀でござつたなう。又ざふらふ、例の、俄のお思ひ立て、さつきふなお庭のお掃除やら、お堂のお掃除やら。さぞ骨が折れましつらうなう。

藤内 何の、何の！…… (とつぶやきつゝ、砂王と共に四阿の下手へ廻つて) めつさりとお心よいやうには承つてをりましたが、それにしても、お堂でお座禪をなさるほどの、もうそんなお元氣でござりますか？

互理 いや。お心よいとはいへ、まだ。お重體でもあり、つい此間、あゝした御變事のあるつた間際でもあり、とりわけ昨日けふは、御典藥の他行中でもあるれば、萬一の時、取り返

しが附かぬゆゑ一同が強つてお止め申したれど、先だつて行蓮どのが、座禪不調とやらがお煩ひの原ぢやと申されたとかで、此頃のお氣むづかしさ、一旦斯うとお言ひ出しなされたは、いつかなお聽入れなさらばこそ、けふは今から夕かたまで、あの谷のお堂内で、お座禪を遊ばす筈。

藤内 はれやれ！ 先度にも懲りさつしやらず。……とにかく、けふは、たんとお歩かせ申してはなりません。そんな事かとも存じましたゆゑ、お堂の曲糸を持つて参りました。あれへお乗せ申して、お堂まで、みんなて昇いで行くことにいたしませう。(トいひつゝ砂王の持つて来た曲糸を見返り) ほう！ つい、お齒を持つて来るのを忘れた。……砂王どん、もう一度お堂へ往つて、あれを取つて来て下され。

トこれにて砂王うなづきつゝ、すぐに上手の降り口から降りて行く。
互理は此間何か思ひ出して、ひそかに泣いてゐたが、とうとうこらへかねたらしく

互理 なう、藤内どの！ あゝあゝ！ 長命はすまじいものでござる。老公さまの御容體、此頃の内外の御模様、世上の有様、何やかを見るにつけて、思ひ出さるゝは、三十もう九年のむかし。驕る平家はあの西海の波濤に沈んで、前の右大將さま御武運めでたく、六十餘州な

びかぬ隈もなく、此鎌倉表に御座所をお定め折のめざましさ！ 譬へば、大あらしの其後で——散り残つた斑々雲まだらぐもなどは何のその——大空一ぱいに檜扇のやうに金色こんじきの後光をおツびろげて、あの和なぎわたる海づらに、ぐんぐんと昇らつしやる大日輪さまのやうなとはあのこと！ 夫平六兵衛なつざどのは、其頃まだお血氣盛りの、若殿小四郎さま、今の老公さまのお傳役おつりやく。其縁ゆかりにつながる冥利みやうりで、伊豆の片田舎から、此鎌倉のお館へ、一足飛びの御奉公。それからとん／＼拍子。月毎に、年毎に、びつくりしつゞけの御當家の御繁榮。まア、どこまで伸びて行く御威勢やらと、喜んだのはむかし！ 花の眞盛りは、どうやら既もう見てしまつたやうに思はれて、あゝあゝ！ 此浮世があぢきなうござる。

ト泣く。藤内もこれを聞き、萎しぼれてゐたが、同感して

藤内 あゝあゝ！ 御道理ごもつごもなお述懐じゆつわいでござります。今のお言葉を聞くうちに、わしが眼にも遠い昔の有様が、まざ／＼と、湧わいで出ますわい！ 石橋山の御初陣ごはつじんには、わしも三つ鱗のお旗はた下したに加はつて、お侶りよに立ち、又壇の浦の合戦では、ともかくも手柄の眞似まねこと、はじめ大殿さまのお言葉をいたゞいた時の其うれしさ！……あゝ！ 二十臺のあの時分ときわでさへ、その親御さま優り、萬人優り、智慧者よ、勇者よ、どこまで膽いツ玉たまが太いか、底の知れぬ軍師よ、と評判のお館さまが、御老病ごらびやうの故ゆゑとはいへ、つい此間、半年ぶりでお見上げ申し

た其お後ろ姿のみすぼらしさ！ いや、お姿ばかりぢやない。承うれば、夜よるは時々、女子供のやうに、おびえたり、うなされたりさつしやるとやら。又、物もあらうに、蛇へびなんぞを怖おそがらつしやるとは、あゝ、それほどまでに衰しやへさつしやつたか？ (トいひつゝ、鼻汁はなぢをすゝつてゐたが、やがて) こりやいよく只事ただごとぢやアない。(ト獨り言のやうにいつて) あゝそれにつけても氣にかゝるは……(ト一寸四下へこなしあつて、聲こゑをひそめて) わしは、此お第やぐらの内うちで遠とほからぬうちに、何事なにごとか起おこりさうに思はれてなりませぬ。……

互理 え？

藤内 めんようなは、あのお本第ほんだいで、此間ぢやう、三晩も續つけて 何やら夜ふかしの御密談ごひみつだん……

互理 といふのは(ト覺えず乗り出して)あのお居間いまに於おて？

藤内 はい。光宗さまと宰相さまと、いつも定さだつてお三方……

互理 (ずつと聲をひそめて) 何ぞ聞き出したことござるか？

藤内 さア、御變動ごへんどうのござりました、あの夜よさりの子の刻過とき過ぎぎ、どうも氣にかゝつて眠ねられぬゆゑ、お裏門うらかどから、ついふら／＼、橋を渡つてお庭にわつゞきを、行くともなしにお本第ほんだいの、あの奥庭おくにわの枝折戸口えだせきこ、見ると、掛金かかが脱はなしてある。けぶだな、と思ひながら、つい我知らず、二足ほど踏ふ込む途端とたんに奥方おくかたのお居間いまの方ほうで、「曲者まがものッ！」と呼ばよつたけた、ましたい！ 一聲ひとこゑ！

疵持つ足！ うぬが事かとおツたまげて逃出さうとする其脊骨へ、昏闇を駈けて来て、ぶツつかつた一人の曲者！ はツとけしとんで此方は平伏る。そいつめは、てつきり此お別第へ、走り込んだに相違ないのが、又一つの不審……

亘理 して、その、曲者の年輩は……
トいひかける途端に、砂王、手に唐錦の大きな茵を捧げながら、上手の降り口から駈け上りつゝ、下手を見やつて

砂王 あゝ〜！ もう老公さまがお越してござりますぞ！

ト呼ぶ。これにて二人は話を止め、起ち上り、出迎への準備をする。
藤内は砂王の持つて来た茵を曲糸へ敷く。

此時。下手より右京の權の太夫義時（六十二歳）、長わづらひの上、つい四日以前の一變動のため、又一しほ衰弱したる體にて、半月ほど前に刺つたまゝらしい坊主頭の髪の胡摩鹽も鹽の方がずつと多く、髭は殊に白く、共にぢゝ汚く延びたまゝの蒼白な顔色。長直垂の上に五條の袈裟を掛けて、右手には杖を携へ、左は小三郎の肩にかゝり、右からは老女右近に腰を支へさせ、一足引きのやうにして、徐かに出て来る。つゞいて小童蜂王、義時が戒刀を捧げて附添ひ、侍女の甲は藥湯

を盛つたる天目を臺に載せて持ち、同じく乙、丙もその後に従ふ。
下手のだら〜坂近く來ると、義時は息切れがしたらしく、術なげに

義時 まて！ まて〜！

ト喘ぎながら言ふ。

小三郎 はッ。

トこれにて一同歩みを止める。

義時 ちよつと休む！ ちよつと！

ト尙ほ喘いでゐる。

右近 はい〜、かしてまゐりましてござりまする。

ト此時、坂の少し上手に膝まづいて迎へてゐた亘理は藤内を見返り

亘理 藤内どの、あのお曲糸。

藤内 はい〜。心得ました。

ト藤内は急ぎだら〜坂を登つて、四阿の前の曲糸を持つて來て小三郎に渡す。小三郎これを坂下のよき處へ据ゑる。右近、亘理ら介抱して義時をそれへ掛けさせる。

ト義時は、尙ほ幾らか喘ぎながら、あちこちを見渡しつゝ、やがて心

義時 閉ぢ籠つてばかりゐては、むすぼうれてならぬ心も、斯う蒼う廣々とした空の姿、涯もな
う見渡さるゝ山々谷々の景色をば詠むると、さながら洗ひ去られたやうに心地よい！……
あゝ！ まことに、音塵寂爾たり、消息宛然たり。一味蕭條として趣向すべきなし。……
あゝ！ つい先刻までは、水の涸れ盡きかけた泥池の水際で、喘いでゐる鮒か鯉かなどの
やうな氣持であつたが、此けしきを見、此松風の音を聞くと、大湖へでも出たやうに、暢
び暢びするわい！ はゝゝゝ！

ト淋しく、併しながら心地よげに笑ふ。

亘理

久かたぶりのお歩行ゆゑ、いかゞにやと、一同お案じ申してをりましたが、一向にお疲れ
も見えさせられませぬ其御容體。その御様子ならば、程なく御本復遊ばすことゝ、ほんに
ほんに、お嬉しう存じ上げます。

義時

(機嫌よげにうなづきつゝ) 時が来て、病魔が漸く離るゝ歟、或は行蓮の調劑が不思議の效をば見
する歟、きのふをとゝひの二夜さは、此二年ごし曾て覺えぬ快眠！ ぐつすと我れを忘
れ、夢も安らかに、全く生き返り、生れ變つたるやうな心持ぢや。壯年血氣の昔より、幾
たびと知らず、生死の間を出入し、備に艱難辛苦を嘗め、功名手柄の悦び、計略の合期し

た氣味よさ、或は富貴、榮華の歡樂、皆ほどくには得い遂げても來たが、未だ曾て此病
來の、眠られぬ苦しさに優る辛さは知らず、又きのふけふの此心地よさに優る嬉しさは覺
えなんだ。あゝ！ 時あつて三日食はず、破れ薦に互寒を忍ぶ、穴の中、橋の下の、あの
あさましい乞食非人さへも、しばく連夜の熟眠をば貪るといふに、一月の中只一夜も、
二時と續けては、うなされぬ夢をば結び得ぬ其苦しさ！……

トいふ間にも、いかにも堪へがたげな苦悶の色が面上に浮ぶ。さうし
て其不快な追懐に心を奪はれたかのやうに、暫く言葉を斷絶れさせた
が、やがて又我れに返つて

あゝしかしながら、けふばかりは、それをば拭ひ去つたやうな心地よさぢや！……天外の
青山も其色寡く、耳畔の鳴泉も其聲空し、とは、斯うした氣持でもあらうかい？ はゝゝ
はゝ！

ト又淋しく笑ふ。此間、藤内は、下手に膝まづいて、顔りに落涙を拭
つてゐる。義時はきつとそれに目を付け、不興げに眉を蹙めて

やゝ、藤内！ なぜ泣く？……きさまはなぜ泣くのだ？

トこれにて藤内は涙を收め、じつと義時の顔を見上げて

藤内 お殿さま！ ちやうど半年お見上げ申さなんだうちに、思つたよりは、いかうお寢れなされましたなア！ あの、豊後の國のお野立では、敵方の夜討の怖ろしさに、其一晩だけは、只の一人だつて寢た者はござりませなんだに、こなたさまばかりは高いびき！ 又、あの和田合戦の晩だつても、若殿さまをはじめ、まんじりともさつしやらなんださうなに、たつた一人平氣で眠つてござつたとかいふお前さまが、長のお煩ひの故とはいへ、只今の言葉！ あゝあゝ！ いかくお弱りなされたなア！ 此の上は御養生が專一でござります。……なアもし！ そのお體で、お座禪なんぞは、とんでもないことでござります。慮外ながら、まアま、お見合せなされたがようござりませうぞ。

ト苦々しげに言ふ。此間に義時の機嫌よげな表情はだん／＼消え、中ごろ憤々としたらしかつたが、さすがにじつとそれを制へて、わざと冷かに

義時 むやくしい事を申す奴だ！ ずつと快いから出て來たのだ。行蓮といふ醫師が附いてをるわ！……たはけめ！

ト此「たはけめ！」は、半分口の内て言つた積りであつたらしいが、六分手強く言ひ放つたので、耳の近くない藤内にも徹へたらしく、少

少むつとしたといふ思入て

藤内 もし、殿さま！……成る程、手前は痴人でもござりませう。が、手前は大痴人でも濟みまする。日本六十餘州の總元締めをさつしやりますお方は、何かの手ぬかりや間ちがひがあつた時分には、只「たはけ！」では濟みますまいぞよ。つい此間も、あんなお間ちがひ！ 生身の、しかも煩うてござるお體であるからには、いつ、どんな事があるかも知れたもんぢやござりませんのに、それなのに……

トいひかける。義時はこらへかれて、しかし靜かに

義時 何だと？ では、きさまは主の身に、何か不祥な事が起るのを望むか？

藤内 何の、お前さま、とんでもない！ 望みなんかはいたしません。けれども、うつかり輕はづみな事をなされて、何事か起つたら、どうなされます？

義時 (冷笑して) 起つたら起つた時だ。

藤内 いや、事が起つてしまつてからでは……

ト藤内は段々興奮して來る。右近と顔を見合せてゐた亘理が口を挿む。

亘理 あ、これ、藤内どの！

藤内 いや、起つてからでは、何にもなりません。何事もないうちの御用心が肝腎でござりま

す。もし！ 何よりも先きに……

亘理 藤内どの！

藤内 お家の跡目を、ちゃんと定めて置かせられませ。さうでない……

右近 藤内どの！

ト大きく呼ぶ。これにて藤内口を嚙む。此間義時は、だん／＼痲が高ぶつたらしく、全身を神経的に顫はせてゐたが、やつとそれを制して、せゝら笑つて

義時 きさまらの指圖を俟つおれか！……たはけめ！

ト口だけは冷かに言つたが、顔も身もぶる／＼と顫へてゐる。けれど飽迄も平氣を装つて、正面を切つてゐる。

ト藤内は、じつと義時の様子を見つめて、情けなげな愁ひ聲で

藤内 成る程、天下の智慧者と敵方にさへ褒められなされたあなたまでござります。手前などが、かれこれ申すがるものはござりますまい。なれども、あれほど安心して、御自分の手足のやうに思つて、お使ひなされた、あの、深見の三郎次郎どのでさへ、だん／＼と増長して、ついあゝした不心得を……

ト言ひかけたが、ふつと小三郎のゐるのに氣が付いて、口ごもり

いや、なに、あゝした仁は格別としても、結句、あんまり御自身の智慧袋ばかりを恃みにさつしやらん方がようござりませうぞよ。とにかく……

亘理 藤内どの／＼！

藤内 とにかく、お體をも、お家をも、折角お厭ひなされたが、ようござります。

亘理 これさ、藤内どの！

トきつと言ふ。これにて藤内一寸亘理を見返り

藤内 いや／＼、かういふ時にでも申し上げんけれア、お目にかゝる折がござりません。……もし、殿さま！……

ト又何か言ひかける。義時は、それにかまはず、つと曲糸から起たうとしてよろめく。右近、小三郎あわてゝ抱きとめ

右近 あゝ、もし！ おあぶなうござります。

義時 大分寛いだ。……座、々、座禪堂へ。

ト歩み出さうとする。亘理それを止めて

亘理 あゝ、もし！ お歩行では、ちと御無理でござりませう。まゝ、そのまゝでいらせられませ。

わたくしども一同で、そのお曲衆もろとも、お昇き上げ申しませう。そのまゝお膝を組ませられませ。……これ、小三郎どの、こなたは、お前へ廻つて、後ろ手でお曲衆を、……藤内どの、こなたはお背後から。女中がたは、それ、右と左りを。

トこれにて義時は、曲衆の上で胡座をかく。小三郎は前から後ろ向きに、藤内は背から、砂王をはじめ侍女、甲、乙、丙は左右よりそれを助けて昇き上げる。戒刀持の峰王は其後に附添ふ。一同だら／＼坂を登りて四阿の前を過ぎ、降り口へ向ふ。右近、亘理も従いて坂を登り

亘理 ようござるかの？……しづかに／＼！

右近 すぐ後から参じます。

亘理 御機嫌よろしう！

ト會釋する。一同降り口を降りて行く。ト亘理は右近を四阿へ請じつ

亘理 それでもまア、案じたよりは、お元氣なので、やつと安堵致しました。それはさうと、

(ト聲をひそめて)昨夜は折わるう人目に妨げられ、承りかけて、つい其まゝになつたあのお話、氣にかゝつてなりませぬ。幸ひに人もなし。あの後をおつしやつて下され。

右近 いづれ、あの小三郎どのからも、直接に御密訴申さるゝでもござりませうが、今日とな

つては、もはや猶豫のならぬ鼻の先きの一大事。實は、あの變動のあつた晩、お互ひに瞥と見たあの二人の怪しい素振。なれども、言葉が確とは聞えませなんだゆゑに、證據がなく、氣が／＼ながら、お互ひに、言はず語らず。然るところ、一昨夜、夜ふけて後、小三郎がひそかに参り、駭き入つたる密告。……(ト四下へこなしあつて)もし！ その仔細は……

ト亘理の耳に口。暫くさゝやく。

亘理 (驚いて)えゝ！ ではあの夜さり、小三郎どのが、あのお床下に忍び込んで……

右近 あ、もし！ 間遠なので、ようは聞えなんだれども……

ト又耳こすり

亘理 すりや、あの、やつぱり……毒藥を……

トいひかけるのを右近は手で制して、又暫く耳こすり。亘理はうなづきつゝ聽き了り

亘理 まア！ おそろしい！……此上は一刻も猶豫はならん。何よりも先に、京都にござる武藏守さまへ、早飛脚を以て、此事をお知らせにやなるまい。いや／＼、先づそれよりも先に、尼公さまへ此事をば……さうぢや。……それは、わしが此足で、これから直に……し

たが、後の事も、あの小三郎どのばかりでは心元ない。藤内どの、律儀が祟つて、大分御機嫌を損じた折から、あんまり驚かし申してはなりません。そこはこなたからよい鹽梅に。かういふうちも心が、り。ともかくも、まア、早うお傍へ往つてゐて下され。

右近 はい。合點でございます。

ト右近は急ぎ上手の降り口から降りて行く。

亘理 あ、心が急ぐ！ 泰時さまへの早飛脚は誰れに吩咐けたものであらうか？……いや、それもこれも、尼公さまへ申し上げた上での指圖。……さうぢや。

ト身づくろひして、杖を忘れ、だら／＼坂を走りおりようとして心附き、取つて返し杖を取り、再び駈けおりようとする。此途端、上手の降り口より藤内をはじめ、侍女甲、乙、丙及び峰玉、砂玉（小三郎だけを除き）皆々戻つて来る。

藤内 あ、もし／＼！ 亘理どの／＼！

ト呼ぶ。

亘理 お！ もうお行がはじまりましたかいの？

藤内 いえ、まだでございますが、お召になるまでは、小三郎どの、外は、退つてをれといふお

吩咐でございます。

亘理 さやうか？ では、こゝで休息めされ。お大儀でござつた。わしはちつと急ぎの御用が出

來たによつて……

トいひさして、そのまゝ行かうとする。此時藤内は下手を見て

藤内 お、おめづらしいことだ！ あれへ奥方さまがお越してござりますぞ。

ト亘理も下手を見て

亘理 お、成る程……てもま、折のわるい！

ト口の中と言つて、餘儀なげに立ちどまる。

藤内 （下手を見やりながら）まだお氣色がわるいかして、成る程、お顔色もめつきりとわるく、お寢れなされて、お運びも甚うお大儀さうだ。

トつぶやきつゝ、皆と共に、だら／＼坂を降りて、出迎への心がまへをする。

ト、下手より奥方伊賀の方、下げ髪、小桂、被衣をかぶり、病後の體よろしく、二人の侍女、小柴（二十五六）田毎（十七八）に左右から介抱をさせ、尙ほ一人の女の童に錦の茵を持たせて、伴れて、徐かに出て来る。

互理 (ちやくしく會釋して) これはく！ まだ御不加減のやうにも承りを行いましたに、癒おこたらせられましてか、思ひがけないお渡り。お祝ひ申し上げます。……さ、まづく、あれへお越し遊ばされませ。

ト互理は又先に立ちて坂を登りて、四阿うちまへ伊賀の方を請ずる。藤内と甲、乙、丙の三侍女及び峰王、砂王は坂下に残り、他はすべて四阿に集ふ。

伊賀 (四阿の前に立ちどまりて、靜かに、おほやうに) 館にも、けふは別してお心よいとあつて、久しぶりに御修禪ぢやと聞いたゆゑに、見舞かたく、氣保養に來ましたが、館には、もはや御上堂なされたかいの？

互理 はい。今暫くは、お人拂ひといふお吩咐でござりまする。

伊賀 お、それは！……では、暫くの間あひだ、この四阿で待ちませうか？……

トこれにて侍女、女の童心得て、四阿の縁に持參の茵を敷く。伊賀の方はそれに腰をおろしながら

互理には、其そのご後は久しう逢はなんだが、いつも健勝すこやかで、めでたいなう。

互理 おかたじけなうござります。お庇をもちまして。

伊賀 幾いくつ歳になりやつたかなう？

互理 七十五歳にござります。

伊賀 夫つちあひの平六兵衛が存命ぢやと、ことしは幾つであつたかなう？

互理 ちやうど八十……四歳になりませう歟？……

ト答へつゝも、氣のせく思入よろしくあつて

さて、え、まことに、甚だお慮外ではござりますが……

トいひかける。伊賀の方は、其以前から、とうに互理のそはくした様子に目を附けてゐたが、わざと氣の附かぬげに、悠長に

伊賀 それも其咎歟！ あの平六兵衛は、夫をつて義時どの、附人、……まだ江間の小四郎でござつた頃からの無二の腹心、かたへ離さずの郎黨。十年一日のやうなといふ古語はあるが、これは五十何年間、ふつに變らぬ奉公振！……

トいひつゞける。互理はいよく氣の揉める思入よろしくあつて

互理 え、まことにお慮外ではござりまするが、わたくしは、あの、いさゝか、取急ぎまする御用向がござりますゆゑ……

ト又いひかける、これより先、伊賀の方の足元から、二尺あまりの一

正の蛇が這ひ出し、やがて土手から低い地面の方へ、する／＼と滑りおり、だん／＼下手へと這つて行き、丁度此時、甲、乙、丙、三侍女の足元へ近づく。

甲 (はじめて氣附いて) あれい!

トけたましく叫んで飛び退く。乙、丙も同時に

乙、丙 あれい!

ト叫んで逃げる。砂王、蜂王も

蜂砂王 あゝ、蛇だ／＼!

ト騒ぐ。皆々驚く。藤内は持つてゐる箆で蛇を逐ふ。此途端、又一疋、伊賀の方の足元から這ひ出す。女の童目早く見附けて

女童 あれ! こゝにも!

トこれにて小柴、田毎。

小柴 田毎 おゝ! (トいひつゝ) しつ／＼!!

ト逐ふ。皆々驚いて、又そちらを見る。此以前、伊賀の方ぎつくりして懐をおさへる。藤内と亘理と三侍女とは、互ひに顔を見合せて「まアどうして蛇が出て来たらうか?」と不審の思入れ、こなし。

第二場 奥庭谷間座禪堂

天然のまゝでは、浅い、平凡な峽たるに過ぎぬ處を、多少の人工を施して、何さま一かどの深山幽谷らしく設置ひ、兼ねて往來、登降の便宜をもよくしたる凹地。上手、下手、正面とも、見える限りの處は、概して松杉の生ひ茂つてゐる山の腰や山の裾の景色。ずつと下手に、此凹地への降り口が、岩組の間に見え、又正面奥の上手寄には一筋の絲のやうな瀧が見える。

此凹地の中央に一棟の座禪堂。唐、宋いづれとも附かぬ支那風、和風折衷の白木造り、茅葺。三間四方。正面の三間は、真中に九尺四枚の疊み扉、これは悉く明け放し、残る左右の四尺五寸づゝは火燈口式の格子窓を取り附けたる板目。側面も、背面も、同じ式。内部は一面の龕堂の周邊にも、龕。二段の低い石段。此石段も四面一様に取附けてある。

前面の軒下には喚び鐘。

堂内の中央、やゝ奥の方に文珠大士を奉安したる龕。其前に、燈明及び供へ物をするための大小二脚の卓子。其脇に香爐臺。更にそれよりも前の方、よき處に、二疊敷ほどの禮盤。小さい方の卓子の上には、侍女と峰王とが持参した品々——天目の藥湯と戒刀——が載せてある。又、禮盤よりも上手、やゝ前寄には、前の場の曲糸、茵を敷いたまゝ。其すぐ傍に義時。義時は、つい今がたまで曲糸に掛けてゐたらしいが、此瞬間には酷く激昂した顔色で、やゝ斜に下手へ向いて、突立ち、右手に高く杖を振上げてゐる。其すぐ下手、義時と屏との間に膝まづいて、頼りにそれを止めてゐるのは、老女の右近である。小三郎は、更に其下手の前寄に、即ち屏の外の盤の上に平伏して、しきりに詫びてゐる體である。

右近 如何やうな不埒な儀を、小三郎が申し上げましたかは存じませぬが、ま、暫く、暫くお待ち下されませ！ どうぞまア！ 暫くお待ち下されませ！

義時 えい、とめるな。邪魔するな。……どけく……無禮至極な奴だ。ぶちのめしてくれ。……えい、どけといふに！

右近 あい、もし！ お慮外ではござりますが、ともかくも其仔細を、どうかまアわたくしに、

一應仰せられて下さりませ。承りました其上では、決してお止めは致しませぬ。……まアまア！

トこれにて義時は漸く振上げてゐた杖をおろし、しきりに喘ぎながら

義時 此數ヶ月以來、曾て覺えなんだ快眠によつて、めづらしくも頭燃が熄み、心の安靜をば得たるゆゑ、久しぶりにて座禪を試み、けふこそは無念無想の別境に神を遊ばせうと、限りなく樂みにしてをつたものを……あの藤内めが、おのれ……恩に狎れをつて私意を挿み、……(ト小三郎を睨み) 讒訴三昧をいたしをる！ おのれ、親に似た小才覺な、不所存な、無禮な……

ト壘みかけて言はうとしたが、あんまり激昂したため、息を切らせて、

頼りに苦しげに喘ぐので、右近はさまざまに介抱し、やつと和めて曲

糸に腰をおろさせる。此うち小三郎は泣きながら

小三郎 讒訴三昧とは、お情けないお言葉でござります。只今も申し上げました通り、其折、其場に行き合はせましたは、わたくしばかりではござりませぬ。右近どのも、又あの亘理どのも、たしかに見たと申されます。其言葉の一々は、間遠ゆゑに聞えませなんだが、あの紀河の矩秀が、お天目をば手に取りあげ、それを飲む真似をいたしまして、「あの深見めをか

たづけたと同じ手段で云々」と申しましたことだけは、決して相違ござりませぬ。

義時 やい！ 病みほうけて、此義時の目が昏んだとても思ひをるか？ 「深見を云々」といふ、其一言にばかり拘泥りをるので、汝の心の底が見え透くわい！ 察するところ、父の所領地を奪られたのが無念さに、伊賀家一族をば敵と怨み、それで讒言を構へをるのであらうが？

小三郎 存じもよりませぬことを仰せられます！ どうしてわたくしが、假にも其のやうなことを……

義時 いゝや、言ふな。かねぐ父三郎次郎の頓死に疑念を抱き、随つて種々の臆測を試み、或は、奥はじめ光宗らが、豫め謀つて陥れたことのやうに、邪推しをりはせぬかと、實は、とうから疑つてゐたが、……さやうな根性では、或は予をさへも怨みかねまい！ 此恩知らずめが！

小三郎 (きつと興奮した顔を擧げて) それはあんまりなお言葉でござります！ 御無體なお言葉でござります。お怨みに思ひまする程ならば、とうにお怨みを申します。なれども(トいひかけて、泣きながら) 十四歳以來の御高恩を思ひまするゆゑ……

トあとをいひかれて敵愾をする。

義時 (更に目を険しくして) 何だと？ とうに怨む？……其譯を言へ……

ト小三郎なほ黙つて泣いてゐる。

いや、其わけを言へ。

ト小三郎泣きながら、少しく顔を擧げて、怨めしげに

小三郎 父一人のお咎めは、是非がないとも存じますが、所領地悉く召し上げられました其上に、随分お館のお爲には、父三郎次郎は、長い年月の間、粉骨碎身して、御奉公仕つたと承りをりまするに、何にも存ぜない妻子眷族の末までも御誅戮……

トいひかける。右近氣を揉み

右近 あ、これ、小三郎どの！ 小三郎どの！

トきつと叱るやうに言ふ。これにて小三郎黙る。此間、義時はじつと

小三郎を見詰めてゐる。右近は更に形を改めて義時に向ひ

小三郎が只今の、聊爾千萬な失言は、何とぞお聞き棄て下されませう。小三郎に限りましては、お讒言を申すとか、お怨みに思ひまするとか、さやうな不所存が、かつふつ、ござりませうとも存じませぬ。又、あの矩秀の申しましたる儀を、どう不行届に言上いたしましたかば存じませぬが、矩秀がああ夜さりの振舞には、何かと不審の事共のござりました

事だけは、互理も、わたくしも、たしかに認めましたのでござります。……(トいつて、小三郎を見返り)これ、小三郎どの、あのお本第かみやしきでの其折の顛末をも、もう委しくお申し上げなされたか？

小三郎 いえ、まだ中々そこまでは、申し上げませぬのでござります。

右近 あれを申し上げては、お疑ひ遊ばすが御道理ごもつども。先夜わしに知らせなされた通り、有りのまゝをお申し上げなされたがようござらう。……御前、お聴き下されませ。あの夜さり、矩秀が手真似や耳打にて、光宗さまへ密々の話の模様、何とも以て合點參らず、互理も、わたくしも、心元なう存じましたゆゑ、實は、わたくし一存にて、此小三郎に、内々に申し含め、萬一の用心のため、御庭内を竊かに見廻らせましてござります。……さ、その後あきはこなたから。

ト小三郎へこなし。これにて小三郎は改めて義時を拜して

小三郎 御庭内を見廻りますうち、ふと小耳に挟みました其夜のお本第かみやしきのお會合のことが、何となく心に掛り、我知らず、お庭を離れ、つい、あの橋を渡り、お本第かみやしきの裏門口から奥庭づたひ、やがて奥方のお居間に近づき、……もしお咎めを蒙らば、一命棄つるまでと覺悟を定め……竊にお床下に忍び入れば、ちやうどお密談の眞最中。間遠ながら、とぎれ／＼に、

漏れて聞えまする奥方のお聲、實雅さま、光宗さまのお言葉。……たしかに近々に、容易ならざるおくはだて。……尙ほもくはしく聴取りませうと存ずる折から、俄の物音。上から颯と射す火影に、見咎められては一大事と、あわて、お庭へ飛んでいで、一さんに逃し出します其背後うしろに「曲者ッ！」といふ光宗さまのお聲！ あぶない處を暗に紛れ、立歸つてござりまするが、……其折洩れ聞きました断片的みぎわくの、毒害云々といふお言葉によつて、容易ならぬ御大事と心得まして、かやうにお訴訟に及びましたのでござります。

ト此間に義時の表情いろ／＼に變り、だん／＼耳を傾ける。けれど尙ほ半信半疑の體で、黙つてゐる。

右近 つまり、小三郎の曲事くせごとは、わたくしの由ない心添へから起りましたこととござりますれば、何とぞお咎めはわたくしに課おはせ附けられまして、彼れが申し上げます事共をば、尙ほとくとお聴取り遊ばしますやう……

トいひかけるを義時は不快げに手にて制して

義時 措け／＼……え、措けといふに！

トきつといふ。

右近 は、

義時 おれは座禪をする。二人とも、呼ぶまでは、退つてをれ。……(ト険しい聲で言つたが、やがて聲を和げて) 今聴きかけた事は後に又訊ねる。……退れ!

ト靜かに言ふ。

右近 小三郎はッ。

ト義時は曲糸を離れ、香爐臺の方へ歩み寄らうとしてよろめく。右近急ぎ立寄りて介抱する。義時は、後ろ向のまゝ、手でそれを制しつゝ、

義時 よし〜!……構ふな。(トいつたが、急に見返つて) 暫くは、だれも來ることならんぞ。

右近 はい。

ト曲糸に敷いてある茵を取つて禮盤の上に敷き、軒先の喚び鐘の撞木を取りおろして來て其傍に置き、やがて

では、御免下されませう。こゝにお撞木をばおきます。御用の折にはお喚び鐘をお打ち下されませう。

ト會釋して扉の外へ出て、なほ此時までも俯向いてゐた小三郎を促して先に立ち、石段を降り、ちやうど此時香を焚きつゝある堂内の義時へ思入よろしくあつて、徐かに下手へと進み、やがて坂道を登りて、二人ともに姿を消す。

義時 不埒な奴だ! 無禮千萬な奴だ! 主に對して指圖がましく……下郎の癖に!

ト険しい目附をして、きつと下手を見やつたが、忽ち目を瞑り、しづかに禮盤に上り、茵を二つに折つて尻に敷き、式の如く結跏趺坐することよろしく、手を結んで臍下に安んじ、二三度深呼吸をしてゐたが、程なく不動不言となる。

ト見るうちに、そろ／＼顔面神経が働きはじめる。すると、目を瞑つたまゝ、小聲で

光宗とあの實雅とが……(トいひかけて暫く間を置き) いや、讒言とばかりは思はれん。現に右近があゝ言ふ。……(ト又暫く無言)……織子の泰時の世となつては、何事も儘にならん。……だから、政村に跡を繼がせて……(これまでは小聲でつぶやいてゐたが、急に思ひ當つたことがあるらしく、少しく聲を高めて) さういへば、現に此間、彼女がおれに對つて……

ト俄にぎよつとした思入で、目を開き、急に左右前後を見返り
何時!……

トいひかけると共に膝を崩し、急に起上つて、後ろの小卓子の上の戒

刀を拵と取つて引附け

決して油断はならん!

ト小聲で口早に言ひ足したが、やがて又坐に着いて

が親に似て、中々執念ぶかい、僻んだ根性もある奴。……うつかりとは信ぜられん。……氣取つたかも知れん。……(ト手を組んで考へ)まさか俺がさせたとは思ふまいが……

ト言つて、俄に愕然として、我に返つたといふ思入。

あゝ! 雑念! 雑念!

ト急に目をふさぎ、膝を組み直し、又二三度深呼吸をして、半分口のうちに

諸法皆是因縁生、因縁生故無自性、無自性故無去來、無去來故無所得、無所得故畢竟空、畢竟空故是名般若波羅密、南無一切三寶、無量廣大、發阿耨多羅三藐三菩提、納慕簿伽伐帝、鉢刺壞波羅躬多曳、恒躬他、室姪曳、室麗曳、室麗曳、室麗曳……

ト唱へつゞける。

第三場 座禪堂の背後

堂の背面の扉は閉ぢたまゝになつてゐる。こゝにも、前面のと同様の低い石段が取附けてある。

正面にも、上手にも、下手にも、ほゞ前の場の背景と似たりよつたり、松杉の生ひ茂つた山の腰や山の裾が見渡され、ずつと上手奥の險阻な岩組の間には、わざと險しく設置つたらしい降り口が、大きな木立越しに見えてゐる。此降り口を降り切つた處に、そこに自然石をころがしたまゝの石橋、其下は細い石清水の流れ。其邊、小笹、雜草、蔓物等が生ひ茂つてゐる。それから、ずつと前寄のやゝ上手にも岩組、そこに自然のまゝの泉があつて、淺い井戸の形をなしてゐる。此の泉の末も、前の流れへ落ちて行くらしい。

伊賀の方は、侍女の小柴と田毎とに介抱せられて、上手の險しい降り口を降りて来る。田毎は伊賀の方の被衣を持つてゐる。やがて石橋を渡り了ると

伊賀 病後に、久しぶりで歩いたせいか、ちつとばかりの此坂路が、けふは、ことの外、大儀な

やうに思はれた。

小柴 そのお答でござりませうとも。こちらのお道路は、あちらの御本路とは異ひまして、わざと深山とやらのやうに、険しうおしつらひ遊ばしたのでござりますもの。御病後の事ゆゑ、嘸お疲れでござりませう。ちつとまアお休息遊ばしませ。お館さまには、まだくお座禪の最中さいちゆうでもござりませうほどに。

田毎 ほんに、さう遊ばしませ。おからだに障りましては、おわるうござります。

伊賀 いやく、それには及ばん。すぐに行きませう。……したが、お氣むづかしい折から、そなたくちが附いてゐてはわるい。用があらば呼びませう。今の、あの二本松の邊に控へてゐや。

二人 はいく。かしこまりました。

ト伊賀の方、田毎へ「かつぎをこちらへ」とこなし、これにて田毎は被衣を伊賀の方へ渡し、小柴と共に會釋して、元來た坂路を登りて、姿を消す。

ト伊賀の方は徐かに左右を見廻し、やがて懐ろへ手を入れて、何物かを探る思入。

ト其襟元から大小三疋の蛇へびがによろ／＼と鎌首を出す。それを見て一

寸思入、すぐに指の先さきで軽く其頭を叩いて引込ませ、同時に下手前の泉に目を附けて、徐かにそれへ立寄り、おのが顔、姿を水鏡に映して見ることありて、うなづき、やがてもう大分斜になりかけた午後の日光を厭ふらしく、かつぎを被りつゝ、そろ／＼堂に近づき、石段を上り、堂の側面に出て、火燈口式の窓口から、そつと内部の様子を窺ふ。

第四場 以前の堂内

前の場の通り、義時は、瞑目して、禮盤の上に結跏趺坐してゐる。が、顔面神経は絶間なくぶる／＼と顫動してゐて、心の中は落ちついてゐないらしい。その顫動も、はじめは顔面だけであつたが、見てゐるうちに、それが全身に及ぶ。次の獨語は、或部分は只の自問自答であるが、或部分は辯疏のやうでもあり、叱咤のやうでもあり、或部分は疑惑の歎息でもあり、或部分は懊惱の呻きでもあり、或部分は夢の裡でうなされてゐるが如くである。恐怖、悔恨、猜疑、憂悶、心の苦み、肉の疼み、種々雑多の感情が混淆ごうごうになつて其心中に洶湧し、往來し、

衝突してゐるらしいのが、じつと瞑目はしてゐるが、其顔面表情に、歴々と見えてゐる。て、其言葉の調子も、はじめは低くもあり、れごとのやうでもあるが、やがて、それが高くもなり、急にもなる。

義時

それは是非に及ばなんだのだ。……天下は天下の天下だ。天下の安危には易へられんわい！……馬鹿ッ！……けれども、あの折、××みづから出陣せられなかつたのが、此方の幸福だつた。怖いのは、人心の微妙な作用だ。……決して侮れん。……だから、泰時が——餘計な事に！——途中から引返して来て、「若し御親征に逢つたら、如何しよう？」と聽きに來た時……其時、おれがさう言つた。「まさか鸞輿おんこしに向つて弓を引くわけにはいかん、……けれども……」

トいひかけたが、俄に愕然と我に返つて

あゝ？

トいふと共に、急に崩れかけてゐた形を直して、半分口のうちに

内空ないくう外空がいくう、内外空ないがいくう、空々くうくう、大空たいくう、勝義空しょうぎくう、有爲空うゐくう、無爲空むゐくう、畢竟空ひつぎやうくう、散空さんくう、無變異空むへんいくう、本性空ほんじやうくう、自想空じさうくう、一切法空さいはふくう、不可得空ふかそくくう……

ト唱へく、次第に沈黙し、二三分間は不動不言でゐたが、やがて又

我知らず、半眼に目を開いて、苦悶の表情をして、情けなげな聲で

あゝ！ あゝ！ 隱岐の小島！……××このかた××として××××つゞいて來た……天子だ！

ト思はず此末の一語を大きく手強く言つた自分の聲に駭いて、我知らず目も口もくわつと開けて、正面を切り、いはゞ物におびえたやうな表情をしたが、やがて又我に返つて、怖い貌をして

何を馬鹿な！……××などは有らう筈はない。同じく人間だ！ おれてなくて、どうして此亂世が治まる？……馬鹿なッ！

ト言つて、居丈高になりかけたが、やがて其怒らせた肩をおろして、又じつと目を瞑つた。が、一分と経たぬうちに

が必ずそれを口實くひじやくに、吊ひひ合戦あひせんなんぞと言ひたて……

ト又暫く間をおいて、目を瞑つたまして

今こそ勢ひに怕れて蟄してはゐるが……いや、たしかに恨んでゐる。……まさか、あの一族だけは……大丈夫だらう。……あいつをあれだけ手なづけておいたから。……よもや？

トまては小聲で穩かにつぶやいてゐたが、やがて堪へがたげな苦悶の表情をして、頭をぶるくと顫はせたかと思ふと、又目をもくわつと

あゝ！ あゝ！ 此四十年來、心血を絞り、骨々を碎きみじいてまで、やつと築きあげて來た北條の地盤も、おれが目を瞑ると一しよに、忽ちぐわら／＼と崩れてしまふのか？…
…あゝ千仞の功も！…あゝ！

ト額に手を加へて暫くは無言で、苦悶してゐたが、やがて如何にも草臥れたらしく、歎息して

あゝ！ 疲れた！…あゝ、あゝ、おれも疲れた！…あゝ、あゝ、果しもない心づかひ！
それなのに、一人として役に立つ奴はない！ 一人として此苦みを知つて、片腕となつてくれる奴がない！ あゝ！ あの深見…三郎次郎！

トふと言ひかけたが、忽ち苦い顔をして口を嚙み、やがて又太い溜息をして

あの泰時は…あゝ！ あれはまたあんまり！…

トいひさして又力なげに歎息して

あゝ！ 疲れた！ 疲れた！

ト如何にも意氣地なく、ぐたりとなり、やがて暫く術なげに喘いでゐたが、漸くにして

いや／＼ いや／＼！ (といふと共にきつとなつて) 何をいつてゐるのだ！ 何を考へてゐたの

だ！ あゝ！ 又しても怠隙！ 妄念！ (ト目を瞑つて) 生死苦樂！…大無常！…大無

常！

トいひ／＼、取り亂してゐた形を改め、後ろの龕の方へ向き直る。さうして恭しく合掌禮拜して、極小聲で

南無文珠大菩薩！ 南無文珠大菩薩！ わが此昏蒙何の時にか醒めん！ 願はくば、あゝ、大慈悲を垂れ、大般若を頒ち下したまひて、わが此昏蒙の苦を抜かせたまへ！ 救はせたまへ！ 南無文珠大菩薩！ 南無文珠大菩薩！…

トだん／＼聲を低め、とゞ無言になつて祈り、やがて向き直り、更に結跏趺坐し、瞑目したが、二三分すると、こんどはこくり／＼と居眠をはじめ、幾度も禮盤から轉げ落ちさうにしては驚き醒め、又何事か口の内で唱へ／＼してじつとなる。かと見るうちに、又もこくり／＼、やがて又驚き醒めて、唱へ言を繰返す。そのうちに又もや顔面神経が顔へ出して來る。すると、小聲で、斷續的に

頼家の死んだのは、いふまでもなく…實朝も…公曉も…(ト暫く間を置き)うま／＼繼母をおとし入れた上に、現在の實父をも幽めたなんぞと…

トいひかけて又暫く黙つてゐたが、急に何か不安を感じたらしく
 いや／＼、義村とても——手なづけてはおいたが——油断はならん。……それにあの……
 實雅！ 家柄が家柄だけに……（トきつと何か思ひ當つたことがあるらしく）どうも本當らしい！ 光
 宗と彼れと……紀河の矩秀……紀河の……（トいひさして溜息を吐く）さうだ！ あの時、圖らず
 も、あの宗近めの毒薬を奪ひ取つたのを幸ひに……牧の方の陰謀の裏を搔くため……（トい
 ひかけたが）可哀さうだつたのは弟……政範！

トいふと同時に、一種名状しがたい苦悶の表情をして、目を開き、情
 けなげに

あゝ！ 政範！

トいつて、悲しげに首をうなだれ、暫くの間無言でゐたが、又急に何
 か思ひ出したらしく、眉をひそめて

此間、あの蜂王めが、庭を歌つて歩いてゐた奇怪な唄！……それから、此頃中二度まで續
 けて見た、あの厭な夢！……まさとまさ！……雅と雅、政と政！……方！……時！……全
 くたつた一字ちがひだ！……まざ／＼と物の怪！……あゝ物の怪！……祟り……死靈！

ト忽ち悚然としたる思入。

ト座禪の膝は、もうとうに崩れてしまつてゐる。

これより先き義時が頻りに「南無文珠菩薩！」を繰返してゐた時分に、
 堂の背面の扉が音もなく開けられて、伊賀の方が、脱いだ被衣を小脇
 に抱へて、そろ／＼と龕の下手へと廻り出ても、じつと義時の様子を
 窺つてゐたが、此時しづかに前の方へ歩み出る。

時刻はまだ午後の四時過なのだが、こゝは樹木が繁茂してゐる上に谷
 間であるから、傾きかゝつた日光は、もう殆ど直接には映してゐない。
 随つて、堂内の如きは、もう大分うす昏い。て、一週間以上の難行で、
 今だに衰へてゐる伊賀の方の相貌は、如何にも重病人らしく、蒼白く
 も見られる。

さて、義時は、我知らず後ろが見られるやうに感じたらしく、先づ窺
 と上手の奥を見やり、やがて背後を窺ひ、次第に下手へと其目を轉じ
 た。ちやうど其途端に、伊賀の方が、下手の奥から廻り出たので、
 義時の臆病げな其目は、はたと伊賀の方の顔と出逢つた。義時は眼球
 が飛出すかと思ふほどに目を瞠つて、覺えず禮盤の上に突立つたが、
 忽ちよろめいて踏みはづし、よろ／＼と二足三足、上手の前寄へとた
 びろぎ、そのまゝのめるかと思ふうちに、ちやうど手に觸る曲糸を力
 杖にして、やつと踏み止まつた。さうして進みもせず、退きもせず、

石の像のやうになつて、じつと伊賀の方の顔を見詰めてゐる。

ト伊賀の方は、如何にも病んで疲れてゐるらしい力ない聲で、しづかに、とぎれ／＼に

伊賀 わが夫、御免下されませ。……もうお行は果てましたか？

トいひつゝ、禮盤の下手へ進み出て、一寸膝まづいて

思ふたより早いお快氣……ほんに悦ばしう存じまする。

ト此間に、義時は、だん／＼我に返り、もう既に恐怖の表情だけは跡もなくなつたが、なほ顔りに焦々するらしい心を、じつと自ら制して、辛うじて落ちつき、曲糸に腰をおろし、むづかしい顔をして、不興げに黙つてゐる。

ト暫く間をおいて、伊賀の方は又言葉を繼ぐ、やつぱり力なげな聲で、時々術なげに息を吐いて、とぎれ／＼に言ふ。

お行の妨げをせまいたため、わざと案内をばさせませいで、卒爾にお見舞申しました。若し御機嫌に叶はなんだら、どうぞ慮外をばおゆるされませい。……わらはも、あの翌る日から、持病が起つて、此間中は、枕に就いてばかりをりましたが……けふは、餘儀なく申さねばならぬ事があつて、……お見舞かたがた参りました。

ト義時は心が落ちついたらしいが、尙ほむづかしい顔をしたまゝで

義時 ふむ！ 餘儀ない大事？ といふのは？

伊賀 餘の儀でもござりません、我家の跡目相續の事について……

トいひかける。義時はぎつくりして、また忽ち沈着が破れかけて

義時 え？ 又あの、此間の相談か？

トいひつゝ不興げに顔を背ける。

伊賀 (苦しげに、静かに) いかにも、あの事に就きまして、家國の爲には、申しにくい事も申さねばなりません。……幸ひ一旦は御平癒あつたとは言へ、もはやお年の上の、かうした御容體であるからには、現に四五日前のやうな不慮の事もあつて見れば、——かんまへて安心はなりません。家のため、また天が下のためをおぼしめすなら、今の間にこそ後々の事をも、とくと指圖しておかせらるべきでござります。これはもう既に先日も、一わたりは申し上げましたことなれども、けふは取りわけ、曲げても申さねばならぬ仔細あつて——

ト息苦しげにいひかける。これより先、義時の面上に、次第に猜疑、憎悪、憤怒なども解釋せられる表情が交代したり、混淆したりして現れ、其都度、義時は目をけはしくして伊賀の方の顔をきつと見詰めてゐたが、此時もう堪へかねたらしく、はらだ／＼しげに

義時 それで、……どう指圖しろといふのだ？

ト聲の調子は低いが、手強く、口早に、むしろ反撥けるやうに言ふ。
けれども伊賀の方は、やつぱり前と同じ調子で

伊賀 さア、先日も申した通り、和田の一族が亡びて後は、由緒なり、權勢なりの、直に我家に次ぐものは、先づあの三浦の一黨ばかり。彼等を巧妙に用ふれば、末長う無二の身方、我家國の柱石ともなるべきなれども、若し野心を抱かせたら、我夫亡き後には片時も安心はなりませぬ。豫て我夫にも其處に御用心あつたればこそ、あの義村をば政村の烏帽子親とはなされたのでござりませう。わらはが世の思はくをも顧みず、政村を是非お跡目にと望みまするも、畢竟は、あの義村の心をば攪らんため。これぞすなはち我北條家安泰長久の大計にござります。或は、わが實の子可愛さの女心、身勝手ともおぼしめすまいものでもなければ……

トいひかける。

義時 (皮肉に)では、さうでないといふのか？

伊賀 はて、おほせまでもないこと！

義時 (手強く)虚言を吐け！

伊賀 え？

義時 剛慾をかはきをるな！

伊賀 え！ 我夫？ 何といはせられます？

義時 (向き直つて)おれを欺すことが出来ると思ふか？

伊賀 え！

義時 (睨みつけて)やい！ おれが目を瞑るのを俟つて、あの實雅を將軍とし、政村をば表に立て、兄の光宗に執權の實を握らせ、自分は尼御臺の役をしようといふ陰謀であらうが！

トきつと言つて、ふつと手に觸る戒刀を、半無意識に左手に攔んで、
禮盤の上に居丈高になる。

伊賀 まア、思ひがけない！ 疑ひにも事を缺いて、てもまア！ あんまりな、あさましい、その……

トいひさして、後は言へないといふ風に、泣く。

義時

(トそれをじつと睨みつけて)いゝや、それに相違ない。此四十年來、おれの……(ト喘ぎながら)密事を悉く知つた者と言つては、あの深見三郎次郎たつた一人の外にはなかつたが、その深見めがあの公曉の事からして、おれの手にも負へぬ程に増長しをつて……

トいひかけると、むら／＼と過去の事を思ひ出されて来たらしく、じつと向うを見詰めながら

すて、おけば、何を爲いだしをるか圖られんので、手早く彼奴をかたづけけるために……
(いったが太い息を吐いて) あゝ！ 女と小人！……つい何もかも知らせてしまつたのが俺の誤りであつた！……

ト急に伊賀の方を見返つて

そこへ附け込んで、強もてと跡目を取らうといふのだな！

トきつといふ。

伊賀 何といふ……情けない……そのわるずぬ！

トいひさして、わざと取亂して泣く。之より先き、義時「どう指圖しろといふのだ？」と叫んだ頃に下手の降り口へ深見小三郎がそろ／＼と降りて来る。さうして伊賀の方の「先日申した通り、云々」の白の間に、堂の下手側面の石段を上つてよろしく思入、その火燈口式の窓に寄りそつて、内の様子を窺つて居り、此時、義時の此言葉を聞いて、大いに驚く思入あり。なほ息を殺して聽いて居る。

義時 いいや、さうだ。きつとさうだ。やい！ それを俺が怖れると思ふか？ おのれ！ 俺の

密事の有りつたけを、えい、何處へなりと、だれになりと、披露しをれ！ 吹聴しをれ！
うぬ！……一××××をも物ともせぬ義時だ！ 三××をも島流しにした義時だぞ！
天上天下、此義時に刃向ふ者があるか？ うじむしめが！

ト戒刀を左手に搦んだまゝ、まるで病苦などは忘れてしまつたやうに、猛然として禮盤の上に立つ。此間伊賀の方は、如何にも弱々しく力なげに、鬨の上に突伏して、泣きながら

伊賀 (ます／＼苦しげな息づかひで) あさましい其疑ひを晴らすため、……所詮、いはいては叶はぬことゆゑ、……今いうた表立つた仔細いりびねの外の、餘儀ない理由ことわりを言ひませう。……(ト喘ぎながら) 政村をば跡目にと願ふのは……ゆめさら生さぬ仲の子を疎み、生みの子を世に立てたいなれんどいふ、さうしたさもしい慾心でない證據は……

ト苦しげに息を継ぎながら

此間からのわらはのわづらひ。……その原は……さる怖ろしい……死靈の祟り！

トこれにて義時はぎつくりしたる思入。

義時 え！

トいふと共に、突立つてゐる威嚴のある姿勢が、又淺ましく崩れかけ

る。伊賀の方はきつとそれに目を附けたが、又忽ち病苦を装ひ、なやましげに喘ぎつゝ

伊賀

これ、御覽なされ、わらはの此五體の衰へを！ わらはも我が夫と同じ様に、とりわけ此十日このかたは、夜毎のやうに、其死靈に祟らるゝ、身の悩み、心の悩みに、眠られねばこそ此衰へ！……（ト苦しげに息を繼ぎて）政村を跡目にと願うたは、ひたすら其死靈をば和めうため！……なれども、はじめは、心の迷ひかとも疑ひ、中頃は父や兄の名に恥ぢて、有りのまゝには言ひ出しかね、今も今とてわざとこしらへて申したゆゑ、御不興の上にその疑ひ！……

ト又泣く。義時はまだ突立つたまゝであるが、前の居丈高の擬勢は脱けて

義時

死靈とは？……死靈とは、何の死靈？……

ト半信半疑の體で、伊賀の方をきつと見下しつゝ言ふ。

ト伊賀の方は、なほ俯向いたまゝ、はじめは泣聲で、低く、とぎれ／＼に物を言ふ。其中に、それが、だん／＼と調子高になり、モノトナスな、しゃがれた、物すこい聲に變つて行く。

伊賀

淺ましや！ 悲しや！ 怨めしや！ かけし年ごろの大望の、人の爲に謀られて、うたか

たの、跡もなく消えしだにも怨めしいに……何の科もない可愛し子をば、あの花のやうなわく子をば、人手にかけて、非業に失うたる其怨み！ 一つの世にかは忘らるべき！ 魂魄永く此土に留まり……

トだん／＼言ふことが物すこくなると共に、伊賀の方の表情もそれにつれて變化し、とゞ、すつくと起つ。これにて義時悚とした思入。思はずたち／＼となる。ト伊賀の方は、又忽ちばたりと倒れ、如何にも苦しげに身を悶え、我手て胸元をおさへながら、聲だけはやはり物すこい幽霊聲にて

只一字のみ異なつたる、同じ呼び名の縁に牽かれ、無慚に破れし前生の、その妄執を晴らさんため……

トこゝまではしゃがれたモノトナスな聲で言つたが、又急に持前の伊賀の方の泣き聲に戻つて、苦しげに喘ぎながら

夜毎にわらはの夢枕に、あさましい姿を現し、政村と生れ換つた政範に……此家の跡目を譲らばよし、若しそれをさへ拒むならば……

ト苦しげに喘ぎつゝ言ひさして、又顔りに身悶えし、忽ち又前のしやがれ聲に戻つて

もしそれをだに拒むならば、見よく今に、おのれ、怨めしい極重悪人！

ト伊賀の方又すつくと立ち、義時をきつと睨みて

今に其報いを見せてくれん！ まづおのれが後添ひの……此女めを！ 此女めを！ これを見よ！

ト伊賀の方又ばたりと倒れ、はげしく身悶えし、盤の上を轉げ廻つて苦む。義時我知らず其そばへ寄らうとする。此うち伊賀の方の小桂は脱げ落ちる。夏衣裳の肌薄なので、轉げ廻るうちに、袖口、襟元のみだりがはしくなるにつれて、腕、胸元など折々あらはになる。ト一正の蛇が二つの腕に巻き附いてゐるのが見える。さうしてそれが、突然鎌首を立て、義時に向ふ。義時はびつくりして、小聲で

義時 あゝ！

ト叫んで後へ退る。これと同時に、伊賀の方の頸にも一正蛇が纏ひ附いてゐるのが目に附く。途端に、伊賀の方の裾からも、又小さい奴が一正這ひ出し、義時の足元へ近寄る。で、義時はうろたへて避ける拍子に、それを踏む。トすぐに其足首に巻附く。これにて義時は、身悶えして、とゞ、そこへ卒倒する。

ト蛇は悉くいづこへか逃げてしまふ。此間、伊賀の方は、氣絶したやうにもてなして、じつとしてをり、脱げた小桂の蔭から、そつと頭だけ擡げて、義時の様子を窺つて、よろしく思入。

此以前、小三郎は、窓の外にて、始終の模様を見てをり、驚く思入よろしく、此時さすがに捨ておきかたといふよりも寧ろ本能的にといつたやうな風に、傍の扉を開けて走り入り、先づ義時を抱き起し、よろしくこなしあつて、ふつと直後ろの卓子の上の薬湯に目を附け、それを取り、やがて義時に飲ませ、介抱することよろしく、小聲にて御前！

と呼ぶ。義時やう／＼息を吹返す。けれども一寸目を開いて見て又閉き、術なげに喘いでゐる。

此うち小三郎は、卓子の撞木に目を附け、手早くそれを取り、軒先へ走り出て、喚び鐘を打鳴らす。伊賀の方は、尙ほもとの通り、突伏したまゝである。

程なく、堂の背後から 小柴と田毎、又下手の降り口からは右近が、共に急ぎ足で駈けて来る。

第三幕

第一場 義時の寢所

正面の上手寄五間程の間は上段の間風に設置つたる義時の寢所。(こちらから見ると、舞臺面全體がやゝ漏斗状に見渡さるゝ装置。)其奥の見切、四間の間には一面の壁代を垂れ、其壁代の兩端の柱から上手へかけて、ずつと斜に三間程の間は、同じく壁代。又下手へ斜に、同じ間数の間は壁。

上段の間の直前は、一帯に落ち間。上段の間と此落ち間との間には簾が降るやうになつてゐる。(漏斗状の装置ゆゑ、此落ち間は、上段の間の框の邊では五間程だが、舞臺端では、六七間になつてゐる。)

此落ち間の上手には、上段の間の壁代と準へに、斜に簾が降されてあ

る。其の簾の上手に板敷の長廊下の一端が見える。其長廊下の正面は板羽目。

又、落ち間の下手には、上段の間の壁と準へに斜に降されてある簾を隔て、奥へ細長くなつてゐる次の間。其奥の突き當りには妻戸。それから下手の奥寄の方の見切は板羽目、前寄りの半分は蒔格子。

上段の間の中央に、義時、幾枚か重ねて敷きたる敷蒲團の上に疊み上げたる寢具(まのひもの)に靠れて、苦しげに肩で息をしてゐる。右近、其下手に坐りて藥湯の準備をしてゐる。

よき處に屏風、脇息、厨子、藥餌の調度、燈臺など。

落ち間のやゝ下手に、加持の藤内、斜に義時の方へ向いて、膝に兩手を置き、頭を垂れたまゝ、思案に暮れてゐる體。それよりも更に下手の前寄りに、小三郎、これも頭を垂れ兩手を膝に突いて、澁面を作つてゐる。此落ち間にも一脚の燈臺。

次の間には、蜂王と砂王とが、双六盤(すいろくばん)を間に置いて、双六をしてをり、侍女の甲、乙、丙が其周圍に坐つて、それを觀てゐる。いづれも夜伽の體なのである。こゝにも一脚の燈臺。時刻は前の幕と同日の午後九時頃。

義時 (靠れて、俯向いたまへて、力の無い聲で) 右近! 右近!

右近 はッ!

ト傍へ進む。

義時 (同じ態度のまへて) まだ、婆は、歸つて來んか?

右近 はい。……まだ、退つて参りません。

義時 御所へ往つたにしては、手間が取れる。どうしたのだらう?

右近 ほんに、どういたしましたことやら! しかし、もう程なく、立歸りますでござりませう。

……お白湯でもさし上げませうか?

義時 不要! 不要!

トいひつゝ、呻く。右近は摺り寄つて介抱する。

此うち、落ち間にじつと控へてゐた藤内、少しく頭を擧げて、義時を仰ぎ見て、一寸思入あつて、聊か膝を進めて

藤内 押し返して、お願ひを申し上げますは、お慮外ではござりますが、どうかその、せめてお次の間で、お夜詰をいたしますことだけなりと、許してお遣し下されませ。何がまア御機嫌にさりましたやら存じませんが、十四の年から十八の今年まで、人幾倍の御寵愛

を受けてをられた仁だけに俄の御勘當が、一段といぢらうござります。どうかまア、お次でお夜詰をいたしますことだけは……

トいひかける。これより先、義時は煩げに、頭をぶる／＼させて、小聲で、「黙れ! 黙れ!」と俯向いたまへて、二度ばかり命令したが、耳の近くない藤内には聞えぬかして、尙ほも喋舌りつゞけるので、きつと頭を擧げて

義時 え、うるさい!……黙れ!

ト一喝した義時の顔の色は、前の場のそれよりもずつとわるい。殆ど血の氣のないやうにも見える。藤内は口を嚙む。同時に、義時は下手にゐる小三郎に目を附けて、不快げに

あゝ! まだ! (トこはい顔をして右近に) なぜ小三郎めを退げん?……目通りは叶はん。……退げッちまへ!

ト焦立たしげにいふ。

右近 はッ。……これ、藤内どの、かうしたお不加減の折に、しつこうお願ひ申すのは、な、却つて不爲になります。いづれ、機を見て、わたしらからも、まゝ、ともかくも、小三郎どのを。(トいつて特に小三郎にも) な、小三郎どの!

ト呑み込ませる。これにて藤内は思入あつて、小三郎はよろしくこな
し。小三郎は、無言にて、義時はじめ右近、藤内へ會釋して起ち、徐
かに次の間へ出て、何か沈思しつゝ、突當りの妻戸を開けて出て行く。
後に藤内は、手を組み、頭を垂れ、考へ込んでゐる。

義時 小三郎めは退つたか？

ト俯向いたまゝといふ。

右近 はい。退出いたしてござります。

義時 (同じ態度のまゝして) 藤内はをるか？

右近 はい。あれに控へてをります。

義時 (少しく顔を擧げて、下手を見て) 藤内！

藤内 へい〜！ (ト膝を進めて) 何か御用でござりますか？

義時 若黨共によく吩咐けて (ト嚴格な聲で) あの小三郎めの振舞に氣を附けさせろ。

藤内 へい〜。かしこまりましたござります。

ト義時は、此命令をした爲に、息を切らせて喘ぐ。右近は介抱しながら

右近 どうやら甚うお術なさうな。やつぱりお横のはうがよろしうはござりませぬか？

ト義時無言にてうなづく。右近かひぞへして、仰向に臥かし、寢具を
被せかける。

義時 (仰向けになつてゐて) 右近、奥は、あれから、どうした？

右近 はい。あの……あれからあの、何でござりました。全くお正氣があらせられませんかやうで
ござりましたので、早速紀河の矩秀を呼びに遣はしまして……

義時 (不快さうに) あゝ、矩秀！

右近 種々と御介抱申し上げましたところ……次第にお心確かにならせられました……

義時 あゝ、もうよし！ もうよし！……措け〜！……今は……聞きたうない！ 聞きたうな
5-1

ト口早にいつて顔を背ける。これにて右近口を嚙む。

一同暫く無言。次の間では尙ほ双六の勝負を續けてゐる。

ト義時又苦しげに呻く。右近は急ぎ介抱しようとする、義時は喘ぎ
ながら

婆は、まだ、歸つて來んか？

右近 はい。まだ……退つて参りません。

義時 あゝ！……

ト義時は本意なさしうに

ト太い溜息をしたが、又暫く無言。やゝあつて又

右近！

右近 はいく。

義時 暫時眠りたい。簾をおろしてくれ！ その簾を！

右近 かしこまりました。

ト徐かに上段から落ち間へおりて、次の間の方へ向いて、小聲で

侍女たち！ 侍女たち！

ト呼ぶ。これにて侍女、甲、乙、丙

侍女 はア。

ト小聲で答へて、落ち間へ入り来る。

右近 しばらく御寝なるほどにの……

トよろしくこなし。これにて甲、乙、丙は徐かに上段の間にあがり、

右近の指圖に従つて、調度をかたづくることありて、とゞ正面の簾を

おろし、右近と共に落ち間へおりる。右近は

では、御機嫌よろしうお寝み遊ばされませ。

ト會釋して起つ。侍女らは元の次の間へ退る。

此間、藤内は、手を組んだまゝ、何か心配げに考へこんでゐたが、右

近が落ち間の上手に住ふと同時に膝を進める。

藤内 でもまア、こんなことで済んで、ようござりましたなア。つい此間の今夜といひ、肝腎の力綱の行違どのは他行中といひ、ま、どうなることかと案じ抜きましたか……

トいつて、あたりへこなしあつて、聲をひそめて

一體まア、けふは、どうなされたのでござりませう？ あの通り甚いお元氣でござらつしやつたのに。何かまた奥さまと、争論でもさつしやつたのでござりませうかな？

右近 さア、真先きに其場へ駆け附けたあの小三郎どのさへ……何にも知らぬ……といふのが不審。

藤内 されば、……(ト考へて) 思ひ餘つて、つい、とんだお慮外を申しあげて、御機嫌を損ねたは此藤内。それなのに、其藤内にはお咎めがなくつて、あのお氣に入りの小三郎どのを、御勸氣(ト又考へて)といふのも不審。

右近 小三郎どの、目の色が例になく……(ト考へて) 血走つてゐるのも……一つの不審。

藤内 掃除のよう届いた筈の、あのお庭の、しかも四阿しやまの中から……(ト考へて)蛇へびが這ひ出して来たのも不審。

右近 それに、あの小三郎の御密訴のやうにもなく、何氣なげに取りすました、あの奥方の、いつにないお見舞ぶりも不審の一つ。

トいつたが、きつと向うを見て

それにつけても、あの亘理どのは、なぜ遅いか？ 一刻も早く御所のお模様が聞きたいのぢやに。……あ、何かと氣の揉めることばかり！……

トいつたが、藤内の方へ向き直つて

藤内どの、とにかく、こよひは、油断がなりませんぞ。さしづめ、若黨衆に吩咐けて、四方の御門をば固めさせて下され。

藤内 心得ました。手前もさう思つてをつた所でござります。では、早速に手配りをいたしませう。御免下されませ。

ト藤内は、右近に會釋して、次の間へ出て、妻戸口から出て行く。や

がて右近も起ち上つて、上段の簾際に立寄り、内を窺ふ思入あつて、うなづき、すぐに次の間へ出て、侍女らに

右近 どうやら御安眠遊ばしたやうぢや。急にはお目ざめにもなるまい。わしは、ちよとお表へ往つて來ます。その間、暫時しばらく、おぬしたちに頼みましたぞや。

皆々 はい。かしこまりましてござります。

ト右近は妻戸口から出て行く。侍女らはよろしくこなしあつて、又双

六をはじめめる。こんどは、砂玉、峰玉は觀る方へ廻り、甲と乙とが双

六盤に相對する。

四つ(午後十時)の鐘が鳴り渡る

燈臺の火形が、——三ヶ所とも、——段々暗くなりはじめ、上段の間のが

真先に、次の落ち間のが、其次に次の間のが消える。

第二場 夢の裡の幻景

燈火が昏くなりはじめると同時に、四方が朦朧となつて來て、遂に眞ッ昏闇となる。

其うちに、奥の方にて、遠く陣具、陣太鼓の音が聞え、鬨の聲が聞え、

それが次第に近くなるにつれて正面の簾の中が夜が明けてゆく時のやうに、だん／＼明るくなり、とゞ月夜ほどの明るさになる。

トそれと同時に、以前の簾のうち、と思はれるあたり一ぱいに、一の幻景が展開される。それは、京都の法皇の御所の正門前の景であるらしい。

中央よりはやゝ下手寄りの、ずつと奥に、遙かに院の御所の檜皮葺きの正門が、たかゞ五尺ぐらゐの高さになつて見えてゐる。其上手、下手は、式の如き築地なのだが、こちらから見ると、それが正門を頂點トピークにして漏斗状に左右へ、ぐつと斜に開いてゐるので、前面に大きな空間スペースが出来てゐる。其廣々とした空地にもまた築地の内外にも、樹木などは、只の一本も見えてゐない。

此景が、まるで幻燈畫のやうに眞ッ正面に現れると同時に、上手で、男女老若の哭声叫ぶ聲々が、陣鉦、矢叫び、鬨の聲なぞと混淆ごうごうになつて聞える。

ト上手から大勢の男女老若が、こけつまるびつして、逃げて来る。(それは、以前落ち間のあつたあたりで、上段の間の直前すくまへが、いつの間にか、都大路に變つてゐるのらしい。)其老若の多くは殿上人である。衣

冠のものもあれば、束帯姿の者もある。緋の僧衣の老僧もあれば、五つ衣ぎんぎの官女もあり、立烏帽子、風折もあり、尼もあり、童もある。地下も、雜式もゐる。

これらが、こけつまるびつして逃げて来る後からは、夥しい鎧武者が、武器々々えきものを揮り翳して追つかけて来る。

で、一同は、右往左往に逃げ惑ふ。ころぶ、突倒される、踏みにじられる。切殺される者も尠くない。見る／＼、其多數は血みどろになる。早い話が、土佐、住吉の古い軍繪巻中の内裡攻めか何かの一枚に魂が入つて、活きて働くのかと思ふやうな、慘いたましい活畫である。

暫くして群衆も、鎧武者も、追ひつ追はれつして、左右に散つてしまふ。

ト遠くの御所の門内から、一群の鎧武者が練り出して来る。馬上の立烏帽子の武者は其大將らしい。遠いから、いづれも二三尺ぐらゐの身長たに見える。

つゞいて四方の坂輿さかこ——例の屋形をはづしたの——を雜式が昇いで出る。其脇には、殿上人らしいのが二人、僧が一人附添つてゐる。其後からは、又も鎧武者の一群。此行列は、門からずつと斜に、上手の前

へと徐々と練つて行き、やがて見えなくなる。

トだん／＼四下が昏くなりはじめ、遂にはまた眞ッ昏になる。
ト思ふうちに、又だん／＼明るくなりはじめ。
見ると、いつの間にか、すぐ前の處——以前落ち間のあつた邊は——
杉並木の景に變つてしまつた。さうして其杉並木は、大抵梢が見えな
い程に丈が高く、隨つて幹も——上手寄のなぞは——中々太いのであ
るが、それが、中央から上手へにかけては段々密接して立ちならび、
下手の方は、ずつと疎らに生えてゐるので、奥の方が透いて見える。
て、御所の正門や上下の築地が、尙ほ先刻のまゝ、残つてゐるのが見
える。

ト男女の悲しげに泣く聲が下手の方で聞えて、やがて女御らしい貴婦
人と女房一人、女童一人、立烏帽子の公家一人、品のよい尼一人、都
合五人が、泣く／＼下手から出て来る。さうして、上手を見て、急ぎ
並木の蔭へ隠れ、共に上手を指さしなどして泣いてゐる。

ト上手の奥で、いかにも哀しげな雅樂の音色が聞え、それにつれて、
立烏帽子や風折をかぶつた鎧武者共が、多くは長巻を携へて、列を正

して練り出して来る。其うち、馬に乗つてゐるのは大將分らしい。其
後から雜式が四方の坂奥を昇いて来る。殿上人らしい二人と一人の僧
とが、泣く／＼附き添つて出る。さうして其後には、第二の鎧武者の
群が続く。

ト前の五人づれが、こらへかれたといふ風に、並木の蔭から駈け出し
て来て、奥へ纏る。武者らが驚き怒り、こはい目附をして、これを逐
ふ。

此騒ぎの末ごろ、奥はもう下手へ入つてしまひ、第二群の、しんがり殿の武者
共も既もう殆ど下手へ消えかけるといふ時分に、又も向うの御門内から
第二の同じやうな行列が練り出して来るのが、並木ごしに見える。さ
うして、それもまた、前と同様に、斜に上手の方へと練つて行つて
やがて見えなくなつてしまふ。

ト又も並木の上手で、前と同じやうな哀しげな雅樂が聞えて、そこか
ら前のとそつくり同じといつてよい一群の行列が練り出して来る。眞
先が四五人の鎧武者、其中の一人は騎馬。そのあとから四方の坂奥。
又そのあとからも鎧武者の群。

奥が並木の中央まで来ると、下手から、又も最前の五人が駈け出して

来て、前と同じやうに輿に取纏らうとする。又無慚にも逐ひ散らされる。

ト又も奥の正面の御所から、第三の、同種、同形式の行列が練り出して来る。やがて前景に於ても、前々のと全く同一様の現象が展開される。それが又、同一様の手續で、無慚に逐ひ散らされる。

ト見るうちに、又も眼界が少しづつ昏くなりはじめ。遠景の御所の門や築地が模糊となつてしまふ。

トどしどし、どうツツと凄じく打寄せる高浪の音が聞えて来て、並木の奥に、遙かに一の離れ島を浮べた荒海の景が現れ、並木のすぐ後ろの荒磯から先刻の坂奥らしいのを三臺までも載せた船が、今ちやちど漕ぎ出でつゝ、其島の方へと進んで行かうとしてゐる。

ト次第に浪の音は薄れて行つて、絶えて、古風の神樂の鳴り物が聞える。見ると、いつの間にか下手寄りの杉並木は跡形もなく消えてしまつて、そこに小山の裾らしい小高い芝生が見え、又中央から上手へかけての並木も、最も太い三四本の幹だけを残して、其他はなくなり、その代りに、大きな、高い、幅廣な石段の裾の三分の一ばかりが見えてゐる。

ト下手の小山の蔭から二人の鎧武者がうそくと出て来て、何か囁き合つて、あたりを見廻し、人待ち貌である。すると、太い幹の間から、烏帽子、直垂の、四十年輩の、一癖ありげな武士が、前後に氣を配りながら出て来て、何か前の二人へ合圖らしいことをする。ト二人は忽ち見返り、すぐに其傍へ行く。武士は二人へ何か言ひ含める。二人はすぐ上手へ入る。武士は一人残つて、手を組み、何か考へてゐる。

ト上手の石段の上からだれやら降りて来る。はじめは、杵を穿いた足と奴袴だけが、妙に目立つて見える。實際、一二分間は、其足が石段の上の方に生え附いたやうになつてゐる。其うちに徐り／＼動き出す。降りて来るにつれて、それは衣冠姿の立派な殿上人だといふことが分る。いふ／＼地上に降り立つのを見るとそれは八九年前の——即ち全盛時代の——義時なのである。右手には儀式用の、黄金造りの御劍を捧げてゐる。

前の武士は、義時を見ると、すぐに駆け寄つて、何事をか報告するらしい。義時は大やうにうなづいて捧げてゐた劍を、竹片でも棄てるやうに、路傍に投げすてる。

ト此途端に、ちら／＼と雪が降り出して、見る／＼大ぶりになる。其

間に、いつの間にか、下手へ大きな石の鳥居が出来る。
ト上手の奥から又も神樂の音色が聞えて来る。すると、義時は、きつと上手へ思入あつて、武士へ何事をか耳打して、やがて二人とも鳥居の下手へ身を隠す。

程なく、上手から、石段の前を横切つて、一人の年若い、緋の僧衣を被た端麗な僧が出て来る。やつと十八九てもあらう。それが鳥居近くへ来ると、義時と武士とは急いで出迎へ、武士は如何にも恭しく、義時はにこやかに、敬禮する。僧はそれを喜んでゐるらしい。

そのうちに、義時は、何か武士に耳こすりをして、自分は例の幹かけに入つてしまふ。ト武士は居残つて、僧の袖を引張つて、石段の下まで連れて行き、上の方を指さし、頻りに何か囁くらしい。ト僧は切齒扼腕して、くやしがる。武士は四下を見廻し、義時が棄てゝ行つた先刻の劍を拾つて、それを僧に渡す。僧はそれを受けとり、うなづいて、武士と共に、例の太い幹の蔭へ隠れる。

ト雅樂の、何となく悒鬱な音色が、上手の奥から聞えて来る。さうして、それにつれて、石段の上から、又たれか降りて来る。義時が降りて来た時と同じく、最初は沓と袴の裾とだけが、暫時固着したやうに

なつて石段の上の方に見えてゐる。其うちにそれが動き出す。降りて来るにつれて、それは束帯姿の人と衣冠姿の人であることが分る。よく見ると、それは前將軍實朝と文章博士の仲章なのである。仲章は手に御劍を捧げてゐる。二人が地上に降り立つた其途端に、前の僧が――いつの間にか、白装束の下に腹巻といふ公曉禪師の打扮になつて躍り出て、只一刀に實朝を斬り斃し、返す刀で仲章をも刺し殺し、すぐに實朝の首を打落し、それを刀の先きに貫いて、高く捧げ挙げ、嬉しげに何か叫ぶらしく、天を仰いで大きく口を開く。

ト最前の武士が、拔足して、其うしろから忍び寄つて、只一刀に其腹を背から前へと貫く。其切先が下腹の前へ三四寸がた突き出たのが、まざくと見える。公曉はすぐ斃れてしまふ。

此間、雪はますます降りしきつてゐる。

武士は、公曉の斃れたのを見て、にったりと思入して、つかくと下手へ行かうとしたが、どうしたか俄に苦み出して、雪の中へ倒れ、七頭八倒するうちに、口から夥しく韓紅の血を吐く。

此うちに雪は全く降り止み、あたりがだん／＼昏くなりはじめ。ト

何處ともなく、平家琵琶の撥音が聞えて来る。

やがて四方がまた次第々に明るくなる。三本の太い幹だけは元の通りに残つてゐるが、鳥居はいつの間にか無くなり、其代りに、そこに池の水際らしいものが現はれて其邊一ぱいに眞菰だか菖蒲だか生えてゐる。

悶え苦む武士と公曉のらしい死骸とだけは、元の處に残つてゐるが、他には人の影もない。勿論、雪の跡形もない。

それから、上手の石段がなくなつてしまつて、そこには池に臨んでゐる釣殿めいた建物が見え、燈火があか／＼としてゐるので、その籬越しに、琵琶法師の影が透いて見える。

「平家」の撥音は尙ほ續いてゐる。明月が中天に冴えてゐる。

ト太い幹の蔭から、義時が——立烏帽子に水干、附け太刀といふ打扮で——出て来る。此時、血を吐いてゐる武士は苦しさに堪へぬらしく、水でも飲まうとするのか、這つて池の方へ行く。義時は徐かに其後に附いて行く。ト武士は、苦みながら、ふとそれを見附けて、怨めしげに見上げる。義時は、すぐに片脚を擧げて、武士を池の中へ蹴込んでしまふ。ばつと水煙が立つ。

途端に撥音が止んで、ホーンといふ梵鐘の音が聞える。

義時は又徐かに上手へ歩み戻つて、公曉の死骸らしいものを抱き起す。見ると、それは公曉ではない。直垂を被た十四五歳の美少年の死骸なのであるが、これも口元から襟へかけて、韓紅の血が夥しく流れてゐる。毒でも飲んだのらしい。じつとそれを見詰める義時の貌には、一種の苦悶の色が浮んでゐる。やがて抱いてゐる手を離し、死骸を元の通りに倒しておいて、そのまま下手へ行きかけたが、さすがに忍びかれるといふ風に、又戻つて来て、再び死骸を抱き起す。

釣殿の燈火は之れより先きに消えてしまつてゐたが、此時その眞昏な釣殿の中で、悲しげにワーツと哭く女の聲が聞える。義時はそれを聞くと、ぎよつとした思入で、急いで例の幹の蔭へかくれる。

ト上手から四十六七とも見える一人の女房が、被たる衣裳もみだりのはしく、黒髪を振りみだし、全く狂氣の體で駈けて来て、少年の死骸を見るとそのまゝ、ひしと抱きついて、天を仰ぎ、地に伏しまるびて、慟哭するらしい。不思議に其聲は聞えない。或は頬摺をしたり、抱きあげたり、或は抱いたまゝ、駈け廻つたり、暫くは前後不覺の有様であつたが、とゞ奮然として突立ち上り、懐劍を抜き放つて逆手に持ち、

目をいからせて、あちこちを見廻すは、わが子の敵を捜すのであるらしい。其うちに、此狂女の目が、幹の蔭に隠れて、じつと様子を窺つてゐる義時の目と、びたり出逢ふ。ト狂女はすぐに懐剣を振り閃めかして、まるで夜叉のやうな勢ひで、其幹蔭へと突進する。義時は駭きあわて、三本の幹の周辺を、幾たびも廻つて逃げる。狂女は其後を追ひ廻る。

此うちに、空には黒雲がはびこつて来て、月は隠れ、あたりが又昏くなる。やがてピカリと電光がして、雷が段々近く鳴り渡る。

どこへ隠れたか、義時の姿は見えない。狂女はます／＼猛り立つて、物凄しい形相をしてあつちこつちと捜し廻つてゐる。見ると、狂女の相貌は、いつの間にか、真正正銘の、怖ろしい夜叉のそれに變つて、其振亂した黒髪は、毛が數十本づゝもつれ固まつて、太い針金のやうに波を打ちつゝ逆立つてゐる。よく見るとそれがいづれも蛇となつて鎌首を擡げ、紅ゐの舌を吐いてゐるのである。のみならず、今は懐剣を持てゐない左右の手の、其十本の指も、それも悉く長々と延びて、蛇のやうに、うね／＼と波を打つて、さうして其先きの方は、やはり鎌首を擡げて、赤い舌を閃めかしてゐる。

上手の釣殿も、いつの間にか、薄昏い山蔭の、物凄しい卵塔場に變つてしまつた。樟だか榉だかの大きな枝々が掩ひかぶさり、小笹や雜草や蔓物やが彌が上に生ひ茂つてゐる中に、幾つも／＼五輪が立並んでゐるが、中にも一際目立つ中央のは、高さが五尺程もある。尙ほよく見ると、此卵塔場は怖ろしく廣く、例の三本幹の背後の方までも續いてゐる。そのあたりずつと一面に同じ陰森な山かげで、さうして小笹や茅が生ひ茂つてゐる中に、殆ど無数と言つてよい程の多數の五輪が、其頭だけを見せてゐる。さて鬼女は、義時を捜しあぐんで、又も三本幹の背後へと廻り入つたが、そのまゝ姿が隠れて、暫くは出て来ない。ト上手の卵塔場の最も大きな五輪のうしろへ、義時が突然その姿を現す。顔色が俄に甚しく憔悴して、急に六つ七つも齡を取つたらしく見える。もう酷く疲れ果て、足元がよろ／＼してゐる。大きな五輪につかまつてやつと其前へ廻つて出る、トもう息が切れて堪へられぬらしく、そこに在る竹の花筒を抜いて、其水を飲まうとする。ト其花筒から、だしぬけに青い火がひら／＼と燃上る。驚いてそれを投げ出すと大五輪が音もなく壊れ倒れて、そこに白衣、亂髪、一個の、氣高

い、併しながら何ともいへぬ怖ろしい顔色をした貴人の姿が夢囈として立現れ、きつと義時を睨みつけた。其十本の指はやつぱり悉く蛇と化して鎌首を擡げ、くれなゐの舌を閃かし、駭いて逃げかける義時の首筋元を目がけて飛びかゝるのである。

義時は、こけつまろびつして、三本幹のうしろへ逃げようとする、無数の五輪の頂點が、いつの間にか、悉く^{しやれかうく}骸體に變つてをり、さうして其の中で最も大きい三つ四つは、その空洞の目の穴や鼻の穴から、ひら／＼ひら／＼と青い鬼火を吹き出してゐる。全體の数は實に無数で、見渡す限り、みんな惘體で、實際どこまで續いてゐるのか分らない程である。

で、義時は、又取つて返し、こんどは下手の池の方へと逃げたが、やがて息が切れて、いよ／＼一步もあるかれぬらしく、やつとの事で池の端へ這ひ寄り、眞菰がくれの水を辛うじて手で掬つて飲まうとする。ト池の中からも青い火が陰々と燃え出し、義時が愕いて逃げ退かうとする、其鼻の先きへ、同じく池の眞菰の中から、凡そ十疋ほどの蛇が同時に鎌首を振立てつゝ飛びかゝる。ト見るうちに白衣亂髮の怖ろしい顔色の男が、眞菰の中から、半身を現す。前の蛇は其男の指の先き

なのであり、また其男は、先刻血を吐いて死んだ武士なのである。これと同時に、例の三本幹の間からは、鬼女が姿を又あらはす。數十疋の蛇に化して蠢く黒髪を逆立てつゝ、また左右の手を高く擡げて働かせて、十疋の蛇を躍らせつゝ、耳際までも裂けてゐる紅ゐの口を開き、今にも此方へ駆けて來さう。上手の卵塔場の方からも、先刻の貴人の怨靈らしいのが追つ掛けて來る。

義時は、怖れ戦いて、一生懸命に逃げようとするらしいが、どうしても腰が立たぬらしく、只いたづらに身悶えして、跳き苦しむ。此途端、風とも雷とも地震ともつかぬ一種のおどろ／＼しい物音がして、忽ちに見る限りの處が眞昏になつてしまふ。其昏闇の中で物すごい呻き聲が聞える。

第三場 元の義時の寢所

其昏闇が又だん／＼明るくなると、元の寢所なのである。

簾は依然として下されてあつて、落ち間のやゝ上手には、老女の亘理が、侍女の甲を敵手に、つい今がたまで双六をしてゐたらしく、甲は双六盤の脇に突伏して眠つてなり、亘理も盤に片腕を突いて、こくりこくり居眠つてゐる。次ぎの間には人影が無い。上段の間の中で、義時がうなされて呻く聲が聞える。其聲に驚いて、亘理ははつと目を覺す。トすぐに侍女の甲をもゆり起しておいて、自分は急ぎ簾を襲げて内に入り、義時を介抱する。侍女の甲も續いて上段の間に近寄り、先づ悉く簾を捲き上げる。

亘理 もし！ お夢でござります。お目をお覺しなされませ。

ト起す。義時は尙ほ夢中の體で、跳れ起き、四肢を跳き、五體をふるはせて悶える。亘理はそれを背るからじつと抱き止めて

亘理 お夢でござります。お氣をたしかなされませ。もし〜！ お夢ぢや！ お夢ぢや！

ト子供を諭すやうにいふ。義時はやつと目を開き、亘理の顔をじつと見て、情けない聲で

義時 お〜！ 婆か！……婆！ あ〜！

ト子供に還つたやうな聲で言つたが、やがて太い地聲に戻つて、喘ぎ

喘ぎ呻いてゐる。

亘理 お〜！ では又、お術ないお夢をば御らうじましたか？

トいひく、脇息によりかゝらせて春を擦りつゝ「それ、お薬湯を！」と侍女の甲へこなし。心得て、甲は傍らの厨子に備へてある薬瓶より薬湯を天目へ注ぎ、それを亘理へ渡す。

さ、お薬湯をば、さ、お一口めしあがりませ。

ト義時に飲ませる。これにて義時やつとおちつき、目を開き、あたりを見廻し、やがて侍女を見て、亘理を見返り「彼女を彼方へ！」とこなし。亘理心得て、その通り、甲へこなし。甲はすぐに落ち間へ降り、次ぎの間へ出て、やがて突當りの妻戸口より出て行く。此間、亘理は始終義時の春を擦つてゐる。

義時 (脇息に俯伏したまへて) まだ誰れかをるか？

亘理 いへえ、もうだアれもをりません。

トこれにて義時は溜息をして、太い聲で

義時 あ〜！……くるしかつた……！ (ト喘ぎながら) 此二年このかた……随分たび〜厭アな夢も見たが……。

トいひかけたが、だしぬけに

あ！

ト叫んで、抱いてゐる亘理の手を振拂つて、居ながら二尺ほども跳び退つた。で、亘理は膽を潰して

亘理 ま！ どうなされましたぞ？……もし！

ト追ひすがつて義時の貌を覗く。ト少し落ちついて

義時 そ、それは何だ！

ト氣味わるげに下手を指さす。亘理はそれを見て、ずつと下手へ膝を進め、やがて簾の紐の切れて落ちてゐるのを見附けて取りあげ

亘理 これてござりますか？……（ト義時うなづく）これは、お簾の紐の切れて落ちたのでござります。

トいつたが、一寸思入あつて、やがてこれを懐中へなさめる。

此間に、義時は自身で脇息を引寄せて、靠れる。ト亘理は寢具を其香へ被せ掛ける。

亘理 これてよろしうござりますか？……（ト坐に着きて）最前は、よつほどお術なさうにござりましたが、どんなお夢をごらうじましたのでござります？

トこれにて義時は、靠れて俯伏したまひ、溜息をして

義時 此間も、同じ夢を、二度見た。……それと、不思議にも、八九分がたまでは同じであつたが、……只此間と異つてゐるのは……（ト一つ喘いで）今夜は、予の大嫌ひの、蛇めが出て來をつた！……髪の毛も、指の先さも、何もかも蛇になつて……さうして死んだ奴らが出て來て……

亘理 え！？

ト義時は溜息をして、亘理を見返り、靜かに、ときれ／＼に

義時 伊豆の北條にをつた時分……あれはたしか、予の六歳の時だ。……蛭が小島で蛇に脚を巻かれた！ あれから予は、蛇が嫌ひになつた！……おのしは、女に似合はず、氣丈で、その蛇を鎌で切つて離してくれた。……あ！ あの時分は！……

ト遠い昔をなつかしむらしく、低く靜かに語る其聲は、例になく、一種のやさしみを帯んで聞えた。

亘理 ほんに、あの時分は、まだもう、ねつから、おたいけていらせられましたつけが……トまては言つたが、つい一度に、いろ／＼の記憶が込みあげて來て、胸が一ぱいになつたらしく、亘理は急に口を嚙み、顔を背け、蓋面を作つて、無言で、しきりに義時の脊中ばかり擦つてゐる。

義時 婆！

トヤ、暫くして

互理は、やつと涙を隠して

互理 はい〜！

ト義時は黙つて喘いでゐる。

もし！何か御用でござりますか？

義時 婆！物の報いとか、祟りとかいふことは……あるものかなう？

互理 え！

ト我知らずぎよつとした體で、すぐには答へかれたが、やつと氣を鎮め、分別して、物しづかに

さア、随分あるものでござりませうけれど、それはその、御身分柄にもよります。何の！夢は五臓のお疲れぢやとやら申します。お氣になされるには及びませぬ。……ちと又お脊中を擦りませう。

ト義時のうしろへ廻り、又脊中を擦る。二人とも暫く無言。

此時、落ち間の上手の簾の彼方——長廊下口——へ深見の小三郎が姿をあらはす。目に殺氣を帯んで、腰に小さき刀を佩び、拔足して近づき、

簾際にひたと身を寄せて、内の様子を窺つてゐる。

義時は、尙ほ脇息に俯伏したまゝで

義時 婆！

互理 はい〜！

義時 おれが死んだ後は、……どうなるだらう？……此鎌倉は、どうなるだらう？

トいひ了ると、息苦しげに微かに呻く。

互理 さア！何をおつしやられます！そんな滅相なことがござりまして、どうなりませうぞいな！よしんば、萬々の事がござりましたにせい、泰時さまがいらせられます。尼公さまがお息災でいらせられます。何のお氣づかひなさることがござりませうぞいな！

義時 いや〜！……姉も既ちう六十八だ。先達て見舞に來てくれた時に、さう思つた。あゝ、姉も衰へたと！……ひどく涙脆くなつて、さうして愚癡つぼくもなつた。……もう長くはあ
るまい！……

トいつて、苦しげに二つ三つ喘いだが、急にびくりとして、顔を擧げ、不安らしく口早に、太い聲で

婆！あの小三郎めの事を、藤内によく吩咐けたか？